
バカとデバイスと魔導師 ~バカが奏でる絆の曲~

銀臥

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとデバイスと魔導師 ～バカが奏でる絆の曲～

【NZコード】

N6553X

【作者名】

銀臥

【あらすじ】

八年前：僕が九歳の頃から、全てが変わった。

僕は八年前、偶然『あるロストロギア』を体内に取り込んでしまつた。その時からだつた。僕が、魔導師になるきっかけになつたのは……そして、金色の長い髪に綺麗な紅い瞳の彼女と出会いつきかけになつたのも……

『P・T事件』、『闇の書事件』を解決し、月日は流れ、とある理由で文月学園に入学した僕。任務をこなしつつ、入学してから一年と少し経つた頃だつた……僕は、新たな事件に巻き込まれる。そ

して同時に、彼女達と再会を果たす。

バカとテストと召喚獣とリリカルなのはのクロスオーバー！！！
魔導師となつた明久が！雄二が！シリアルス&ハードボイルドに事件を捜査…なんてできるわけが無い（笑）！！バカな明久が捜査面では意外な活躍を！？そしてドキドキな彼女との同棲生活……巻き起こる、死亡フラグ……果たして、彼らは無事に青春を謳歌しつつ、事件を解決できるのか！？バカとデバイスと魔導師……ここに開幕！！

Prelude（前書き）

前に掲載していた小説を知り合いに消され、ブルーになつてました
が再び立ち上がりました！！
バカとりりなのクロスオーバー作品、どうか楽しんでください！

Prélude

深い、深い……闇。
その中心、一つのぼんやりとした光が見えた。

『……………』

『……………』

光の中で、誰かが話している。

そこに意識を集中せると、突然光が拡がつて闇を消した。

「……………」

この間いか、僕は海岸にいた。懐かしいなあ……」「……………

『フハイトやへん！アキハへん！』

あ、この声……

茶色の髪を二つに結った少女が、金色の髪の女の子と一緒にいた僕に、八年前の僕に向かって近づいてくる。

そうだ、これは……あの時、フハイトと僕の遭遇が決まって、本局の方に身柄が引き取られることになつた時だ……

『あんまり時間はないんだが、しゃべり話してることない。僕達は向こうへ向うるから』

『ありがとう……』

『ありがとう……』

『…………ありがとう』

僕ら三人はクロノさんにお礼を言つと、僕たちはしばらく見詰めあつた。

たくさん、しゃべりたいことはあつたんだけど、それでも、話せなかつた。何故か、話せないような気がしたから……

『話したいこと、いっぱいあつたはずなのに……変だね、フェイトちゃん』とアキ君の顔を見たら、忘れちゃつた

『私は……』

フェイトは何かを言いたそうにする。けれど、今まで人とあまり関われてこれなかつたフェイトには、上手くそれが表現できなかつた。そんなフェイトの手を、小さい僕は優しく握り締めた。

『大丈夫、フェイトが嬉しかった事を言えばいいんだよ』

『私は……』

一拍置き、フェイトは告げた。

『そうだね、私も、上手く言葉に表現できない……だけど、嬉しかつた』

『ふえ？』

『まっすぐ向か合ってくれて』

素直な気持ちを、彼女はなのはに伝える。

フロイト、僕が『アレ』を身体の中に取り込んで、管理局から逃げた時に匿つてくれた女の子……ジュエルシードを集めのを一緒に手伝い、『アレ』と一緒に手に入れたデバイスの使い方を教えてもらつた日々は本当に楽しかつた。

そして、なのは。

最初は敵同士だったけど、そのまっすぐな気持ちに救われ、僕らは彼女と友達になることが出来た。

『うん！フロイトちゃんとアキ君と友達になれたらいいな、って思つたの。でも、今日はもう、これから出かけちゃうんだよね？』

『そりだね…少し、長い旅になる』

『僕も…だから、しばらく会えないね……』

『……また、会えるんだよね？』

『……うん』

『もちろん』

フロイトの母親、プレシアは彼女の目の前で虚数空間に落ちた。とても悲しい事だけど、それは変えることも出来ない事実。だけれど、フロイトは最後の瞬間には母親と真正面からぶつかる事が出来た。

それは、彼女にとつて一番の成長だったから……

「フヨイ……っ！」

彼女の名前を呟いた瞬間、辺りの景色が変わる。

「これって……」

その中では、白を基調としたバリアジャケットを身に付けている女の子と、赤いゴシックローラータ調のバリアジャケットを身にまとった女の子が協力して襲い掛かってくる触手と対峙していた。

『ちゃんと合わせりよ、高町なのは！』

『ヴィータちゃんもね！』

「なのは……ヴィータ」

そう、この一人は……なのはとヴィータだ……ということは、これつて八年前の『闇の書事件』……？という事は……きっと他のみんなも。

『盾の守護獣ザフィーラー砲撃なんぞ、撃たせん！』

彼、ザフィーラが前に出て魔法陣を展開させる。

その魔法陣から無数の棘が現れて、襲い掛かってくる触手を切り裂いていった。

『彼方より来たれ、宿木の枝…』

『「」の詠唱……もしかして！？』

茶色のショートカットの女の子が詠唱を終えた刹那、杖の先から魔法陣が展開され、その前に七つの銀色の魔力の塊が出現する。

『石化の槍、ミストルティン！』

魔法の名を叫び、杖を振り下ろす。

それが合図のように一気に七本の槍が化け物に向かって飛んでいく。

化け物の身体に刺さった槍は、刺さった場所から次々に化け物の身体を意思に変えていく。

「……はやて……」

僕は石化の槍を放つた少女を見下ろしながら、咳く。

この後の展開は……解ってる。そして、その後に起る……僕の罪も。

『行くぞ、テュランダル！』

「クロノ……さん」

『今ならいけるはずだよ。三人とも！頑張れ！』

「この声って……」

僕は辺りを見渡す。そして、なのとはやてと……

「フヒイト……」

金色の長い髪に黒いバリアジャケットを身にまとった女の子、フヒイトがそこにいた。

「…………」

しばらくその姿を見た後、僕は見た。

「…………僕だ」

八年前の僕の姿。
さつきと比べると、多少は成長してるかな?でも僕って童顔だから割と変わらないかも…………うつ、自分で言つてちょっと自己嫌悪。

『全力全開—スターーライト……』

なのはが、

『雷光一閃! プラズマザンパー……』

フロイトが、

『ごめんな……おやすみな』

はやてが、そして……

『今、助けてあげるね』

僕が、魔法を放つ準備をする。

『響け、終焉の笛ラグナロク! ! !』

はやてが叫んだ瞬間、彼女の前に巨大な魔法陣が展開される。三
角形型の魔法陣は頂点となる三つの部分に魔力が集まつていって、
そして……

『『『ブレイカアアアアアアア
！――！――』』

声を合わせて、三人一緒に魔法を放つ。

凄まじい轟音と共に放たれた三つの光は、化け物に衝突する。そ
の威力はきっと僕なんかが間に入つて行つても一瞬で消される程の
力を持つていたに違いない。

三つの光が炸裂し、大きな爆発音と一緒に天に伸びていく巨大な
炎。化け物の身体がなくなつた瞬間を……

『本体コア、露出……捕まえ、た！』

「シャマル……」

金色の髪の女性、シャマルがクラール・ヴィントを使って、コアを
捕獲する。

さあ、ここからが僕の出番だ……悲しい闇の書が、眠る時……

『行け、吉井！――』

『うん！――』

「シグナム……」

ピンク色のポーテールの女性、シグナムの言葉と同時に空を滑
空する九歳の僕。

『アに向かって、空を一直線に飛ひながら軽く足を開き、腰を落とし、右手で握る刀は左の腰へ、左手はその鯉口に添える。僕の刀型のデバイス、フォルトの…『鎮魂一閃』の構えだ。途中で僕に向かってくる攻撃を全てなのは達が空中で迎撃していくた。

今まで辛かつた闇を…悲しみを、僕が…ううん、僕達が『

剣が、
閃く。

『終わらせる……！』

そして、僕は、化け物のコアを切り裂いた。

周りが一気に静まり返る。

誰もが自分の時間が止まつたような感覚になる。当然、今までの流れを見ていた僕も同じような感覚に陥っていた。

パキン！

やがて時は動き出す。

先ほど立てた音と共に化け物が巨大な爆発を起こし、その姿を消していった。

「あの時は死ぬかと思つたなあ……」

苦笑を浮かべる僕。

あの爆発の中、僕は思いっきり吹っ飛ばされ、そのまま……

ガツン！

『んじつー』

『ぶづつー』

爆発の余波を受けた僕は、そのままヴィータに向かって飛んでいつて、ヴィータに激突するつて言つクライマックスには似合わないオチを作つてしまつたんだっけ。

あつ、ヴィータがアイゼンを振り回しながら僕を追いかける……ははつ、懐かしいなあ……いや、あの時は本当に死ぬかと思つたんだけどね。

周りのみんながそれを見て笑つている。

うん、とても幸せそうな笑顔だ……これが本当のハッピーエンドだよね。

でも

『夜天の魔導書本体の……破壊?』

幸せな時は終わる。

『吉井明久……君の魔法なら、完全に消す事が出来る』

『彼女、リンフォースの介錯を……してくれ……』

悲しい離別によつて……

雪が降る中、一人たたずむ銀髪の少女…

『ねえ、本当にこれしかなかつたの?』

涙が流れそうなのを必死にこらえている…トバイスを握り締める
僕。

『ああ』

『なんで、なんで僕なの……?』

辛そうに顔を歪めながらリインフォースに尋ねる僕。周りでは涙
を流しそうになっているのは達がいた。多分、これから僕がやろ
うとしている事が、解っているからだ。

『お前だから頼みたいのだ。お前達のおかげで、私は主はやての言
葉を聞くことができた。主はやてを喰い殺さずに済み、騎士達を生
かす事が出来た。それに…主はやてが信頼を置いていたお前だ。私
は、お前の手で最後の幕を降ろしたい』

『……………』

「……………」

僕は、うつん。僕らは悔しくて歯を強く食いしばった。

悔しくて、悲しくて、寂しくて、色々な感情が交じり合って目の前がグルグルとうねるよつこ回り続けるよつな、そんな苦しい感覚が僕を襲つた。

『はやでちゃんとお別れしなくて、いいんですか？』

『……主はやでを悲しませたくないのだ』

『リンフォース……』

フエイトが悲しそうに呟いた。

彼女は母親を、愛した人を目の前で亡くしている。その辛さがどれだけのものか知っているからこそ、目の前でリンフォースが言った『悲しませたくない』っていう言葉が、どれだけ悲しくて、酷くて……そして……どれだけ優しいものなのか、解るから。

終わりの時は近づいてくる。

『そろそろ始めようか？夜天の魔導書の終焉だ』

『じめんなさい、リンフォース……』

『それはじつらの台詞だ……まだ主と同じ年の者に、辛いものを背負わせてすまない……』

シャマルがデバイスを使って、リンフォースのリンクコードを抽出させる。

優しく、労わるよつこ、安らかに彼女が逝くために……
でも僕にとって、うつうど。その時間はきっと誰もが辛くて悲しい

時間だったと思う。その中で、僕は必死に両目に涙を蓄えながらも体を震わせながら必死に待っていた。

そして、リンフォースの胸に一点の光が灯された時だった……

『リンフォース！みんなあーーー！』

リンフォースの、彼女の名前を叫びながら車椅子を漕ぎながら必死に僕らの元へとやって来る優しい女の子、はやて……リンフォースの、マスター……

『あかん、やめてーーー！』 リンフォース、やめてーーー！ 破壊なんかせんでもええーーー！ 私がちゃんと抑えるーーー！ こんなんせんでええーーー！ アキ君も、こんなんせんでええからーーー！』

『はやて……』

『ごめん、はやて……』

あの時、はやてにはその言葉が言えなかつた。幼いながらもバカな僕でも、これだけはどうしようもないんだ、ってちゃんと解つてたから……。

僕がやろうとしていることは、はやてから大切な家族を奪う事……絶対にはやてから恨まれる事だ。それが怖くて……とっても怖くて、悲痛な叫びを上げ続けるはやての顔を見ることが出来なかつた。

『主ははやて、良いのですよ』

『良い事ない、良いことなんかなんもあらへんーーー！』

『随分と永い時を生きてきましたが…最後の最後で、私は貴女に綺麗な名前と心を頂きました。騎士達もあなたの傍に居ます。何も心配は要りません』

『心配なんて、そんなん……』

「はやて…」

悲痛な叫びを上げ続けるはやてに、僕は両目から涙が溢れるのを抑える事は出来なかつた。でも九歳だった頃の僕はそれを必死に堪えていた。皮肉だなあ…全部終わつた後に、涙を流せるなんて…

『ですから…私は笑つて避けます』

『話し聞かん子は嫌いや…！マスターは私や…！話聞いて…！私がきつとなんとかする…！暴走なんてさせへんつて、約束したやんか…』

『その約束は、もう立派に守つて頂きました…』

『リインフォース…！』

『主の危険を払い、主を守るのが魔導の器の務め。あなたを守る為の…最も優れたやり方を私に選ばせてください』

『せやけど…ずっと悲しい想いをしてきて…』

『やつと…やつと…救われたんやないか…！』

『私の意志は…貴女の魔導と騎士達の魂に残ります…私はいつも貴

女の傍に居ます』

『そんなんぢや「いやりー。そんなんぢや「いやりー。リインフォース！..』

『うだよ…はやは、いつら。誰だつてこんな悲しい結末なんて
望んでいない。』

『はやてがずっと抱いてきた幸せは、みんなが笑つて過ぐせる未来。
それなのに、それなのにリインフォースがそこにはないなんて、ダメ
だよ。おかしいよ！..』

『駄々っ子はご友人に嫌われます。聞き分けを…我が主』

『リインフォース！..!..!..!..』

『はやはリインフォースに近づいて車椅子を漕ぐ。けれど車輪
が雪で隠れていた石にぶつかって、はやは雪の上に身体を投げ出
されてしまった。』

『なんでや…？これから…やつと始まるのに…これからいつら
と、幸せにしてあげなあかんのに…！..!..!..』

『雪の上で泣きじゃくるはやは、見てられなくなつた小さい僕は
シャマルに懇願する。』

『お願いシャマル！一回止めて！..』

『……はい』

『リンクアコアの抽出が止まつたリインフォースは、はやはの元へ
と歩み寄り、しゃがみ込んで優しくはやはの頬に手を添えた。』

『大丈夫です。私はもう世界で一番幸福な魔導書ですから』

『リンフォース……』

そして彼女は、あるお願いをはやてに言つ。

『主はやて、一つお願ひが

』
.....

『私が消えて……小さく無力な欠片へと変わります……もし良ければ、私の名はその欠片ではなく、貴女がいすれ手にするであろう新たな魔導の器に送つてあげてくれますか？

祝福の風、リンフォース……私の魂はきっと、その子に宿ります』

『リンフォース……』

『はい、我が主

最後にリンフォースははやてに笑顔を見せる。

その笑顔は、僕が今まで見てきたどの笑顔よりも優しい、慈愛に満ちた笑顔だった。

『シャマル……』

『……はい』

再びリンクアの抽出が始まると、そして僕はゆっくりとリンクフォースに歩み寄っていく。

『「ひへ、ひべへ……』

その顔は、もうボロボロだった。小さいながらも、男の意地で我慢じよりとしていたけど……どうしても耐え切れなかつた。涙が止めどなく溢れて、鼻水でぐしゃぐしゃな顔だつた。

『本当にすまない、吉井明久……』

『あへ、謝る事じや、ないよ……』

嗚咽交じりで、僕はリンゴフォースに応える。

『だが私は優しくお前にこれから酷な事を……』

『優しく、なんで、ない……なのは、フヨイトヤ、はやての方が、
ずつビ……す、つビ……』

『アキ君……』

『明久……』

『アキ君……』

涙と鼻水を袖で拭うと、僕はキッと田の前のリンゴフォースを見据えた。

僕のその姿を見たリィンフォースは、そのままはやて達のことを一瞥して……最期の言葉を告げた。

『主はやて……守護騎士達、それから勇敢なる者達……ありがとう、

そして… わよつなり』

『~~~~~つ…………』

剣を、一閃。
目を閉じて、リインフォースのリンカーコアを僕は「」の手で、切り裂いた。

直後。

パーン！

その音と共にリンカーコアは破壊され、そしてゆうくつと彼女の身体は光となつて天へと昇つて行つた。

「……夢？」

ゆうくつと僕は起き上がる。

時計を見ると、まだ夜中の一時だつた。まだ眠る余裕がある時間だけど、今はそんな気分にはなれなかつた。

ベッドから下り、自分の机に立てかけている一枚の写真を手に取る。

そこに写つてるのは、僕を中心には、はやて、アルフ、アリサ、すずか、シグナム、ヴィータ、ザフィーラ、ユーノ、クロノさん、リンクティさん、恭也さん、忍さん、美由希さん、桃子さん、士郎さん……そして。

「フュイト……」

あの日、フレシアさんが亡くなつた日……フュイトとフレシアさんの間に亀裂が入り、フレシアさんはそのまま虚数空間に落ちそつになつた。

あの時、虚数空間に落ちそつになつたフレシアさんの手を、二人の近くで見守つていた僕は無我夢中で掴んだんだけど……最期、彼女は僕にこうつてから僕に雷をぶつけて突き飛ばした。

『フュイトを、よろしくね』

八年経つた今でも、僕はその言葉を覚えている。
覚えているんだけど……

「その相手と八年も会つてないんじゃなあ……」

元々僕は海鳴市に住んでた人間じゃない。

『P・T事件』の時は管理局から逃げるために必死にデバイスを使つてどこへともなく飛んでいつて偶然たどり着いただけだし、『闇の書事件』では、なのは達と合流した後、ヴィータ達との戦いが始まつて、僕はクロノさんに必死に勉強を教わつたり、訓練されたりで、彼女達とともに過ごせた事つて……クリスマスの日以外、あまりないような気がする……その後はクロノさんに必死に管理局の一員となるために勉強ばっかり教えられたんだつけ……で、結局数年間フュイト達とは音信不通。

「…………はあ

会いたいなあ、みんなに……

窓から見た夜空……金色に輝く月が、僕にはフェイトの髪の色に見えた。

バカとデバイスと魔導師 ～バカが奏でる絆の曲～

これは、一人のバカな少年と優しい少女達の物語……

Prelude（後書き）

最初から重いですね……

ちなみに、内容をかなり端折っているのには理由があります。では、バカファンの方もあわせてよろしくお願ひします！

第一話（前書き）

いよいよ、明久の物語が始まります。

第一話

「はあ……」

ゆうくりと初夏になりつつあるこの季節、ダンボールと畳の教室で僕はダンボールを壊さないように配慮しながらもたれつつ、ため息をついていた。

「はあ……」

「どうした、明久。 わざからため息なんて吐いて？」

僕にそう話しかけてきたのは、たてがみのよつた髪に野性味が溢れた顔つきの悪友、坂本雄一だった。

「別に…… ただ、雄一はいいなあって思ってわ」

「あ？ 何がだ？」

「すぐ近くに幼馴染がいて」

「それは嫌みか？ お前はこの前の映画館で何を見てきたんだ！？」

雄一がなんか怒鳴りながら僕に近づいてくる。「こいつには霧島翔子さん、っていう雄一なんかには勿体無いくらい美人な幼馴染がいる……まあ、ちょっと激しい襲撃アプローチの数々で最近は少し戦慄を覚えてるぐらいなんだけどね……まあ、僕がしたかった話はそこじゃない。

「違うよ、そういう意味じゃないんだ」

「じゃあ、どう意味だよ？」

「……約束をすぐ」に果たせられるからだよ

「約束？」

「うん……」

八年前、フレシアさんと…そしてフェイトと交わしたもう一つの約束も僕は果たせていない。彼女をよろしく頼まれた僕は…その彼女を守つてあげるどころか、一言も話せていない。正直、もし彼女の居場所を教えてくれる人がいたらすぐにでも飛んでいくのに…

「明久…まさかお前にも幼馴染がいるのか？」

雄一が訝しげに僕に尋ねてきた。まあ、この前こいつに幼馴染がいたからという理由で襲撃をかけたんだけど…あの時は美人の霧島がつて言つ理由より、雄一なんかに幼馴染がいた、つていう方向に腹が立つたんだよなあ……まあ、今となつてはどうでもいいか。

「うん…つて言つても小学二年の冬から余つて背骨が捩れて内臓が圧迫されるううう

ツツツ……」

ぐおおーーなんだー？急に背骨を雑巾のよつに絞られるような関節技をかけられたぞー？」「んな技、管理局の士官学校でも習わなかつたぞ！？

「アーキー、ちょーーーと話を聞かせてもらひえるかしら？」

「み、美波、顔が怖いよ？」

いつものツリ田が、今日は猛獸のよつた獰猛さを含むよつた鋭い光が宿っている。いつものポーネテールがまるで角のようだ。

「いいから答えなさい、誰なの？いつたい誰なのよーー！」

な、なんかいつもよりも殺気が一割増していくような気が
つて、だらっしゃああああーーー！

とつさに美波を突き飛ばし、僕は横に飛んだ。すると先ほどまで僕がいた場所にカッターが数本、畳に深く突き刺さった。何！？力ツターッ投げナイフみたいにあそこまで突き刺さるつけ！？いつの間にか僕の周りはFFF団スタイルになつたクラスメイトに囲まれていた。

『吉井、貴様どうこうことだ！？』

『なんでお前みたいな奴まで幼馴染がいるんだ！？』

『くそお、坂本だけでも腹立たしいといつのこなぜ吉井まで……』

クラスのあちこちから聞こえる呪詛のような声。

この殺氣、ある意味怒ったヴィーターに匹敵するのかもしれない。だがここは一先ず話し合いからしよう。争いは何も生まないからね。

「みんな、落ち着くんだ！僕は小三の冬の時以来『彼女達』とは出会つてないんだ！！」

『『『殺せえ！…………』』』

しまつた！逆効果だつた！！

「ア～キい？その『彼女達』とは誰のことなのかなしらあ？」

美波が猛獸のような鋭さを瞳に宿して僕ににじり寄つてくれる。

「吉井君… 詳しく教えてくれませんか？」

さらにその隣では田に瘴氣でも宿しているんじゃないのか、つて思えるこのFクラスの紅一点の姫路瑞希さんが僕にゆっくりと近づいてきていた。どうやら彼女もすっかりFクラスという空間に馴染んでいるみたいだ。

「（フォルト、なんとかならないの…？）」

僕の首にかけられているネックレス型のデバイス、フォルトに念話で語りかける。

『（そう申されましても……明久様はこの方たちに魔法を使えますか？）』

頭の中に優しげな女の人の声が響いてくる。魔法を使えるかどうかだと？そんなの決まってるよ。

「（姫路さんや美波以外にだつたら使える）」

「…（いつらに情けなんて必要ない。僕の魔法で虚数空間までぶつ飛ばしてやる。）

『（ダメですよ、一般人にはできる限り我々の存在を知られてはい

けないんですから！－！」』

フォルトが焦ったような口調で僕の頭に語りかけてくる。ぐう、
こういう時ほど規律というものが鬱陶しい！！

ともかく、魔法はそういう理由で使えないから…ここは……

「戦略的撤退！－！」

荷物を引っ掴んで教室から飛び出す僕…だったんだけど、突然襟首を掴まれる。

「ぐえ！」

「…」、呼吸が…襟首が絞まつたことによって、僕の首が圧迫された。

くそぅ、誰だ！？こうなつたら真っ向から戦つてやる！管理局でそれなりに鍛えられた肉体をここで披露

「吉井、どこに行く気だ？」

「げつ、鉄人！」

「誰が鉄人だ、バ力者！」

僕を捕まえた人物は、最悪な事に補習室の鬼、西村先生こと鉄人
だった。

「離してください、鉄人！このままじゃ僕の命が風前の灯のような
状況に陥るのは火を見るよりも明らかなんです！－！」

「そんなことはどうでもいい」

あつさつとそう告げる担任に、僕は現在の教育制度はどんな風になつてゐるか気になった。

「それよりも授業が始まるタイミングで鞄を持って脱走とはい一度胸だな」「うそだよ！」

「違いますって！僕はただ……」

「調度良い、新しい補習を考え付いたところだ。お前をその実験台にしてよ！」

「お願いですから人の話を聞いてください！…というより、生徒をサラリと実験台にしようだなんてどんな教

そこまで言つた瞬間、僕は鉄人に連れて行かれた。

『…………』

『あいつ、今田はもう出でこれないかもな』

『ちつ、処刑は明日に持ち越しか』

『代わりに坂本を処刑するとしよう』

『なつ！冗談じゃねえええ

！……』

『何よ、アキのバカ。今なら素直に言つだけで腕の関節だけで済ませようと思つたのに』

『そうですね、まったく吉井君の方こそ人の話をちゃんと聞かなければダメですよね』

『お主らがそれでは、たしかに逃げ出すのも解る気がするぞい……』

…』

僕が連れ去られた後、そんな会話があつたのは僕の知る由もなかつた。

「うう、酷い目に会つた」

夕焼け空の下、フラフラと頼りない足取りで歩く僕。今日は訓練校に行くのは無理かなあ。

僕はこうみえても、リンディさんやクロノさんの下で管理局の一員として日々、働きながら学んでいる。クロノさんが僕に魔力の練り方や扱い方を教えてくれたり、捜査官として必要な事はなんとかを色々教えてくれたりとかで、結構多忙な毎日を送つてたりする。ちなみに、この事を姉さんや母さん達は知らない。

なんというか、ちゃんと説明しても『あんた頭大丈夫？一回力ち割つた方がいいんじゃない？』なんていう反応が返つてくるだろうし…というか、そうハツキリ言われちゃつたし……まったく、少しは士郎さん達を見習つて欲しいものだ。あれこそ親の鑑というに相応しい人たちだよ。

『明久様、明久様』

「ん？ ビジしたの、フォルト？」

『クロノ様より通信が入っております。すぐに出てください』

「えつー？ マジ！ ？？」

マナーモードだったから気付かなかつた！ 慌てて僕は携帯電話を取り出すと、そこには確かにクロノさんの別称である『ＫＹ』の文字が出ていた。通話ボタンを押して、電話に出る僕。

「はい、もしもし」

『吉井、何分待たせるつもりだ』

「すみません… マナーモードにしてたので気付きました」

歩きながら僕は路地裏に場所を移動する。僕は一応、秘密のヒュンタ。一般人を巻き込まないよう配慮するため、出来る限り管理局からかかるくる通信は、人目につかないようにする必要があるんだ。

「それで… ひょっとしてこつものやつですか？」

『そうだ。場所はメールで記しておくからすぐに迎え

「了解！」

電話を切ると、五秒もしないうちにメールが来る。僕はメールを確認すると、デバイスを手に取り、走り出す。

「フォルト！」

『set up』

瞬間、僕の身体が紅色の光に包まれる。

その後、僕の格好が文月学園指定制服から、黒い服装に赤いスカラフを巻いた僕専用のバリアジャケットに変化する。刀型のアームズデバイスになつたフォルトを手にすると、僕は目的の場所まで一気に飛んでいった。

「（…郊外の廃病院、か……）」

すっかり日が暮れた中、結界を張つた僕は廃病院の中を歩いていた。

「（なんか『あいつら』が現れる場所ってバラバラだよなあ……）」

周りを警戒しながら僕は『あいつら』が出現する法則性を考えてみる。

『あいつら』が出てくるのは街中だったり、この廃病院のような郊外だったり、てんでバラバラ。だけど必ず『あいつら』が出てくるのはこういった人気の無い場所に限定される。それが人の手によるものなのか、それとも偶然…いや、これが偶然なはずはない。必ず何らかの必然性があるはず……けれど手がかりになるものが今のところないんだよなあ。

『マスター、そのまま行きますと…』

「えっ？（『スッ…）んぎゃあ…』」

『壁にぶつかります…て、もう遅いみたいですね』

は、早めに言つてよ……。

『それにしても本当にマスターは推理の時だけには忍りしこまでの集中力を發揮しますね』

「だけは余計だよ……だけは」

鼻を押さえながら僕は周りを見渡す。なんかいつの間にか別のフロアに移動してたみたいだ…はあ、クロノさんにも言われたけど、僕ってこういう時になんで周りが見えなくなっちゃうんだろ？ため息を吐きながら自分のいる場所を確認しようとしたとき、僕の田にあるものが飛び込んできた。

「これは…つー」

田の前に拡がる。赤、赤、赤。

触れてみると、少し乾いてはいるけれど手にこびり付いた。赤い、液体。血だ。若干乾いている白い固形物と赤い固形物…つまり、骨と肉だ。

吐き気をこらえながら、近くに落ちている血がこびり付いたタバコを拾い上げる。

「街の不良の溜まり場…だったみたいだね」

『やつですね…おやじへ偶然現れたあいつら』

「へやー。」

血が付いたタバコを投げ捨て、僕は歯を思いつきついてい縛る。何度もあいつらと戦ってきたのに、僕がもつと早くあいつの足取りをつかめていれば……！

『マスター、自分を責めへはいけません』

「でも、僕がもつとやかんと……。」

『苦虫を噛み潰しているのはあなただけではあります』

「えつ？」

『おそらく管理局でも対策が練られているはずです。仲間をもてば、この事件、必ず解決できるかと』

「…………うそ」

フォルトに諭され、僕はよしやく落ち着きを取り戻した。そうだ、今はこんなところで悔しがってる場合じゃない。悔しかつたら動け、そして事件を解決するんだ！！

でもできるなら、応援に駆けつけてくれる仲間が彼女達だと嬉しいんだけどなあ……

……なんてぼやいてもしょうがない、か。

「今は……ここにいる人たちの仇は取るよ

僕の目の前に群がつてくるように集まつてくる『あいつら』。黒い闇のよだんな巨大な物体が目の前に現れる。赤い光が目のよ

に灯り、その下にぞろつと生え揃つた牙。

「いづらの名前は、エネミー。

クロノさん、曰く便宜上の意味でこの名前が付けられた名前だ。

「やるよ、フォルト！…！」

『yes - si!』

瞬間、僕はダンと床を蹴り上げて一気にエネミーとの間合いを詰める。左手で持っているデバイスの柄に右手を添え、エネミーの間に合いに入つてた瞬間、僕は一気に抜刀する。

ザン！

音と共に刃をエネミーの靄のような身体を斬る。

確かに手ごたえと共に、エネミーの切り裂かれた場所から、黒い液体が血のように噴き出す。

オオオオオン

エネミーが一声鳴くと同時に、本来ある頭の場所から、無数の触手を僕目掛けて放つて来る。僕は『ミツドチルダ式』の魔法陣を開させると、意識を集中させて一気に奴の触手目掛けて魔法を放つた。

「クリムゾン・バスター！…！」

発動させると同時に、紅い魔力弾が触手に向かつて飛んで行き、炸裂する。だけどそれだけで全ての触手を撃ち落せなかつたみたい

だ。何本か僕に向かつて襲い掛かつてくる。その先端は槍を思わせるように鋭く、それを僕の体に突き刺そうという魂胆なんだろうけど……

「そりは問屋が卸さない！」

僕の目の前に三角形の魔法陣……つまり『ベルカ式』の魔法陣が展開される。

本来ベルカとミツドの魔法は相容れない。それなのに、僕はその二つを使いこなす事ができる……これには一応、僕の中にある『アレ』が関係しているんだろうけど、今は関係ないかな。

刀の鯉口を指で少し押すと、鞘の中から紅い閃光が周囲の闇を切り裂くように輝いた。

そのまま僕は一気に駆け出し、エネミーの間合いに踏み込むと同時に剣を閃かす。

「けんきょううそうせん 剣響奏閃・八刃の舞」

チン、という音が病院の廊下に響く。

同時にエネミーが全身から黒い血を噴き出して倒れた。

これが僕の魔法。音速を超える居合いで繰り出し、鞘に刃が納まつたときには既に相手は斬られている。それも一太刀だけじゃなく、それ違った瞬間に僕はあいつを八回切り裂いた。だから八刃、ってね。

「ふう、まずは一体」

おそらくエネミーはこいつ一体だけではないだろう。最初僕が対峙したときは一体だけだったけど、徐々にその数を増やしていくって最近では二十体近くも見かけるようになった。

「（今回も骨が折れそうだなあ……）」

ため息を吐いてその場を立ち去りうつした時だった。

『マスター後ろからエネミーが……』

「なつ！」

慌てて後ろを振り向くと、そこには先ほどと同じ、黒い靄のような塊が集まっていた。しまった！まさかこの場にもう一体いたなんて！！

ダメージを予想し、ギリッと歯を食いしばって鞘を前に構える防御の構えを取った瞬間だった。

「トライデントスマッシュヤー！……！」

「ゴツー…といづ音と共に、エネミーの身体が二叉の金色の閃光に貫かれた。

金色の…閃光…もしかして…

「大丈夫？」

「……」

ゆつくりと、振り返る。

金色の長い髪をなびかせ、紅い瞳に桜色のくちびるが華やかに彩られた顔立ち。年不相応だけど、嫌味に見えない見事なスタイルの

体を黒いバリアジャケットに身を包んだ同じ年くらいの……綺麗に成長した……

「フハイト……」

第一話（後書き）

一応、明久とフェイント達は同じ年という設定です。
今回は明久がベルカとミッドの両方の魔法を使いましたが、その理由はあとで解かります。

第一話（前書き）

なのは組と合流！さらに一人ほどバカテス側から加わります。

第一話

夢でも見ているんじゃないのか？

最初はそう思つた。

でも違う。

「明久」

僕の名前を、彼女が呟く。

透き通るかのような綺麗な言葉が大気を伝わつて僕の元へと響いてきて、それが現実だと教えてくれる。

「フェイト」

僕が彼女の名前を呟いた瞬間、彼女は宝石のように煌めく紅い瞳に涙を浮かべ、僕に向かつて駆け出し、僕の身体に腕を回して抱きついてきた。

「明久あ！明久あ！！」

僕の胸で泣きじゃくる彼女。

ずっと

ずっと逢いたかった。

八年前、僕を管理局から匿つてくれた女の子。

八年前、僕と一緒にじぱりへ一緒に暮らした女の子。

八年前…僕が初めて守つてあげたいと想つた女の子……。

「フェイト……」

抱きついてくる彼女の体を僕はそつと抱きしめる。やつと出合えた。

嘘じやない、幻でもない。夢でもない。

僕の腕の中にいるこの温もりが、現実のものだと証明していた。一秒という時間がとてつもなく長いよつた感覚が僕達を包み込む。濃密な時間に身を任せ、僕とフェイトは互いに触れ合『ドゴオオオオオオオン！…』って何！？

突然響いた轟音に、僕らはバッと互いに体を離し、辺りを警戒する。

するとビニからか、懐かしい声が聞こえてきた。幼い、勇ましい女の子の声が……この声って！？

「ひょっとして…ヴィータ！？」

建物を豪快に壊す破壊音と共に『どりやああああ…』という声が続いていた。間違いない、こんな事をするのはヴィータだけだ！まさか彼女まで來てるなんて…！

「ヴィータだけじゃないよ……」

「『リ、ヒフェイトはイタズラっぽく微笑むと、告げた。

「なのはにアルフ…はやでやシグナム、シャマルにザフィーラも…」

みんなが明久のために来てくれたんだよ

「みんなが……」

その言葉に目頭が熱くなつた。
僕のために、みんながこの町に来てくれた……そつ考えるだけで
熱い何かが僕の中で駆け巡る。

「行こう、フヨイト……みんなのところへーーー。」

「うん！」

僕達は駆け出した。
なかま
戦友が待つ戦場へ

「みん　　『『アキ君ーーー』』　『明久ああああああああーーー』
ぐべりーーー！」

突然僕の元に涙を浮かべた茶色の髪を一つに結つた女の子と、同じ色の髪にショートヘアの女の子、そして身長が低く、赤髪で口元リのような服を着た女の子が僕に向かつて突撃してきた。ぐお
み、みぞおちに…け、結構強烈……だ……

「アキ君、久しぶり！」

「久しぶりやな、アキ君ーーー！」

「たまには連絡よ」せよな！久しぶりだな、明久！！

「なのは、はやて…ヴィータ！」

八年前よりも成長した（ヴィータはそのまんまだけど…）三人に出会い、僕は懐かしさと共に嬉しさが込み上げてくる……………といふか。

「はやて…歩けるよくなつたんだねーー！」

「せやーもつ体もぱっちり元気やでーー！」

病弱で歩けず、車椅子の生活だったはやて…彼女が今、当たり前のように元気な姿で僕の前に立っている。夢なんかじゃない、紛れも無い現実だ。こんなに嬉しいことなんてない。

「吉井、久しぶりだな」

「ふふつ、お元気そうでなによりです」

「シグナム、シャマル！！」

ピンク色のボーテールを持った凜々しい顔立ちの女性、シグナム。その隣にいるのは優しそうな笑顔を浮かべた金色の髪を持つた女性、シャマル。

「久しぶり、明久！」

「無事で何よりだ」

「アルフ……ザフィーラ……」

獣耳の少女…フェイトの使い魔の狼、アルフにはやての家族であり、守護獣の青い狼、ザフィーラがそこにいた。

「みんな……」

懐かしい仲間たちに囲まれ、僕は不覚にも泣きそうになつた。こんなに温かな気持ちになつたのは久しぶりだ……

「なーに、泣きたくな顔になつてんだよ

ヴィータが僕のわき腹を肘で軽く突付いてくる。僕はそれに苦笑を浮かべながら応えた。

「いや……みんなこまた会えて嬉しくて、や」

「アキ君……」

僕の言葉になのはが嬉しそうに笑顔を浮かべる。

久しぶりの再会。僕達は懐かしさと喜びが優しく包み込んでくれる空間を、じばじの間楽しんだ。

「……で、これついでないことへ。」

場所は変わっここは僕の家。

とりあえずあの廃病院にいたエネミーは、全部なのは達が倒したみたいで、結界を解除した僕らは一旦僕の家に集まることになった。一人暮らしにしてはかなり広いリビングだけど、僕も入れて九人（内一人は狼）にもなれば結構せまく感じるものだ。

「どういひとつて？」

フェイトがソファーに座りながら、僕が淹れたコーヒーを飲みながら聞いてくる。

どうやら僕の意図を伝えずに聞いてしまったみたいだ。いけないいけない、ちゃんと相手に理解できるように話さないと……

「えつと…順を追つて話すけど、とりあえず最初に何でこの街にフェイト達がいるの？」

「ああ、そのこと…母さんがね、『明久一人では荷が重いだろうから』っていう理由で、私達をこの街に派遣してくれたんだ」

「なるほど…確かにフェイト達なら僕と戦闘経験があるし、助つ人としてはこれ以上頼りになる存在はないね」

「こやはは、なんか照れるね」

「事実だよ…でもそうなると危惧していた可能性が出てくるな……」

ため息を吐きながら僕はコーヒーを啜る。今の気分を表したかのように、少し苦みが強い味だった。

「危惧していた可能性とはなんだ、吉井？」

「うん…去年からこの辺りにエネミーが出始めた…っていうのは聞いてるよね?」

その言葉になのは達は頷く。

去年…僕が文月学園に入学する少し前からエネミーがこの街に出現し始めた。

管理局から頼まれた『もう一つ』の任務に加え、僕はクロノさんの下でエネミーの討伐と調査を任せられた。このもう一つの任務についても、なのは達は知っていたみたいだ。

「僕が危惧していた可能性…それは現状が悪化の傾向を辿る事だよ

「悪化の傾向?」

「うん。エネミーの出現の数はここ最近、数をかなり増やしてきてる。前回、僕は一人で約二十体近くのエネミーを相手にしたんだ」「二十体も!…?」

「大丈夫だったの!…?」

「怪我、せえへんかつた?」

フロイトとなのはとはやてが不安そうに僕に尋ねてくる。三人の優しさに暖かなものを感じながら、僕は笑顔で大丈夫だったよ、と返す。

「それで、ちょっと質問なんだけどさ…なのは達って魔力ランクはどうぐらいい?」「

「私達？……Sランクだけビ、リミッターが付いてるよ」

「僕はSS・ランク。当然ながらリミッターは付いてるけどね」

僕のランクの高さに驚いたのか、なのは達は鳩が豆鉄砲をくらつたような顔になる。まあ、僕もこの歳でここまで自分の魔力ランクが高いなんて初めて聞いたときは驚いたけど……とりあえずその話題は置いておこう。

「それで、吉井。この質問の意味は何だ？」

ザフィーラが訝しげに尋ねてくる。

その問いに答える前に、僕はコーヒーを啜った。この次はかなり長めな説明になるだろうから、少しでも喉は潤しておかないと……

「質問の意味なんだけど……リミッター付きとはいえ、僕は一応ランクSオーバーの魔導師。そして今回、みんながここに駆けつけてくれた事で確信した。現状は確実に悪化の傾向を辿ってる……それも、ランクSオーバーの魔導師を一気にここまで戦力を加えないといけないくらいに……」

「なるほど……しかしそうなると、あまり悠長にしている暇は無さそうだな」

僕の言葉に全員が真剣そのものの顔つきになる。

事態は確実に悪くなっている方向に向かっている。しかし一向に証拠の一つも無く、手がかりも何一つ無いのが現状だ。

「だ、大丈夫だよ！これだけの数の仲間がいるんだよ？なんとかなるって！」

突然響き渡るアルフの声。それに続くかのように、ヴィータが口を開いた。

「そ、そりだな！あたしらが加わるんだ！鬼に金棒つてやつだ！！」

空元氣、と言つ訳でも無せそうだ。

一人の田には、本当に『なんとかなる』という強い意志があった。その強い意志を持った言葉は、僕達の心に強く響いた。

「そりだね、ヴィータちゃんの言つとおりだよー。」

「私も…みんながいれば大丈夫だと思つよーー。」

「せやな！それにこっちには前よりもずっと頼もしそうになつたアキ君がいるんやー！誰がこよつと負ける氣なんておきんーー！」

なのは、フュイト、はやての三人がまるで確信を持つたかのような力強い言葉を言い放つ。

「うん…僕もこの『九人』がいればどんな壁だつて乗り切れると思つーー。」

根拠も何も無い。けれど、堂々と宣言できる言葉。

そうだ、確かに状況は悪いものなのかもしれない。けれど、それでも僕の前にはこれだけの数の仲間がいるんだ。恐れる事なんて無い。みんなとなら、どんな状況でも乗り越えられるはずだ……

「いいえ、違うわよ、明久君」

「えつ？」

どうこい」と、シャマル？

「実はなんだけど…後一人、ここに加わるやつの」

「一人も…？」

えつ、マジで！？

あと一人も戦力が増えるなんて…でも、一人つて誰だろ？
なんて考えていたときだった。

ピンポーン

「誰だろ、宅配便かな？」

「私が出ようか？」

そう言つてフェイトがソファーから腰を上げる。けど、仮にもこのは僕の家。お密さんにそんな事はさせられない。

「いや、僕が出るよ。とつあえず適当にくつひこでて

そう言つと、僕は玄関に足を運んだ。

さてと、誰が来たのかな？知り合いだつたら悪いけど帰つてもらおう。なんせ今は久々の仲間達との再会だ。できるなら水入らずにしてもらいたいし。そう思つていたら、またチャイムの音が鳴つた。

「はーい、どちら様ですかー？」

返事をしながら鍵を外し、ドアを開いた。

「よう、明久」

玄関に立っていたのは…僕の悪友、雄一だった。
バタン、ガチャガチャ（ドアを閉めて鍵をかけ、チエーンを付
けた音）

悪は去つた。さて、みんなのところに戻りう。

シンドンード

『てめえ、明久！ いきなり閉めてんじゃねえよ！』

「わるやこ、この野郎。せつかくの旧友との再会をお前なんかに汚されてたまるか。

『……雄一、吉井は出ないの？』

なんだ? 霧島さんまでいるのか?」こつめ、さては僕に見せつけようと……シ――

『あの野郎…つたく、指示された場所がこいつの家だと知ったときは度肝を抜いたぞ』

……私も驚いた、吉井も『デバイス』使えるなんて

——ガチャヤ——

「さ、霧島さん…今、なんて言ったの？」

聞き捨てなら無い単語に僕は冷や汗をかきながらドアを開けた。

頼む、聞き間違いであつて欲しい。

しかし現実というものは無情で……

「明久……マジでお前も『テバイス持つてるのか?』

「ゆ、雄一もなの……?」

互いに冷や汗をかきながら僕らは睨み合つ。

霧島さんはともかく、よりもよつてこいつが助つ人だなんて最悪だ。

「坂本雄一だ、よろしく頼む」

「……隣にいる坂本雄一の『妻』の霧島翔子」

「待て翔子、俺はそもそも容認していないぞー?」

「……大丈夫」

「な、何がだ?」

「……雄一とは小細工なしの腕力勝負で結婚してみせる」

「結婚に腕力は必要なぐおがああああああああーー!こめかみがーー!頭蓋が軋むウウウウウウーー!」

『　』
『　』
『　』
『　』
『　』
『　』
『　』
『　』

二人による、ある意味個性的で強烈な自己紹介に、僕の昔馴染みである彼女達は絶句していた。

雄一と霧島さんが増えて、さらに狭くなつたリビングで僕は一人に「コーヒーを淹れながらため息を吐いていた。

「明久、さつきからため息を吐いてるけど、どうしたの？」

横からフェイトが僕の顔を覗き込むように現れる。その時、髪からふわりといい香りが漂ってきて僕は少しだけ緊張してしまった。

「うん…ちょっとね」

まさかこんな身近に魔導師がいたなんて…それも雄一なんかがある意味、ちょっとショックでもあった。

「ねえ、あの一人つて明久の知り合い？」

「うん、ブサイクの方は雄一つて言つてね、一応は僕のクラスの代表」

「代表？」

フェイトが首をかしげる。

あーそつか…『代表』とか、そういうのは文月学園固有のものだつたつけ。まあ、詳しい説明は後にするよ、とフェイトに言つたら解つた、と言つてくれた。理解がある友達を持ってて僕も嬉しいよ。

「で、隣にいる美人の方は霧島翔子さん、雄一の幼馴染で、学年主席の人なんだ」

「学年主席つて……じゃあ、学生の中で一番成績が高い人なの！？」

「うん……まあ、少しくせがあるけど……」

「…………あー…………」

フロイトがなんとも言えない表情で雄一にアイアンクローラーを続けている霧島さんを見る。さつきまで自分で妻と言っていたのに、その夫である相手に情け容赦もなく頭蓋を潰そうとしている姿を見ればそう思うだろ？ 新学期の頃、才色兼備と噂されていた霧島さんの実態を知ったとき、僕は思わず絶句してしまったくらいだし。

「一人とも、そのへりこにして話を再開させよ！」

一人の前にコーヒーを置き、僕は話を再開させよ！ と促す。

「……吉井、まだ終わってない」

「『めんね、霧島さん。けど終わつたら好きなだけ雄一を好きに』していいから」

「ちょっと待て明久！ 僕の許可も無しにそんな」と

「……ありがと、吉井はいい人」

「どういたしまして」

「おお――――――――――――」

すまん、雄一。お前の犠牲は忘れない。それと、話を始めないと……。

「これから僕らの方針なんだけど……やつぱつHネリーが出てこない」と僕らは動きようが無いんだよね」

「…………まあ、やうだな」

雄一が疲れた顔で頷く。

「俺も何度もエネミーと戦つたことはあるが、あいつらがどうやって出現しているのか、手がかりすらない状況だと、俺らから起こせるアクションはねえからな」

「えっ？ 坂本君も戦つた事あるの？」

なのはが不思議そうな顔をして聞いてくる。

「ああ、どうも俺らはそれ違った場所で戦つていたみたいだな
……しかし解せねえな」

「何が？」

「そもそもだ、こんなに近くに魔導師がいるのに、なんで俺らは出会わなかつたんだ？」

「確かに……」

雄一の言つとおりだ。そもそもこれ程近くに魔導師がいたつていづのと、なぜ僕らは出会わなかつたんだ？ エネミーが出ているとは

「え、少なからず現場で鉢合せしてもおかしくは無いはずだ。
それが無いって言う事は…もしかしたひ。

「人為的な何かがある、どこか？」とやな

はやての言葉に僕らは頷く。

「……ちょっと、管理局に聞こ合わせてみる…少し、時間がかかる
かもしれないけど」

「頼むよ、霧島さん」

「じゃあ、結果が出るまでこの件は！」まことにしておひつ

「せうだね、少なくとも得られたもののはあつた訳だし」

「」のエネミー出現事件に人為的なものが関わっている、という可
能性が高まつただけなんだけど、それでも一歩踏み出す事が出来た。
それだけでも収穫だ。

「…にしておひつだ」

「ん？どうしたの、雄二？」

「いや、お前がこうやって小難しい会議にお前が普通に参加できて
る事に違和感があつてな」

失敬な。

「あのね、これでも捜査官としてクロノをとにかく鍛えられてき

たんだよ？まあ、ほぼ部屋に缶詰みたいに閉じ込められて勉強させられたり、僕だけ特別メニューだ、って言つてひたすらガジェットの相手を一人でしなきゃいけなかつたりで大変だつたけど……

『 』
『 』
『 』
『 』
『 』
『 』

僕の言葉にその場にいる全員が僕の方を見る。どうしたの？

「えっと… 明久はクロノに鍛えられてたんだよね？」

「うん。でもフェイト達のことはあまり聞いてなかつたな… 聞いても『そんな暇があつたら勉強してろ』って言われてさ… まあ、みんな頑張つてゐわけだし、僕も頑張らなきゃーと思って必死に勉強してたよ」

「明久… も前…」

「雄一がなんだか哀れみに満ちた視線を僕に向けてくる。何！？本当になんなの！？」

「えーっと、アキ君

なのはが苦笑いを浮かべながら僕に尋ねてきた。

「アキ君の両親つて、アキ君が魔法に関わってる事… 知つてるの？」

「ううん、知らないよ。教えても『はあ？ あんたついに頭壊れて幻覚でも見たんじゃないの？』って言われるのがオチというか、そう言われた… デバイスを開発させようとも思つたけど、無駄だらうと思つてやめたくらいだし」

『 』 』 』 』 』

みんなが同情の眼差しで僕をみつめる……お願い、僕をそんな目で見ないで……

「…………すまん、明久。お前も苦労してんんだな」

「解つてくれて嬉しいよ、雄一」

前にも聞いたけど、雄一も何だかんだで母親には苦労しているみたいだ。

「（そ、そつか……アキ君に八年間会えへんかった理由がなんとかわかつたわ……）」

「（うん……両親が知らないのを知つてて、クロノ君、わざとアキ君を私たちに……といつより、フロイトちゃんに会わせなかつたみたいだね）」

「（クロノ……後で母さんと一緒にHANASHIしないこと……）

「

その頃、リッジナルダとのある場所で……

ゾクリ……

「な、なんだ！？今、凄まじい寒気を感じたよつな…………」

果たしてクロノの運命はいかに？

次回に続かない…！（某禁書のノリで）

「さてと、とりあえずエネリーを感知したら必ず連絡しあつて近くにいるメンバーと合流する事。以上、解散！」

雄一が閉めの言葉を言い、そのまま立ち上がると、もの凄い速度で家を出て行った。その後に、霧島さんが『……逃がさない』と言つて雄一の後を追つていった。ならばだ、我が悪友よ。骨は拾つて『ハリの中に入れておいてやるわ。

「あと、それじゃあ私たちも帰らせてもらひわ」

「えつ？ 帰るって…？」

「実はな、この近くに私たち用にリンクトイさんが用意してくれた家があるんだや」

「そこで私たちは暮らすんだよ。ついでに、アキ君の学校に通う事になつたんだ」

「やうなのー？」

これは驚きだ。なのは達がこの街に住むのはなんとなく想像してたけど、まさか僕らが通つている学校と一緒に通う事になるなんて…なんていうか、とっても嬉しいや。リンクトイさんには感謝しな

いと。

「じゃあね、アキ君。また学校でな！」

「じゃあなー！」

「失礼しました」

「また会おう」

「また明日ね、アキ君、フェイトちゃん、アルフちゃん！」

口々にさう言つて玄関から出て行くのは達。

また、明日……か。

またなのは達から「Jの言葉を聞けるなんて……なんだか凄く感慨深い……ん?

あれ?なんか違和感が……

「あの……明久……」

背後から澄んだ声が響く。振り返ると、そこには……フェイトがいた。心なしか、その顔は少しだけ赤くなっている。その後ろではニヤニヤと笑っているアルフがいた……って、どうしたの?

「あれ?フェイト、どうしてここにいるの?みんなと一緒に帰ったんじゃないの?」

「えつ……あ、明久は何も聞いてないの?」

「何が？」

「私、今日から明久の家にホームステイする」とになつてゐるんだよ？」

「え？」

瞬間、僕は自分の時間が止まつたような感覚に陥つた。
え？今、彼女……なんて言つた？

「ほ、ホームステイつて……マジで？」

「う、うん……母さんがここに泊まつたら？って言つてね……一応、
明久の両親にも了承は得てるんだよ？聞いてない？」

「うん、全然」

母さんなら、息子の了承なんて知つたこいつちやないと思つて
いるだろうし、今更驚くことではない。

とこりか、リンクティさんは一体どうやって母さんに了承させたん
だろ？……管理局流の話術交渉で丸め込んだのかな？

「いや、交渉に『…………（とにかく凄まじい金額）』円払
う、って言つたらあいつひとつと了承してくれたみたいだよ」

「大人つて汚い！！」

アルフの言葉に僕は愕然とした。

「とにかく、よろしくお願ひします！！！」

「これから世話になるよ」

フロイトとアルフが笑顔で僕に話しかけてくる。これから彼女達と一緒に生活していくんだと思うと、八年前の時の事を思い出すな。

そう思つと、少しだけリンディさんには感謝したい気持ちが湧いてきた。まあ、裏で汚い大人の欲望を感じたりはしたけど……これから大変なことがたくさん起こるのは火を見るより明らかなんだけど……

「あー……うん。よろしく!」

とりあえず今は彼女達との輝かしい共同生活に胸を躍らせる」とこにした。

第一話（後書き）

フェイントと同棲……果たして、明久の運命は？

第三話（前書き）

同居生活が始まった次の日です。

そろそろ文月学園の清涼祭が近づいてきた今日この頃。僕、吉井明久の心臓は朝っぱらからドキドキしていた。

「…………なんだって、こんな早い時間に？」

田覚まし時計を見ると、まだ朝の五時だった。まだまだ余裕のある時間だけど、この高鳴り続ける心臓のせいで、一度寝は困難を極めていた。

「…………しようがない、起きてよ…………」

ため息を吐きながらベッドから降りる。

「さてと、何で時間を潰そうかな……そうだ、ゲームでもして……あつ」

そこまで呟いたところで気付いた。

そうだ…今、この家にいるのは僕だけじゃなかつたんだ……。

「フュイトとアルフが昨日から一緒に同居してるんだった……」

「う、昔馴染みが近くにいるせいで早く起きた、なんて子供じやないんだから恥ずかしいなあ…………うつ、考えるとまた心臓がドキドキしてきた。と、とりあえず冷たい水を顔にかけて、気分転換でもしよう。」

部屋を出て脱衣場にある洗面台に向かつ。

ふあ、とあくびをしながらドアを開けると…脱衣場に置かれてい

る籠の中に置んだ衣類とバスタオルがそこにあつた。

(あれ? なんでこんなとこね? つ---)

最悪な事態を想像し、僕は慌てて脱衣場から出ようとしたら……けど。

ガチャヤリ

「ふう」

僕が脱衣場を出る前に……長い金髪から零を落とし、全身に一糸すら纏っていないフェイトが浴場から出てきた。

.....

時が止まる。

だが次の瞬間には時が動き出していた。

近くにあつたバスタオルを手に持つて……

「アーリー、アーリー」

僕の顔にバスタオルが飛んできて視界が奪われる。でもバスタオルだから別に痛くもなんともないや。フェイトみたいな美少女の裸を見てこの程度で済むなんて僕は運がいいほうなのだろうか…？いや、今はこんな事を考へている場合じゃない。

バスタオルが顔にかかっているせいで、視界は見えないけど、このまま後ろに下がってドアを閉めれば……

「ふえ、フエイトー?なんだい、今の悲鳴はー? (ドンー)

「つて、うわあー?」

突然響き渡るアルフの声と共に、背中を強く押された。急な事に対処できず、僕はそのまま思いつき前へ倒れて『むにゅん』ってなんだ?このやわらかくて温かくて、いい匂いのすべすべした……。

「あ、あう、あう

「あつ

「…………えーっと

「…………

「…………

三者三様の沈黙が脱衣場を支配する。

この後、僕はフエイトから思いつき平手打ちをもらい、まだ初夏だというのに頬に真っ赤な紅葉を作ることになり、脱衣場からアルフと一緒に追い出された。

朝っぱらから、色々と不幸だ。

「…………

「…………」

現在の時刻は七時四十分にさしかかるであろう、この時間。僕らは一応、学生（本職は時空管理局の魔導師）なので、この時間は学校に登校するのが常識だ。

爽やかな朝の澄んだ空気を肺一杯に吸い込む。「うーん、なんだか甘い香りがするなあ。

初夏の柔らかな日差しを浴びながら僕はこの早朝といつ時間を堪能していた。

「あ、あの……明久」

「ん? 何、フェイト?」

僕の隣には誰もが見目麗しい少女と称するのに相応しい美少女、フェイト・T・ハラオウンが少しだけ申し訳無そそうな顔になっていた。

ちなみに、僕はその顔をまっすぐには見れていなかつたりする。理由? 察してくれとしか言いつづが無いよ。

顔を見れば思い出されるのは、わずか数秒しか見ていないのに、しっかりと僕の記憶に焼きついて消す事ができない、というよりはほぼ永久保存でもしておきたいようなセクシーシーン。

この早朝という時間を堪能している理由は、その煩惱を少しでも晴らすための行動なのだ。

「その……朝は、『めん』

「あ……い、いやーそれを言うなら僕の方も謝らなきや……本当に『めん』まさかあんな朝早くにフェイトがシャワーを……」

「わっ、わあああああ！それ以上言わないで…！」

真っ赤になつたフロイトが、両手をブンブン振つてあわてる。
ちなみに、早朝の時間にフロイトがシャワーを浴びていた理由は、
どうも僕と同じらしく、朝早く目が覚めてしまい、中々寝付くこと
ができず、シャワーでも浴びてリフレッシュでもしようと思つたか
ららしい……そのシャワーが調度終わる頃に僕が入ってきたという
…なんて間が悪いんだろう、僕は。

う…なんかまたあの時の光景が脳裏に……って、イカんイカん！
！色即是空、空即是色！落ち着け僕、こんな朝早くから煩惱に目覚
めるな…！

自分の中で煩惱と戦いつつ、これ以上泥沼にならないように僕ら
はいったん深呼吸する。

「と、とつあえず…この話はこれで終わらじよつ」

「そ、そうだね…」

「それじゃあ、学校に行こつか

「うん」

フロイトが僕の隣に並んで歩き始める。

青空の下、美少女と一緒に登下校。

うーん、まさか僕がこんなギャルゲの主人公みたいなシチュエーシ
ョンを現実でするだなんて…人生、何が起こるか本当に解らないや。

ドキドキドキドキ

先ほどから心臓がやたら高鳴っている。

チラリと隣を見ると、そこには笑顔を浮かべながら文月学園の制服を着ながら登校するフェイト。そんな嬉しそうな笑顔を浮かべられながら隣を歩いてくれているというのは、男として幸せなことだ。でもこの心臓の高鳴りはそれとは少し種類が違うような気がする。一体なんなんだ？この胸の高鳴りは……ん？美少女…………一緒に登校…………雄一だった場合…………なるほど、解つたぞ。

「明久、なんか顔色が悪いけど……どうかしたの？」

「あー、うん。ちょっとね……でも別に具合が悪いって訳じゃないから大丈夫だよ」

「そう？でも明久のあの食生活を見たらその可能性もあるような気がしてきたんだけど……」

「うう……」

昨晚、フェイトに僕の食生活について聞かれたら、滅茶苦茶怒られたんだっけ……まあ、その後、一人一緒に近所のスーパーに買い物に行って、久しぶりにまともな食事を食べたっけ……それで、今日は久しぶりにお弁当を作ったんだ。フェイトの分と、僕の分。フェイトはなんだか悪い、と言っていたけど、食べててくれる人がいるのって、なんだか自分一人の分を作るよりもずっと楽しいんだよなあ……。

まあ、その話はいったん置いておこう。

「大丈夫だよ。これでも一時期、塩と砂糖を食べて過ごしていたからね

「食べるじゃなくて、舐めるが正しい表現のもので過ぐしてたの……？」とか、魔法の訓練のときほどひじったの…？」

「クロノさんからまかないを貰つてなんとか訓練を乗り越えてたら問題は無かつたよ？」

「ああ、そう……今度は私が明久の食事管理しないと（ボソッ）」

フュイトがなんか小声で呟いていたけど、スルーしよう。
さてと……そろそろ校門が見えてきたな……。そう考えるだけで僕の胸はさらに高鳴った。これから始まるであろう、僕の輝かしい青春に僕の胸が鼓動を奏でている理由の一つだ。
そしてもう一つ……こっちが大部分を占めていたりする。

『『『異端者発見！』』』

『ほら、来たよ。僕の胸の大部分を占めていた連中が。

「ちいいっ！見つかって……！」

「えつ！？明久、どうしたの！？？」

僕はフュイトの手をつかむと、急いで走り出す。

『おのれ吉井！誰だ、その美少女は！？』

『そんな美少女と一緒に登校など、許しておけん！』

『異端者には血の制裁を！』

『逃がすなあ！討ち取れえ！』

『我が軍の力を彼奴にみせるのだ――――――』

『首を取れ！取つたものには褒美（エロ本）を遣わす！――――』

『…………』

『…………』

『痛みを味わいながらじわじわと地獄に送つてくれる！』

『吉井明久を灰に！吉井明久を塵に！吉井明久殺しの紅十字！』

背筋が凍るような叫び声を上げながら様々な武器を持つて追いかけ
てくる。というか、途中の奴らは、僕を敵の総大将か何かにしてな
かつた？それと最後、君はルーンが刻まれたカードで炎を操る魔術
師か何かか？

「あ、明久！？あの覆面の人たちは何なの！？」

「フェイト、今は黙つて僕についてくれ！』

彼女の手を離さないようにしつかりと握り締め、僕は学園に入る。
フェイトは今日が転校初日な訳だし、文月学園に入つてから最初に
行くのは職員室のはず…職員室ならば奴らの手も届かない！なん
としても生き延びてやる！』

「はあ……はあ……」

「ぜえ、ぜえ……」

なんとか嫉妬に狂ったクラスメイトから逃げ延び、僕とフェイトは職員室の中に逃げ切る事が出来た。まだ朝早い時間だったから、それ程登校している生徒も少なかったのが幸いしたみたいだ。

「吉井、テススタロッサ、朝から騒々しいぞ」

さすがに騒ぎすぎたせいか、女の先生に注意されてしまった。

「あつ、すみませ……ん?」

「なんだ、人の顔をじろじろと……」

僕は目の前にいる、竹刀を片手に担いでいるピンク色のポーネルをした巨乳でジャージを着た昔馴染みの女性の姿に固まつた。

「……何やつてるの、シグナム?」

ヒュン！シユパツ！ シグナムが僕に向かつて竹刀を振るい、僕が白刃取りした音

受け止めた両手にもの凄い衝撃がきた。あ、危ない…危うく僕の脳天に突き落とされるところだった……って！

「いきなり何すんの、シグナム！？」

「先生と呼べ、吉井」

...はい？

「いや、戦いでは確かに先制はあるのみだけど」

「明久、それまったく違う『せんせい』だよ」

いや、今のはただの現実逃避なんだけど、まさかとは思うけど……

シグナムがこの学校の先生?」

「 そうだ、私は今日からお前のFクラスの副担任となつた。担当は体育と補習室だ。これからよろしく頼むぞ」

「あ、いこ………じめじめ！」

えっ！？シグナムが僕のクラスの副担任！？？しかも鉄人と同じ補習室担当！？？？

「しかし私の竹刀を受け止めるとはな……鍛錬は怠つていないようだ
な、吉井」

「あはは、まあね。みんなを守れるへりが強くなるために、結構鍛えてたから……じゃなくて……」

「吉井、朝から騒ぎますわだわ。一体どうした？」

不思議そうな顔で僕をみつめるシグナム。

いや、僕としてはこの場に貴女がいるほうが不思議で仕方ないんだけど……。

なぜここにシグナムがいるのか、その話を元に……って、そういう話すら始まつていなかつたんだつけ……なんて考えている途中、職員室のドアが開かれ、外から白衣を身に付けた金色のショートヘアーの女性が……つて……！

「あら、明久君。おはようございます」

「なんでシャマルまでここここののを

！――！」

「吉井、朝から喧しきぞ（ゴスツ）」

冷静さを取り戻したところに、再び度肝を抜くようなイベントが待っていたとは想像も付かなかつた。

そしていつの間にか背後に立つていた鉄人に頭を殴られた。

「なんでつて……はやてちゃんから何も聞いてないんですか？」

「え？いや、何も……」

僕の言葉に、シャマルだけでなく、シグナムとフロイトもどこか納得したよくな……あるいは、『ああ、またか』的な感じの雰囲気でため息を吐いていた。

「（あのね、私たちは管理局の権限でこの学校に教師としてこりの）

「

シャマルが僕に念話で語りかけてくる。

なるほど、管理局の権限……って、それって偽造免許なんじゃ……なんて言つてられないか。状況が状況だし。少しでも仲間を一箇所に集めさせておくのが目的なのか。

とりあえず、これでなんでこの場にシグナム達がいるのかは解つた。

「はあああああ…………」

解つたと同時に僕は深いため息を吐いた。

「失礼しまーす。今日からこの学校に転向してきた八神なんやけど……おつ、アキ君！」

「邪魔するだー……つて、どうしたんだ、明久。朝から疲れた顔してんなー」

ため息の元凶である昔馴染み、はやてが文用学園の制服を身に付けて職員室に入ってきた。隣には同じように文用学園の制服を着たヴィータがいた。なるほど、ヴィータはシグナム達と違つて背が足りないから、教師ではなく学生にしたのか……。

「どないしたん? 朝からえらい疲れた顔してるので、アキ君」

「はやて、ビューティシグナム達が学校にいるつて教えてくれなかつたの?」

「ん? ああ、そのことな

僕の言葉にはやでが一瞬だけ考え込むような仕草をした後、ニヤリとしてやつたり、と言つたよつた顔つきになる。まさか……。

「その方がおもしろいからに決まつてるやん~」

やつぱりか……はやで、前はあんなに優しい少女だつたのに……八年前とは違つ意味で成長していた昔馴染みに、僕はその場に頃垂れてため息を吐くしかできなかつた。

「これより、異端者・吉井明久の審問を行づ」

フロイト達と職員室で別れた後、教室に付いた途端、僕の周りには覆面とマントを身に付けたクラスメイトに囲まれる羽目になつた。しまつた!すっかりさつきの騒ぎでここにつらの事を失念していた!!

「罪状、吉井明久は今朝方、見田麗しき美少女と仲睦まじく登校していた…これに相違ないか」

『『『相違ありません』』』

「吉井明久、何か言い残す事は無いか?」

「なんで尋問の前に刑が下る直前の台詞が出るのー?」

前から思つてたけど、この審問会色々とすつ飛ばしそうだと思つ。

「判決、死『ちょっと待ちなさい』 む？」

助かつた！誰かは知らないけど僕に助け船を

「アキ、見田麗しき美少女つて誰なのかしら？」

「お話をうそく聞かせてくださいね」

そこにいたのは怒髪天をついている美波と、闇の書も真っ青なくらいの禍々しいオーラを身にまとった姫路さんだった。

どうやら僕に渡されたのは助け船じゃなくて天国行きの船らしい。

『姫路様、島田様、今は異端審問会の最中。どうかお引取り願いたい』

どうぞにいる貴族に仕える執事みたいに突然恭しくなる須川君。足元を見てみると、まるで地震でも起きているかのように震えている。周りを見れば彼だけでなく、他のメンバー全員が体を震わせていた。

ふつ、君達なんてまだいい方さ。

僕なんて、そのオーラを真正面から喰いついてるおかげで震えすらできない。

「ダメよ、今すぐアキを引き渡しなさい」

「そうですよ、私たちは明久君に話があるんですから… そうですよね、明久君？」

邪悪なオーラと大気が震えるほど殺氣を放っている姫路さんと美波。その後ろでは、僕が逃げ出さないように出入り口を押さえている

る異端審問会。……。

前門の美波と姫路さん、後門の異端審問会。

まぢー… どっちに向かっても僕の生き残れる道が無い。

ぐつ… こままでは… そうだ、異端審問会の注意を少しでも逸らすんだ。出入り口さえ確保できれば、あとは職員室にでも逃げ込めばいい… そうすれば、鉄人か… あるいはシグナムと一緒にこの教室に戻つてこられる。

考えはまとまった。後は行動するのみ。

「あつー！ 雄一が霧島さんと手をつなぎながら登校してくる…。」

『 『 『 何だと…？？？』 』 』

チャンス！

今のうちに職員室まで一気に駆け出し… そつ思つ前に僕の両肩関節がしつかりと取り押さえられていた。

「アキ、 どに行こうつて言つの？」

「 しょ、 職員室に忘れ物を取りに行く… だ、 け…」

ぐおおー！ 肩が！ 両肩が… こままじゃ外れる…！
肩の激痛に耐えながら僕は必死に一人に言い聞かせる。

「嘘ね」

「嘘ですね」

考える間もなく僕の言葉を否定する一人。え？少しは考えていいんじゃないの！？

「アキ、いくら逃げ出そうと思つてるからって、職員室はないんじやないの？」

「そいつです、まだ更衣室の方が信憑性はあります

「僕はどんな奴だと思わてるの！？」

クラスメイト女子のあんまりな言葉に僕は涙しそうになつた。
ぐつ…まさか彼女達の転校初日が僕の命日になるだなんて……

「何をしている、お前ら席に着け」

気が付けば朝のホームルームの時間になつていた。
鉄人の一喝により、騒ぎは終息した。

普段は暑苦しいだけの存在だが、この時ばかりは鉄人がギリシャ神話に出てくる神に思えた。

段ボールの机にそれぞれ着席するのを確認すると、鉄人は咳払いをした後、話し始める。

「あー、今日はお前らに重要な知らせがある

重要な知らせ？それって…ああ、副担任のシグナムのことか。
確かに重要な事だ。特にクラスメイトは発狂するぐらい喜ぶだろくな……

そりゃあ、フェイト達のクラスってどうだろ？
彼女達の学力は知らないけど、少なくともFクラスは無いだろ？
ひょっとしたら、全員Aクラスかな？

なんて考えていた僕だけど、次に出てきた鉄人の言葉には思わず耳を疑つた。

「喜べ、今日から我がFクラスに副担任と『転校生』が来ることになつた」

はい？

え？ 今、こいつなんて言つた？

「八神先生、入つて来てください」

「つむ」

鉄人の言葉に従い、ジャージに竹刀片手のシグナムが教室に入つてくる。入つてきた瞬間、教室中の男子から『おおー！』などといふ声が響いた。

教卓の前に立つと、シグナムは思わず目が引くぐらい大きな胸を張つて口を開く。

「今日からこの学校に赴任した八神シグナムだ。担当は体育。Fクラスの副担任としてお前らを西村先生共々鍛えていくつもりだから覚悟するのだな」

シグナム、それ脅しになつてない？

まあ、この学力最低クラスの事だからなあ…シグナムみたいな堅物がそんな連中の担任になつたんだ。これからバリバリしごかれる事は火を見るよりも明らかだ。

「ちなみに私は補習室も担当している。もし私の前で戦死して逃げ出そうという愚か者がいた場合は……吉井、ちょっと前に出る」

「え？ うん」

シグナムに言われ、僕は前に出る。

するとシグナムは僕にどこから取り出したのか、厚さ数センチぐらいはある木の板を僕に渡した。何これ？

なんて思った瞬間、シグナムが竹刀を上段に構え、そのまま勢いよく振り下ろしてきた。

「ツー！」

慌てて僕は木の板を両手で突き出し、その板で竹刀の一撃を防いだ。

ゾン！…空気が切断される凄まじい音がFクラスの教室に響く。その後に、パカンという間の抜けた音が響くと同時に、僕の持つていた木の板が真っ二つに割っていた。

何!? これ、竹刀だよね! ? 竹刀なのになんで剣みたいに真っ二つに斬れるの! ?

「！」の剣技をもってしても連れて行くので…肝に銘じておけ

『『『『イエス・マム! ! ! !』』』』

ひきつった笑みを浮かべるクラスメイト達。

そりやそうだ。

こんな人間技じゃない威力の太刀筋を見せられて驚かない人間などいない。

「いやあ、助かりますハ神先生…」いつのときたら補習の最中でも平気に逃げ出そうとするのですからね

「ふつ、我が剣が必要となつたらいつでも呼んでくれ」

鉄人の言葉に、竹刀片手で答えるシグナム。
なぜだらう…その竹刀がどうしても真剣に見えて仕方ない。

「さて、続いて転校生の紹介だ。入つて来い」

ガラリ、ヒ引き戸が開かれる。

そして…中に入つてくる彼女達を見て僕は…いや、教室中の男子
が息を呑んだ。

最初に入つてきたのは、茶色の髪を一つに結つた美少女、なのは。
次に入つてきたのは、僕の家で同居する事になつた美少女、フエ
イト。

その次に入つてきたのは、今朝の職員室での騒動の元凶になつた
美少女、はやて。

最後に入つてきたのは、はやてを守護する騎士の一人で、美少女
…ではなく、美幼女のヴィータ。

まさか昔馴染みのほとんどが同じクラスになるとは思つてもいいな
かつた。

僕が思わず苦笑した時だつた。

『『『ひおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお

おおお
おおお
おお
おお
おお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお
おおおおおおおおお
おおおおおおお
おおおおお
おおおお
おおお
おお
お

教室中を振動させるほどの声をあげるFクラス男子。

『女子だー。それも全黙、姫路さんクラスの美少女！』

『茶髪の髪の子、可愛いーー。』

『金髪の人、美しそうます！』

『茶髪のショートヘアの人、付き合ってくださいー。』

『幼女…はあはあ』

色々と問題発言が飛び交う中、ある者はブレイクダンス。ある者は「サックダンス。ある者はオーバーリミッツ。ある者は昇天……バカばっかりだ。そんなみんなに鉄人とシグナムが睨みをきかせると、大人しくなった。

ちなみに、フェイト達は今の光景に若干だが引いていた。そりや
そりや。

「あー、とりあえず高町から順に自己紹介を始めてくれ

「あ、はー」

今まで呆然としていたのは達だったけど、鉄人の言葉で正気に
戻り、自己紹介始めた。

「高町なのはつていいます。海鳴市から来ました。これから一年、よろしくお願ひします！」

そう言つてぺこりと頭を下げるのは。

続いてフェイトが前に出る…その時、僕と田が合いニコリと笑みを浮かべた。

「フェイト・T・ハラオウンつていいます。なのはと同じ場所から来ました。ちなみに、そこに座っている吉井明久君と、私たちは昔馴染みの親友です。みなさん、よろしくお願ひします！」

そう言つてフェイトが頭を下げた…タイミングを見計らつてクラスマイト達が僕に向かつてカッターを投げつけてきた。い、今避けなかつたら確実に首に刺さつてたよ……

なんて僕が冷や汗をかいと、突然ガタガタという音が響く。音のした方に振り向くと、そこには教卓を持ち上げたヴィータの姿が……つて、何やつてんの！？

「おら、てめえら…何、明久に向かつてカッター投げてんだ？」

ドスの利いた声でカッターを投げつけてきたクラスメイトをにらむヴィータ。

「あたしは八神ヴィータ。そこにいる吉井明久の仲間であり、後ろにいるはやてを守る家族だ。あたしの仲間や家族に手え出してみろ……ぶつ潰してやる」

言いながら教卓を持ち上げ続けるヴィータ。

そこでグラーフ・アイゼンを使わないのはせめてもの情けなのか

なんて思つてたら雄一がすぐりと立ち上がる。

「あー、八神…ヴィータだな？」

「あつ、そうだけど？」

雄一は昨日会つてゐるナビ、一人ともクラスメイトの前では初対面を装つていた。

まあ、昨日あつていた…なんて話したらまた余計な騒動を巻き起しそうのは間違いないし、賢明な判断といえるだらう。

「とつあえず教卓を置け。話が進まんし…何より教卓を武器に使うな」

おお、珍しい。雄一が正論を言つてるよ。

「ナビよお、あいつら明久を」

「解つてゐ。だが教卓を武器に使うのは間違いだ

「うんうん。そうだね。

「使うなら金属製のバットでいい

『『『俺を叩きのめすのはいつのまにかよ…?…?…?』』』

そのとおり。

教卓なんて使つたら先生達が困るもんね。

「解ったよ。ちえ」

ヴィーダが舌打ちをしながら戻っていく。

その姿に苦笑いを浮かべていたはやてだつたけど、気を取り直して、前に出る。

「私はハ神はやて、なのはちゃん達と同じところから来たんや。ついでに、そこにいるアキ君とは知り合いや。これからよろしくなー！」

にこやかに、元気に自己紹介するはやてに今まで殺伐とした雰囲気が、少しだけ緩和される。はやて…正直、助かったよ。

僕がホッと息を吐いた…途端に再び背中に凄まじい悪寒が走る。振り向いてみると、そこにはまるで般若のような鋭い視線で僕を見つめる姫路さんと美波がいた。

(アキ?これってどういふこと?)

(むづくづ、しつかり、一字一句魂魄を込めて話してくださいね)

どうしよう、今すぐ逃げ出したい。

果たして、僕の輝かしい青春の行方はいかに?
次回に続く…!

第三話（後書き）

次回はFクラスでの日常を描いていきたいと思います。

第四話（前書き）

Fクラスでの日常です。

第四話

なのは達が僕らの教室に来てから五分後……これから彼女達との青春の日々が待っていると思うと、僕、吉井明久は胸が躍るような気分になった。

けれど、それは少し後になりそうだ。

現在、僕は尋問されていた。

目の前にいるのはツリ田をもの凄く鋭くしている猛獸のような殺氣を辺りに振りまいている美波。もう一人は虚ろな視線で僕に呪いをかける勢いで邪悪なオーラを漂わせている姫路さん。なぜだ、闇の書の方が怖いはずなのに、あれと対峙したときよりもずっと怖いのは気のせいなのか？

「アキ、これはほんたうじうこと？」

「正直に話していくださいね」

「しょ、正直って言われて……か、彼女達とは昔馴染みなんだだけだよ」

「本当に？」

美波が疑いの目で僕を見る。なぜ？

「吉井君、それは本当なんですか？」

姫路さんが瞳から禍々しい光を放ちながら僕に問いかけてくる……

…ははっ、おかしいや。さつきから体が金縛りにかかつたよつに動けない。

「う、うん… 小学二年生の時に知りあつて… それから昨日まで音信不通だつたんだけど…」

「それなのにどうしてその子達がここにいるの?」

美波の言葉に、僕はため息を吐いた。わるいけど、その言葉には答える訳にはいかない。

ここは管理外世界。魔法の存在は秘匿にしておかなければいけないし、僕らはそれを迂闊に誰かに話してはいけない義務を持っている。とりあえず何か言い訳を考えないと……と思つてたとき、ふと僕は疑問に思つた。

「… というか、一人とも何で僕に聞いてるの? 普通にフェイト達に聞けばいいと思うんだけど……」

「うう…」

僕の言葉に二人が何か言葉に詰まつたような反応をする。

これは…論破できたつてことなのかな? まあ、だったらなんで二人がこんな尋問みたいな行動を取つたのか尋ねて… みようと思ったけど、去年から美波には散々な目に合わされてるし、姫路さんもFクラスに(悪い意味で)馴染んできちゃつてるし、下手な刺激は逆に事態を悪化させてしまつから、やめておこう…… 僕も大分捜査官としての勘が働くようになつたかもしれない。まあ、その成長がこんな生命の危機のような状況が促しているだなんて悲しすぎるけど。

「じゃあ、この話はお終い。そろそろ授業が始まるし、席に着こ

「よ

「わ、わかったわよ

「はい」

僕に言われて、一人ともじぶじぶ、といった様子でみかん箱の机と、自分の席の座布団に座る。相変わらず僕らの教室って凄いよなあ……こんな教室じゃあ、体が弱い人はすぐに病気に……。

僕は一つの可能性に思い当たり、近くで僕らのやり取りを見ていたヴィータに視線を向ける。

「…………（ねえ、ヴィータ）」

念話で彼女に話しかける。

「（ん？なんだよ）」

「（こんな教室の設備じやそ、はあて……また具合悪くしちゃうんじやないかな？）」

「（うーーたしかに……）」

僕の言葉に、ヴィータが驚いたような顔になる。

その言葉に頷いてから、今度はヴィータにつないだまま、雄一に念話で話しかけてみる。

「（ねえ、雄一。ちよつと相談があるんだ）」

「（なんだ、明久）」

「（あと少しで清涼祭の時期でしょう）」

「（ん？ああ、たしかにそうだが？）」

「（それがはやてのことどどひ関係あるんだよ）」

「（ヴィータが焦ったような口調で僕に語りかかる。その焦りは、はやてのことを大事に思つてゐからこそなんだろ？）

「（清涼祭の売上金で、ここは設備少しでもよくできなこかな？）

「（設備をよくするだ？……まあ、できなくもないが……）」

「（本当にかー…）」

雄一の言葉に、ヴィータが光を見た、と言わんばかりの表情になる。僕も雄一の言葉に、少しだけ安心した。清涼祭の売り上げで設備が少しでも良く出来るのなら、それに越した事は無いもんね。

「（やれど、やつなるとどうやって売り上げを手に入れるか考えないこと……あつがとう、雄一）」

「（おー、貸してだよ。後でジュースおごねよ）」

なんて言つてきたけど、ここは頷いておこつ。雄一の助言が無かつたらきっと困つていただろうし、雄一も僕とヴィータのやり取りでなんとなく理由が解つた感じだつたみたいだから、きっと力になつてくれるだらう。そう思えば百円ぐらいの出費なんて痛くも無い。

本当に痛くもかゆくもあるのは……。

『吉井殺す』

『吉井殺す』

『吉井殺す』

『吉井射殺す』

『吉井刺し殺す』

これから異端審問会で物理的にありえそうだ、といつことだ。
というか、みんなさつきから僕を殺す発言しかしてない！なんか
背筋から寒気のようなものをさつきから感じまくってるし…！

『吉井滅多刺しにしてから五体をバラバラに解体して埋めてやる』

『炎よ。　吉井明久に苦痛の贈り物を！…』

『吉イイイイイイイ井ぐウウウウウン！…！…！』

『十字架は吉井明久を拒絶する』

『優先する。　吉井明久を下位に。　みかん箱を上位に』

「ちよっとおー！？途中から禁書的な魔術を使い始めている人がいる
んだけどー！？ってうわあー炎が飛んでき…つお！危なつ！…！」

飛んで襲い掛かってくる十字架やみかん箱を避けまくる僕。途中

からなんか質量兵器を持ち出してくる連中がいたり、魔術：という名の手品（炎ならガソリンをまいて火をつける等）を使って僕を殺そうと躍起になる連中の手から必死に逃げる。

「てめえ!...いい加減にしぃおおおおおおおおおおお...!..!..!..!..!..!..!..!

キレたヴィータが教卓を振り回して異端審問会の連中をなぎ払い始めた。おお、助かった……と思つたのも束の間。

「アーヴィング...」

あ

数秒後、僕の頬に教卓の角がめり込み、僕は壁まで吹っ飛ばされて意識を失った。

明久（アキ君）

。 意識を失う直前、彼女達の叫び声が聞こえてきたのは気のせいかな

「うう……酷い目に会つた」

「大丈夫、 明久？」

「あー…『ごめん、 明久』

今の時間は昼休み。僕は四時限目まで保健室で過ごす羽目になり、目覚めたあとも、ヴィータの一撃を受けて虫歯みたいに腫れた頬にはパツチが張られていた。

「別にいいよ、 それよりも『飯食べよ』

そう言つて僕は笑顔を浮かべて鞄から今朝作つてきた弁当を取り出す。教卓でのヴィータの攻撃なんて、アイゼンでのラテーケン・ハンマーの一撃に比べたらまだ可愛いものだ。

「そうだね」

「せやな

「おひー！」

「うんー！」

僕の言葉に反応してか、なのは達も鞄から弁当箱を取り出す。とはいえ、食べる場所がみかん箱の上だとなんだか少し場所的にあれかもしれない……。

「なんだ、お前らも弁当なのか？」

「あれ？ 雄一もなの？」

雄一の手には一つの……一般的にドカベンと呼ばれるとても大きな弁当箱が握られていた。どうやらここにも今日は弁当らしい。というより、こつも思つんだけどこつの食事量が凄まじすぎるのではなくだらう。フードファイターでも田舎してるの？

「田舎してねえよ。それより、こんなぼろい所より屋上でも行こうぜ。そっちの方が心地よく飯が食えるだろ」

「それもやうだね。あつ、ムツツコーー達も食べるー。」

「…………（「クツ）」

「ふむ、なら同席させてもいいのかの」

「みんな、ムツツコーー達も混ざるナビ、いい？」

「私はここよ

「私もー。」

「つちもかまわんで」

「別にこいぜ」

「よし、それじゃあ行こつか」

ほつぽい教室で食べるよつも、開放感溢れる屋上を望んだ僕らは、そつそく屋上へと向かおつとした。

「あ、あの明久君達……」

「ん？」

突然呼び止められ、僕らは振り返る。

そこには顔を少し赤くしてもじもじと可愛らしい動作をしている姫路さんと、むすつとした顔つきになつている美波がいた。どうしたんだろ？何か用事かな？

「あの、私たちも一緒にお食事に混ぜてもいいですか？」

ああ、なんだそんな事か。断る理由も無いので、僕らは当然了承した……良かつた、腕間接を持つていかれるような内容じゃなくて。

僕は心の中でせつと胸をなでおろしたのだった。

「……翔子、なんでお前がここにいる」

「……夫の隣に妻がいるのは、常識」

「あはは、なんだか面白そうだから着いてきちゃったよ」

途中で会流した霧島さんと藤さんと一緒に昼食をとることになった僕ら。藤さんはやは氣が合つといつ、同類といつか：まあ、出合つた瞬間になんだかまるで田舎の友のように仲良くなつていた。

ちなみに一人の会話を聞いたのか、ムツツリーは鼻から血を流していた。

「うーん、風が気持ちいいなあ」

頬をなでる初夏の風が気持ちいいのか、フエイトは大きく伸びをしながら堪能していた。その際、風が強いせいか、スカートがはためいていて、ムツツリーはそれを凝視していた。…………なんでだろ？、それをやられると少しだけ腹が立つたのは……。

「ほら、早く！」飯食べようよ

「あっ、そうだね」

僕の言葉に反応し、各々が持参してきたお弁当を広げる。
同じ家で住んでいる僕とフェイトの弁当はエビフライの卵とじ、
ピリ辛風味の野菜炒め、肉じゃが、そして自信作の鶏の五目ご飯だ。
今日は朝早く目が覚めたから、ここまで手の込んだ料理が作れたんだよね。

「おお、明久の弁当のくせに美味そりゃねえか」

「…………手の込んでいる」

「冷めておるのはどうしても冷めてしまつものだから、今回はそれを視点に入れて、冷めても美味しいように工夫したんだ。

「あはは、まあね」

お弁当つて言つのはどうしても冷めてしまつものだから、今回はそれを視点に入れて、冷めても美味しいように工夫したんだ。

「本當……美味しそうね…………」

「はい… 美味しそうですね…」

姫路さんと美波が僕のお弁当箱をじっと見ていた。どうしたんだろ？

「ねえ、アキ。誰に作つてもらつたの？」

「
^
?」

「吉井君、一体誰に作つてもらつたんですか！？」

いや、これは僕が作つたんだけど……」

一
嘘
ね

「嘘ですね」

どうして僕の言葉は毎度毎度あつさりと一蹴されるんだろう。
しかしこのまま引き下がるわけには行かない。僕にも一応は料理人としてのプライドがある！

「いや、これは本当に…」

「明久君！誰に作つてもらつたんですか！？」

「いだだだだだだだだつーーー！」

反論しようとしたらアイアンクローを受けていた。どんな罪人で

も、尋問でいきなりアイアンクローセセられた話せるものも話せないと思つ。

「あ、明久！？」一人とも、それじゃあ話せないから…」

「と、いうか、二人とも全然聞こきないよね…？話し合わないと何事も解決しないよ…」

フエイトとののはの言葉によつやく僕はこめかみの痛みから解放される。うう。まだ痛いよ……。けれど美波と姫路さんは今だ納得していないうな感じだ。

「だ、だつて…アキに料理なんかできるわけないもの。それなのに正直に言わないから…」

酷い言われようだ。

すると、はやてが僕の不満を察してくれたのか、説明してくれた。

「あのな、アキ君は、うみえても料理が得意なんやで。私も何度も参考にさせてもらつたくらじやし」

「そ、う？僕も結構、はやての料理には参考にできる点が合つたけど？」

「いやいや、私なんてまだまだや。小学三年でラーメンを麺から出汁まで作り上げることが出来るのはアキ君だけやと思うで？」

その言葉になのは達がうんうん、と頷いた後その時の味を思い出したのか、うつとりとした表情を浮かべた。フエイトにいたつては昨日食べたの美味しかったなあ…などと呟いていた。そんな表情を

されると、料理人冥利に尽きるっていう言葉が浮かぶよね。

「マジかよ……明久、お前それはある意味凄いぞ」

「…………天才の領域」

「たしかにそれは凄いの……」

さらに雄一やムツツリーに秀吉まで僕の料理の腕に驚いていた。いやいや、そんなことはないって。さて、姫路さんや美波はどんな反応を……。

「…………」

「…………」

二人とも石像のように固まっていた。え？ そんなにショックングだつた？

すると美波がゆっくりとした動作で手を伸ばし、僕の弁当から玉子焼きをひょいと取つていった。

「ああー美波、いきなり何を！？」

「…………」

しばらく口の中で咀嚼していた美波だけど、飲み込んだ後、地面に両手をついて頃垂れていた。あれ？ おかしいな……自信作だと思ってたのに……。

「…………こんな」とつて……女のプライドが……」

「み、美波ちゃんー…どうしたんですか！？…やつぱり不味かつたんですか！…？？」

「え？ そんなことないけど？」

言いながらフロイトは僕が作った弁当を食べながら幸せな表情を浮かべる。

フロイトの言葉に反応したのか、姫路さんも僕の弁当からおかずを一つ持つてじつて食べる。どうでもいいけど、僕の了承とかそんなのつて無いの？

「…………」

そして姫路さんも美波と同じように床に両手をついて頃垂れた。
何？本当になんなの？

「……吉井、私にも一つ」

「僕にもくれないかな？代わりにおかずと一緒に交換で」

「あつ、それやつたら私も頼むわ

「私もー！」

「なんばわしむ

「…………俺も

「…………俺も

言葉を交わしながら僕達はおかずを交換する。

うん、バラエティ豊かになつて美味しいそうだ。」つやつて友達同士でおかずを交換して談笑しながら食事をするのって学生の特権だよね。

そして僕のおかずを食べた人の感想はといつと……。

「ほう、これは美味しいな」

「……美味しい。うちのコックにしたいくらい」

「…………美味しい」

「たしかに美味しいの?」

「凄いね~吉井君。これ、本当に美味しいよ~」

「にやはは、アキ君の料理の腕、かなり上がったみたいだね」

「そりだね!あの時も美味しかったけど、八年前よりも美味しい!」

「うーん、やつぱりアキ君の料理は美味しいわあ」

「くうくうギガ美味え!~はやての料理もギガ美味いけど、明久の料理もギガ美味え!~」

そう言って笑顔になるみんな。

やつぱり料理って言うのは他人に作つてあげるのが一番だよね。

この笑顔のためにこそ、頑張れるというか。

ちなみに美波と姫路さんは未だに復活していなかつた。

一人には悪いけど、昼休みの時間は限られているので、僕はみんなから貰つたおかずを食べる事にする。

「うん、はやても腕を上げたね。この唐揚げ、とっても美味しいよ」

「ありがとなー！」

ああ、穏やかだ。

澄み切つた初夏の空。心地よい風。美味しい弁当を囲んで楽しく談笑する仲間達。

さつきまでかなり殺伐としていた雰囲気から一転して、この平和で穏やかな昼休み。僕は幸せを感じながらこの時間を少しでも濃密に過ごそうと思った。

すると、今まで頃垂れていた姫路さんがガバリと起き上がる。ん？一体どうしたんだ？

ゾクリ！――――

瞬間、僕らの背筋に痛みを感じるほどの寒気が走る。

それは僕だけではないらしい。雄二やムツツリー、秀吉までも恐怖に戦慄する表情になっていた。ま、まさか……姫路さん……。

「ジツハワタシ……」

おかしい、震えが止まらない。

なんだ、この感じ……虚数空間に引き込まれる方がずっとマシだと感じられる気配だ……。

ギュウッ！－

隣ではフェイトが顔面を蒼白にして僕の腕にしがみついていた。フェイトだけじゃない。なのはやはやて、ヴィータまで顔を真っ青にしていた。え？どうしたの？四人とも、姫路さんの料理は今回が初めてなはず……。

「（あ、明久……なぜか、私達……このお弁当に命の危機を感じるんだけど）」

「（う、うん……それにこの感じは……）」

「（せや……もう何度も体験している……）」

「（シャマルの時と同じ気配だ……）」

念話で僕に語りかけてくる彼女達。

そして納得してしまう。そういうえばシャマルも姫路さんレベルの料理人だったことを……だからみんな反応したんだ……体が、すっかりその恐怖を覚えてしまっているから。

「オベントウヲツクツテキタンデスケド……」

そう言つて弁当箱のふたを開ける姫路さん。
中から現れたのは見た目美味しいそうな可愛らしいオーソドックスなお弁当。

僕らは最初これに騙され、あっさりと命を刈り取られた……そのせいか、見える。その弁当から放たれる禍々しい気配を！命を根こそぎ刈り取るであろう刃が！歪められた空間から現れる悪霊の腕が！くつ……体がバインドにかけられたように動かない……

そして、死神は無情にも僕らに告げる……

「モシヨロシカツタラメシアガツテクダサイ」

逝つて来い、と。

『……………逝ただきます』『』『』

葛藤の末、僕らは死神の誘いを受ける事にした。

見た目一番よさそうな玉子焼きを選び、僕はそれを口に運ぶ。

「……………」

口の中に異物が入った瞬間、僕の目の前は暗転し、一瞬だが死んだ爺ちゃんや婆ちゃん、リインフォースが見えた気がした。く、口に入れただけでこの破壊力か……………

「……………（ギリギリギリギリ）」

周りを見ると、雄一はプチトマトを口に入れて、へたを持つたまま白目を向いて首を三百六十度回転させていた。何…？プチトマトつてただ単に添えるだけのものだよね…？それが何をやつたらそんなエクソシストみたいな現象を起こすわけ…？

「……………（ビヨンビヨンビヨン）」

「ロッケを食べたムツリーは床に倒れ、その体を痙攣させて

いた……おかしい、ムツツリーの体から電気のよつたものが見える。

「…………かわ、いほひ…………」

「…………（シユ————）」

「…………（ぐつたり）」

「…………（カチンゴヤン）」

「…………（ジロコ）」

サラダを口にした秀吉は首をかきむしり、まるで雛見沢症候群にかかるような感じになっていたし、フエイトはご飯を口にした瞬間その可愛らしい口から煙を上げていたし、なのははエビフライを食べて頭からキノコを生やして倒れたし、はやは僕と同じ玉子焼きを口にしたはずなのに、僕とは違つて体が石化していたし、見えなかつたけど、何かを口にしたヴィータは両耳から半透明で緑色の液体を噴き出して轟沈していた。えつー？本当に何を食べたのヴィータ！？

「み、みんな…………うつー！」

なんて驚いていた僕だけ、うつかり口にしていた玉子焼きを一噛みしてしまう。

瞬間、僕の上半身の各所が突然裂傷し、そこから噴き出す血……「はつー！な、なんて破壊力だ……というか、どんなものを入れたらこんな結果が……。

ふつ…………そろいもそろつて僕らって…………本当に、バ……カ……

.....。

青空を見ながら、僕らは仲良く逝つた。

ひつして、僕らも含めてフェイト達は転校初日から保健室に世話を
ことになつたのだった。

第四話（後書き）

姫路さんの手料理は相変わらずの殺人兵器…おそらく、シャマル共々これからもガンガン出て来るでしょう。

第五話（前書き）

あの惨劇から数日後……彼らは今。

第五話

「……雄一」

「なんだ、翔子？」

「……フェイトや吉井が進んでいること、知っている?」

「ん?あー……そのことか。まあ、知っているが?」

「……私たちも、負けられない」

「そうだな、明久の野郎はバカの癖に魔力ランクがある年でSSS - だもんな。俺らも負けてられない」

「……そうじやない」

「それに他の連中もどいつもこいつもSランクだ。俺らも一応、Sランクとはいえ、あこづらの足を引っ張るよつなことはできねえからな」

「……雄一」

「それに知ってるか、翔子?あのバカは『紅の魔剣』なんて異名まで持ってるんだぜ?あの能天気な面からは想像できない頭蓋が締め付けられえええ」

「……雄一、重要なのはそいじやない」

「いや、これから先のことだから重要だつが、……」

「……私が言いたいのはやじじゃない」

「あん？」

「……フロイトは、吉井の家に住んでいる」

「まあ、形としてはホームステイだがな。それがどうした?」

「……だから私も雄一の家に、ホームステイする」

「待て翔子、色々すつ飛ばしそうだ」

「……問題ない。フロイトは普通に暮らしている」

「あれは学校公認だからだ！普通に高校生が同棲してゐるのは、色々と問題があるんだよ！…」

「……大丈夫、問題は無い」

「あへ…どうこうだ？」

「……なのはなとまやで達は、普通に同棲している」

「性別を考えろーーあれは女の子同士だから免除されてるんだよーー。男女が一緒に暮らせるのなんて、色々と問題があるから学校が納得するわけねえだうが！…！」

「……雄一は意地悪」

「俺は当たり前の事しか言つてねえだろ？が……」

「……でも吉井達は同棲してる」

「明久達のは色々と訳があつて、同居してるんだろ？多分だが……」

「……」

「……訳？」

「それがなんなのか解らないがな。そういうえばあいつ、ロストロギアを体に持つていたって言つてたな……それが関係しているのか？」

「……違つ

「あ？ なんでそう言い切れるんだよ」

「……フェイトは、リンクティ艦長の義理の娘」

「だからなんだ？」

「……吉井は、その人と昔からの知り合いみたいだから……」

「……明久の奴、外堀を少しずつ埋められていつてるのか、哀れな奴だ」

「……だから、私たちもやるべき」

「はつ？ いや、だから無理だつて言つてるだろ？がー！ 大体そんなん許可できるわけ……」

「……大丈夫」

「あ？」

「……お義母さんには、もう許可を貰っているから」

「お袋も

「つづ……」

あの騒動から三日後。

土曜日に入り、学校が休みになつた僕らは一時、故郷である地球から離れ、ミッドチルダに来ていた。別に遊びに来たというわけでは残念ながらない。ではなぜ地球から離れ、ここに来たのか？
それは僕らの戦力を把握したいからだ。

雄二や霧島さんの実力のデータは、手元にちゃんとあるけど、やつぱり実戦でしっかりと把握しておきたいと……その……シグナムとフェイトが言ったので、じうしてやってきました。

ちなみに、万が一エネミーが出る可能性があるので、なのはに、ヴィータ、シャマル、ザフィーラ、アルフは地球で待機しておいてもらつている。

エネミーとの戦闘は三日続く事もあれば、五日間パタリと音沙汰が無い時もある。油断はできないんだけど、その相手がいつ現れるのかまったくタイミングがつかないので、正直精神的に来るものがあつたりする。

……話がされたね。

今、僕達がいるのは模擬戦会場。

周りは巨大なビル群に囲まれ、いつでも模擬戦を始められるようになつてはいるんだけど……。

「…………」

なぜかその会場でデバイスを開いて黒服に赤いスカーフを巻いたバトルジャケットを身に付けた僕と。

「~~~~~」

嬉しそうな表情で黒いバトルジャケットを身にまとったフェイトがいた……どうして、こんなことに……。

それは一時間前に遡る。

「うーん、クラナガンに来るのも久しぶりだなあ

管理局員の制服を身に付けながら、僕はそう言つて体を伸ばす。街並みは向こうとあまり変わらないけど、技術的にはこっちの方が上なんだよね。パソコンのキーボードは宙に浮いてるし、他の物だってかなり違っている。僕らの世界から見ればファイクションの中だけの存在の近未来的な街並みに、少しだけど僕は興奮していた。

「はあ、やっぱこっちの世界の技術はすごいよなあ……」

「だな、向こうではまだまだ実現できないもんが多いが、こっちに

くればそれが当たり前つてのが多いからな

僕の言葉に管理局員の制服を着た雄一が同意していた。

やつぱり雄一も僕と同じように興奮しているみたいだ。男としては、多分なりともSFチックな近未来に憧れをもつているものだから、このミッドナルダの世界は、僕ら男子の理想郷とでも言えよう。

「一人とも、何をしてくる。時間は限られているのだから、早く目的地に向かうぞ」

雄一と話をしていたら、シグナムに呼び止められた。

そうだった……一応、こっちには仕事の一環で来ているんだった……やれやれ、まだまだ僕も公私の切り替えが出来てないみたいだ……。

「一人とも、早く行けよ~

FHイトも呼んでいるので、僕は手を振って応え、急いで向かおうとしたんだけど……あれ? 雄一と霧島さんがいない……辺りを見渡してみると……。

『……雄一、あのマンションはまだつづく。』

『あ? 何がだ』

『……将来の家として』

『……うん』

『……や』

『高そうだけど頑張れ。俺が住む家はもっと安そうな物件を検討してみるわ』

『……今のは、許せない』

『ぐがおおお　　！！待て！待て、翔子！！』

霧島さんの手が雄一の頭を鷲掴みにし、雄一は傍から見ても痛々しげな悲鳴を全力で上げている……道行く人はその光景にドン引きしていた。

どうしよう、もの凄くあの二人に関わっちゃいけないよ、うつな気がするには気のせいかな？

否。

これは一般的な観点から見ても、充分に正常的な判断だと僕は自分に言い聞かせ、そのままシグナムとフェイントはやってのもとへと駆け出した。

『あ、明久！？てめえ、逃げ出してんじゃねえ！！おい！そこにいる思慮深さが感じられない顔をしているのは俺の連れだ！頼むから連れてきてくれ！！』

『……雄一、浮氣は許さない』

『今の発言にどこをどう解釈すればその言葉が出て来るんだ……あががががが！さつさと助ける明久あ……！』

『……雄一、私達が暮らす物件を見に行こ』

そのまま霧島さんは雄一を連れてビーチへと行ってしまった。

『 』 ･･ 』 』 』

まあ、近い未来確かにこっちで生活することになるんだろうけど…
二人とも、今日こっちに来た理由解つてるのかなあ？

「吉井、先に行ってくれ」

そう言ってシグナムが騒ぎ続いている一人の元へと歩き出す。

「じめん、シグナム…僕の悪友が、迷惑かけるね…」

「何、気にするな。今私は管理局員であり、同時にお前達の教師
でもあるのだ……担当の生徒を面倒見るのは当然の義務だ」

理解ある教師の言葉に僕は感動しながら、あそこで騒いでいるバ
力な悪友を任せることにした。遠くから『俺が悪いのか！？』と驚
愕に満ちた叫び声が聞こえてきた気がするけど、とりあえずスルー。

「ありがとう、シグナム。それじゃあ先に行つて

「なに、気にするな。後で私と一緒に戦えてくれるのならな

「やつぱり悪友だからねー僕が一人を連れてくるよーーー」

わざわざ担任の手を煩わせるほどのことではないので、僕は笑顔
で一人を追うとしたんだけど……。

ガシッ！

なぜかフロイトに肩をガツチリと握られ、一人を追う事ができな

くなつた。

「あの、フェイト？」

「なに、明久？」

「僕……一人を追いかけないといけないんだけど……」

「大丈夫だよ、シグナムがもう行つたから」

あら不思議。

さつきまですぐ近くにいたシグナムがもう既に雄二たちを追つてはるか遠くへ行つていた。

とりあえず、これで僕とシグナムの模擬戦は決まったも同然だつた……うう、シグナムのレヴァンティンの炎は正直トラウマなんだよなあ……八年前、モロにくらつてビルの壁に叩きつけられながら地面に落下していつた記憶が蘇つてくる……。

「いやあ、なんかこっち来てもあのテンショソントある意味尊敬で
きるわ」

「ですー」

そう言つて苦笑いを浮かべるはやてと……その隣で浮いている三十分くらいの小さな少女はリンフォース？。通称リンだ。最初の自己紹介の時には見かけなかつたけど、後々で聞いて驚いた。

どうやらまた、はやてのイタズラ心が発動したいみたいで、最近ではそれに慣れてきてしまつていて自分がいて、微妙に複雑な気分です。

まあ、それは良いとして、現在僕はフェイトに手を握られて歩い

ている。

フロイトのすべすべとした柔らかな手の感触に少しへキドキしながら、僕はフロイトの顔を見てみる。すると彼女はウキウキといった擬音が聞こえてきそうな笑顔で僕を引っ張っていた。

「えっと…フロイト、なんか凄く楽しそうだね？」

「あ、うん！」

僕の言葉に振り返って眩しいくらいの笑顔を見せるフロイト。でもなぜだろう、その笑顔に僕は少しだけ不安を覚えていた。はやての方に振り向くと、はやはグッと親指を立てて『頑張れ』と田舎囃。リインは……合掌。なぜ？

「明久、早く訓練所に行こうよー」

「えっ？ 雄一達が来てからじゅ……」

「何言つてるのー…それじゃ、私と明久の模擬戦が出来ないでしょー…」

え？

それからあれやこれやと場面が変わつて、現在管理局員専用訓練所。

管理局員なら、事前に申請さえしていればいつでも利用ができる

便利な場所だ。僕も「」で何十体のガジェットと戦つたのを覚えている。

そして雄一と霧島さんの実力を測るために来たのに、なぜか僕とフェイトは目の前で対峙していた。

「ああ、明久。準備はいい？」

「うーん……」

正直、あまり気が乗らない。

この前久しぶりに再会した昔馴染みと、それも女の子に剣を振るうなんて…なんというか、もの凄くやり辛いというか…まあ、向こうの僕になればそんなの関係ないんだろうけど……でも…それでもひとつ涙目になつた感じも…って、何考てるんだ僕は！？

まったく、そもそもあいつが霧島さんに拉致られなければフェイトと戦うなんてことには……。

「なんだ、明久？お前らも模擬戦やるのか？」

「あ、雄一」……

僕が心中で愚痴つてたら、雄一と霧島さんがいつの間にかここに来ていた。まったく、よつやく「」に来たか……そうだ…この状況を利用しよう…。

「ねえ、フェイト…今日は雄一と霧島さんの実力を測りにきたんだよね？」

「やうだけど？」

「うんうん、だったら

『だったら2対2の模擬戦を行えばええんとひやひや』

はやじく つ……

なんてことを…せつかくフロイトと模擬戦をやらなことひに配慮
しようと思つてたのに……なんて思つてたらほやて
から念話がかかつてた。

「（あー…アキ君、悪いんやけど…フロイトちゃんと模擬戦やつてくれへん…）」

「（なんで…）」

「（フロイトちゃん、じつもシグナムと同類になつてしまつあるん
や……）」

なんて悲しこことなんだ……八年という歳月は、人を変えてしま
うには充分すぎる年月なのだと、僕はこの時学んだ。

「（せやナビ…フロイトちゃん、アキ君と模擬戦をするの楽しみや
つたみたいやから…）」

「（……）」

僕との模擬戦が楽しみ、か。
やれやれ、できるのならもっと違うものを楽しみにして欲しかっ
たよ……。
でも。

「（解つたよ）」

その言葉で、僕の迷いは消えた。
だつて楽しみにしていたつて言うのなら、それを無下に断るのなんてできないもんね。

「フェイト、本気で行くよ？」

「うんー。望むどこのだよー。霧島さん、準備はいい？」

「……問題ない、いつでもいける

そう言つて紺色のバリアジャケットを身に付ける。その後に霧島さんの手には、西洋の騎士が馬上で使う長大なランスが握られていった。先端の方は薄くなつていて、突くだけでなく、斬るという戦い方も可能なデバイスだった。

「……ゲイヴォルク、準備はいい？」

『 yes . my load』

デバイス特有の機械音声を確認すると、霧島さんは長大なランスを軽々と片手で振るう。その後に、三角形の魔法陣が浮かび上がつた……以外にも、霧島さんはベルカ式の魔導師みた이다。

「雄一、戦闘態勢！－！」

「解つてる…戦^やるぞ、イージス！－！」

『了解です、坊ちゃん！』

雄一の言葉に『デバイスが応え、雄一の体が光に包まれ……ん？

『『坊ちゃん！…？』』

「…………」

赤を基調としたバリアジャケットを身に付けた雄一が、なんとも言えない複雑そうな表情をしている。それより今、なんか雄一なんかには大変似つかわしくない単語が出たような気がするんだけど……。

『どうしたんですか？皆さん』

「あー……イージス、少しだなあ……」

『はい、何でじょつか坊ちゃん？』

「それ言つの、止めろ」

『無理です、坊ちゃんは坊ちゃんですか？』

「…………はあ」

雄一がなんだか疲れた表情でトンファーを握っていた。

僕は雄一の手に握られている武器を見て、思わず意外だな、と思った。

トンファーは制圧と無力化に特化した武器で、攻撃方面というよりは、むしろ防御に特化している武器だ。僕の知り合いにも、トンファータイプのデバイスを扱う人がいたけど、まさか雄一もトンファ

ーを使うなんて……。

「雄一ってトンファーを扱うんだね」

「ん？ああ、色々試してみたんだが……」いつが一番しつくりきてな

「へえ……雄一って、見た目攻撃専門って感じだから防御の方なんて考えてないと思つてたのに……」

地球じゃ『悪鬼羅刹』なんて異名をつけられるぐらいだから、僕は攻撃に特化している武器を選ぶと思っていたから、トンファーなんて武器を雄一が使うなんて、と内心驚いていたら……。

「…………翔子から身を守るために必要だつたからな…………」

「…………」

あら不思議。さつきまで意外でしょうがなかつたのに、今の一言であつところ間に納得できてしまつた。

見ると、フロイトも苦笑いをしながら目を逸らしていた。多分、この様子を見てころはやしやリイン、シグナムも僕と同じ心境なのだろう。

「氣まずい、なんだかもの凄く氣まずいぞ……」

「…………？」

霧島さんはみんながなぜ黙っているのか解つてないみたいだ。いや、原因は一応君にあるんだけど……でもそれを言つのもなんだかなあ……。

なぜか模擬戦を始める前に一気に脱力してしまつてゐる僕らだつ

た。

『ぼ、坊ちゃん! 大丈夫です……坊ちゃんの身は、私が守りますか
ら……』

「それ止める、イージス」

さつきからちょいちょいに入る雄一の「バイス、イージスの坊ちゃん発言。これもやる気を下げる要因になつていてるんだよね……。いやだつて、雄一が『坊ちゃん』だよ?

もの凄く似合わないから、普段なら大笑いするといふなんだけど……なんというか、やる氣に拍車がかかっている時にやられると、一気に脱力する。

「……なんか、すまん」

雄一も自分の「バイスのせいなのは解つていいみたいで、疲れた表情でため息を吐いていた。まずい、このままじゃ今日は解散という可能性もある。

僕らは、雄一と霧島さんの実力を測るためにわざわざリハーサルまで来ているんだから、ここに何もしないで帰るなんて……ところのまですかにできない。

『あー、みんな? 私からいい案があるんやけど?』

スピーカーからはやての言葉が漏れる。
ナイスはやて! なんとしてもこの状況を開拓できる案を

『今回の模擬戦、勝つ方が負けた方に好きな命令を一つでも決めていいのはどうやる?』

あれ?なんか"デジャブ"?い、いや...これはほんの少し前にTクラスとAクラスの試合戦争であつたような...。
というか、はやて!なんだその罰ゲームみたいな提案は!...いや、間違つてはいけど、そんなもので僕らがやる気を見せる?...つて、うおおおお!??

突然背筋に凄まじい寒気を感じ、僕は驚いて飛びのいた。

「.....フュイト」

「霧島さん...ひづる、翔子!」

「「頑張りましょ!...」」「

向こうではフュイトと霧島さんが、傍から見ても解るぐらいのもの凄いやる気を見せていた。

目の錯覚なのか、一人の目が光を放つて居るように見えるや...。

「明久ー!」の勝負、何が何でも勝つぞー!..

「ゆ、雄二ー!」どうしたの、急に!?」

隣では先ほどとは打って変わって凄まじいやる気を見せて居る雄二がいた。

「「」の勝負、負けたら確実に俺の人生を一生左右する事になる!」だ

からお前も全力を出せ…なんとしても」の勝負、勝つ…！」

おお、『』までもやる気を見せて『』雄一を見るのは試合戦争以来だ。と、いうか、試合戦争以上のやる気を見せてない？あと、冷や汗もの凄いよ？

とはいって、僕もそれなりにやる気にはなっていた。
自分が罰ゲームを受けたくないのもあるし、それに……。

「雄一、もし勝つたらどうするの？」

「翔子に一ヶ月…いや、半ヶ月…一週間…三日…一月でもいいから、俺の家に来るな」と『』

今、もの凄く譲歩してなかつた？

といふか、さつきからもの凄く冷や汗をかいているけど、その汗は一体どうしたの？

「……翔子にそれを伝えて半殺しにされる自分が想像でききたんでな…」

「なるほど、よく解つたよ」

『』こつは本当に苦労している。

「ちなみに、半月では上半身の皮膚をはがされ、一週間では脳が圧迫されるぐらいの握力でアイアンクロスをかけられ、三日だと腕間接の大半を外され、一日だと五指を外すだけでなんとかなると思つた」

「まあ、それくらいが妥当だらうね」

美波や姫路さん辺りで仮定しても、それくらいがベターだと思つ。さてと、もしも僕が勝つたらフェイトになにを頼もうかな。

「…………（じゅるつ）」

「おい、明久！なにを想像してゐるんだー？」

「はつ！僕は何を！？」

雄一に言われ、僕は意識を取り戻す。
あ、危なかつた。危うく夢の世界にトリップするところだつたよ。

「お前は何を想像してゐたんだよ……」

「えつ？い、いやー別にムチと繩なんでもないよ……」

「おいー今一瞬、聞き逃してはいけないような単語を耳にしたぞー！
とにかく、お前つてそういう趣味だつたのかー？」

「べ、別に普通だよー！」

「ムチと繩で何かするのが普通なわけあるかーーお前とは一年來の付き合いだが、今の言葉には正直引いたぞー！」

「うつ……さすがに悪鬼羅刹と呼ばれた雄一も僕のあれはちょっと引くか……やつぱり世間一般ではこの趣味はあまり良心的ではないみたいだ。

「……つて、あれ？」

「ねえ、雄二……フェイト、鼻血を流していない？」

「あっ？何を言つて……」

僕の指を指す方向、霧島さんの隣ではムツツリー二みたいにフェイトが鼻血を流していた。な、なんか足元に血溜まりできてる！？

「え、えへへ……あ、明久を好きに……あつ、ダメだよ明久。好きにするのは私なんだから……ああ、でも……明久あ……あつ、うう……え、えへへへ」

「……フェイト、大丈夫？」

霧島さんが鼻血を流しているフェイトに近づいてそう囁つけた。フェイトは鼻血を流したまま、もの凄い幸せそうな表情のまま固まっていた。気のせいか、手に持っているバルティックシユが冷や汗を流しているように見える。

…………フェイトが僕らの世界に戻ってくるのは、それから三十分近く過ぎた後だった。

ムツツリー二にいつもやつてあげている輸血をフェイトに済ませ、ようやく僕と雄二とフェイトと霧島さんの戦いが始まったのだった。

「どうかフェイト、一体何を想像したの？」

第五話（後書き）

次回、明久＆雄二VSフェイト＆霧島の熱いバトルが始まる！！
一人は楽しみにしてきた事を叶えるために、一人は彼女の想いに応
えるために、一人は長年抱いてきた願いを叶えるために、一人は人
生の危機を感じながらそれを回避するために……様々な思いが、今
……炸裂する！

…………模擬戦、開始』

『つて、なんで君がいるの――――――!?』

『…………それは次回のお楽しみ』

第六話（前書き）

意外な奴が登場。 明久&雄一→Sファイト&霧島戦です！

第六話

『レディー……』

はやての合図と共に模擬戦が開始した。

「翔子！」

「……了解」

フロイトの言葉を合図に一人がこちらに向かって走ってくる。フロイトと霧島さんは、今回初めてコンビを組んだはずだ。なら最初は僕達を分断して、一対一の状況にして攻めてくるはず。それならば！！

「（雄一、さあと二人は……）」

「（ああ、おそらく俺達を分断しようとするはずだ……）」

やはり雄一と僕の予想は同じみたいだ。

そうなると……おそらく次も僕と同じ考えに違いない。

「（なら俺達はあっさりあっさりかないものを使えば言いだけの話だ！）

彼女達に無くて僕たちにあるもの。

それはコンビネーション。

魔法を使っての戦いは初めての僕らだけど、じつとは幾度と無く本物の死線を潜り抜けてきた。僕らのコンビネーション……見せ

てあげるよ。

「行くよ、フロイトー！」

「来い！翔子！…」

「……言われなくとも」

「勝負だよ、二人とも…」

僕らとフロイト達の距離がどんどん縮まつていぐ。僕らはそれを冷静に見ながら、タイミングを計る。

後三秒、一秒、一秒……今だ！

「雄一！」

「明久！」

来るべき時は来た！僕らは田で合図すると同時に。

「「「ここは任せた！…」」

告げると同時にバックステップ。

霧島さんの実力を測るために、雄一、この場は耐えてくれよ…って！

「雄一！お互いに相手に任せてしまつあるのさ…！」

「いや、ここは明らかにお前の出番だろ！俺はこの場では翔子とか戦った事がないんだぞ！…？」

「それを言つなら、僕だつてこの場ではフェイトとしか戦つたことが無いよ……」

「このバカが！今重要なことは、相手の実力を測る事だろ……」

「解つてる！だからそのトンファーを使って僕の盾になつてよ！ その間に僕が霧島さんの実力を測るから！」

「いいや、お前が体張つて盾になれ！俺はその間に態勢を立て直しじっくりとテスタロッサの実力を測る……！」

「誰が相方を平然と捨て駒にするお前なんかの盾になるものか……！」

「その台詞そつくりお前に返してやる……！」

「言つたな！？上等だ！表出ろ……！」

「はつ、バカが！返り討ちにしてやる……！」

僕は雄一に一気に接近して鞘から刃を抜刀、雄一に剣閃を放つが、雄一はトンファーを使ってそれを防ぐ。その後に雄一はパンチの応用でトンファーを放ち、僕は体を捻つてその一撃を避ける。

「やるな、明久……だがこいつならどうだ！イージス・カートリッジロード……！」

『…… explosion』

ため息混じりのような機械音声がデバイスから響くと、トンファ

ーの一部がスライドし、そこからガシャンという撃鉄音と一緒に薬莢が蒸気と一緒に放出される。

魔力を跳ね上がらせるカートリッジシステム……やっぱり雄一も持っていたのか。僕はとっさに危険を察知して雄一から離れる……瞬間、雄一がニヤリと笑つた！？

「短慮だぜ、明久！」

『arrow form』

嫌な笑みを浮かべたまま、雄一は両手に持ったトンファーのグリップをレバーみたいに前へと動かし、そのままグリップの先端同士をくっ付ける。

それによつて現れたものは、機械で出来た…』。

雄一の前にミッド式の魔法陣が展開される。同時に僕は自分のミスに気付いて舌打ちした。とつさだつたとは言え、雄一が遠距離系統の魔法を使うとは考えも……いや、そもそも戦闘に余計な先入観と固定観念を用いた事自体間違いだった。

見た目とは裏腹に雄一はかなりの知将だ。

試召戦争で味方を状況に応じて正確に動かす将の役割を持っているあいつのことだ……遠距離攻撃を使つてくることだつてあり得るのに、そのことを一切考慮しなかつた。

完全に僕のミスだ。

「つくれー！」

悪態を吐きながら僕は態勢を立て直そうとするが、その前に雄一は青い魔力で出来た矢を手に持ち、同じように魔力で出来た弓弦に指をかけ、矢を僕に向かつて放つていた。

「くたばれ明久ああああああああああああああ！」

S
W
a
l
l
o
W

b
l
o
W

「雄」

ズドン！という発射音と共に、青い閃光が僕に向かってくる。僕は障壁を開こうとしたけど、その瞬間。

「つ！三つに分かれた！？？」

雄二の矢は、飛来して いる途中で三つの矢に分割され、それぞれがまったく違う角度で僕に向かって飛んでくる。

「ウル」

僕はギリギリで一つ目の矢を避けるけど、残り二つが僕に向かって飛んでくる…しかも、さっき避けた矢も方向を変えて僕の方に向かってきているとフォルトが伝えてくれる…この矢、追尾機能まであるのか…仕方ない。慣れてないけど、ここはモードを切り替える必要がある……。

思考がそこまで達すると僕の行動は早かつた。剣を鞘から引き抜き、叫ぶ。

「フルト！モード・ツインファング！」

¶ yes sir

刀と鞘に亀裂があり、分解され、パズルのように組み合わされ、『刀』と『鞘』が両刃のナイフに形態を変える。そのナイフの中央

が分断し、そこから銃口が顔を出す。

同時に『俺』は周囲に魔力の弾丸を形成し、双銃に向かつてくる矢に向かつて構える。

「クリムゾン・スターーー！」

ドドドドドッ！ 紅い弾丸が一斉掃射される。

同時にトリガーを何度も絞る。

反動と共に、銃口から魔力で出来た弾丸が放たれ、俺に向かつて迫つてくる青い矢に放つ。

ドン！ という爆発音の後、三つの青い矢と複数の紅い弾丸が相殺される。

ふう、と一息吐くと俺は地面に降り立ち、雄一を見てニヤリと笑う。

「よう、じつちの俺は初めてだよな、雄一？」

俺の言葉に、雄一が目を大きく見開いて俺を凝視していた。さすがの雄一も、今の俺の姿を見れば驚くのは当然、か。

「お前… 明久、なのか？」

訝しげに俺を見る雄一。

まあ、大抵の奴は初めて俺を見るとそういう顔になるがな…。

「ああ… そうだ」

ニヤリと笑みを浮かべ、俺は告げる。

「俺は吉井明久のもう一つの人格だ」

「なんだとー?」

俺の言葉に、雄一が驚愕する。まあ、当然の反応だひつ。

「……嘘つて訳じやなわせうだな……わざと普段ぜんぜん雰囲気が違う……」

「だらうな……まあ、いつちの俺になるのにはちょっとした条件があるんだよ」

「条件だと?」

「俺の人格が変わるのは『鞘から剣が抜かれた時』なんだよ。居合いをベースに使つてんのは、戦闘中に性格が変わつて味方が動搖するのを防ぐためだ」

まあ、居合いをベースにしているのはそれだけじゃないがな。と付け加えた後、俺は『デバイスを構え、不適に笑つた時だつた。スーパー カーからはやて達の声が漏れてきたのが耳に入った。

『驚きですう、明久さんの雰囲気がガラつと変わりましたですう』

『リインは初めて見るんやつたな。あれはアキ君のもう一つの人格、通称『抜刀』モードや!』

『…………そのまんま過ぎる気がする』

『細かい事気にしてたら負けやで、康太君』

とスピーカーからもの凄く聞き覚えのある声が……つて！

「「なんでここにムツツリーーがいるんだよーー」」

俺と雄一は全力でスピーカーに向かつてつむ。本当になんでお前がここにいるんだよーー？

『…………俺も、一応魔導師』

「マジでーー???

ぜんぜん聞いてないぞーー??"といふか、なんで俺の身近には魔導師が三人もいるんだよ！

『…………情報を集めるのに必死だつたから、挨拶にいけなかつた

「情報？何か手に入れたのか、ムツツリーー??"

ムツツリーーの言葉に、俺は僅かばかりに期待のこもつた声でムツツリーーに尋ねる。ムツツリーーの情報収集能力は並大抵のものではない。普段はエロ方面にしか使われてないけど、その能力は様々な面で役に立つはずだ。

『…………今のところは、何も』

「…………そ、そつか……雄一、お前…ムツツリーーが魔導師だったって

「……」

「一応は知っていた……というか、今回の件にはムツツリーーは関わらないと聞いていたんだが……」

確かにそうだ。

俺の家に集まつたとき、一人ほど加勢に来る、と聞いたのを俺は覚えてる。それなのにそこへさらに増援？ 一体どうしたことだ？

『…………俺が志願した。おそらく、俺の力が必要になるだろ？』

『う』

「……ムツツリーー」

今の言葉には正直、かなり感動した。
ありがとう、ムツツリーー……これからようしへ頼むぜ。

「さてと、話がまとまつたところで……始めよっか、雄一」

「……そうだな……なんか今のお前とななら結構ウマが合つそうだな

そういう言ひ方でヤリと笑いながら俺と同じようにデバイスを構える
悪友。

「そいつは同感だな」

たしかにこっちの俺なら雄一とは気が合つそうだな。

自然と頬が緩む。

俺達は互いに睨み合いながら笑っていた。

「言つとくが雄一、こつちの俺は容赦つてものを知らねえぜ」

「そりや面白え。俺も容赦つてものを知らねえからな」

拳銃モードから切り替え、剣の状態に切り替えると、柄の先端を接合させる。出来上がったのは長い柄の両端に刀身を持つ剣：ダブルセイバー。

本当なら刀の方が使いやすいんだが……またあの矢を放たれるかも
されねえから、こっちで対応するしかない。

「行くぜ、雄一！」

「ああ、上等だー！」

俺達は同時に大地を蹴り、一気に肉薄すると互いの獲物を打ち合
わせ始める。

槍を使う要領で刃を突き出す。刃はトンファーで受け流されるが、すかさず柄を回転させ、もう一つの刃を前方に押し出す。だが雄一は俺が次々と繰り出す剣戟をトンファーで防ぎ、弾き、受け流し、そして反撃を仕掛けてくる。ちつ、やつぱ強えな。

「 」 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』 『 』

なんてやつてこる時だった。

「...バルディッシュ」

plasma lancer

「……ゲイヴォルク」

『stab frieze』

「ファイヤー！」

「……ファイヤー！」

「「あ、」「

ドドドドドドドドドドッ！俺達がバカをやつている間に、
フェイトから槍状の閃光が、霧島から氷の槍が投擲された。
その瞬間、俺のフォルトと雄二のイージスが光りだす。

『protection』

慣れ親しんだ機械音声と共に、俺達の目の前に紅い障壁と、青い
障壁が目の前に展開される。金色の閃光と、氷の槍が障壁に激突し、
数秒の均衡の後、彼女達の魔法が弾き飛ばされる。

「フォルト！？」

「イージス！？」

『二人とも、喧嘩は後に下さい』

『そうですよ、今は戦いに集中してください……でなきや坊ちゃん
の人生は……』

「よしやるぞ、明久！防衛は俺に任せろーー！」

「へっ？あ、ああ……」

イージスの言葉を聞いた瞬間、雄一は冷や汗を流してトンファーを構える。…………そう言えば賭けをしてたの、すっかり忘れてたな。……まあ、その前に色々あつたから仕方ないとは思うけど。二人の魔法を防ぎきったバリアーは消滅し、俺達は前へ駆け出す。

「（雄一）フュイトはスピードと攻撃に特化している戦いをするぜ（」

「（翔子も似たようなものだが、あいつの攻撃方法は厄介だ。テスタロッサの攻撃を防ぎつつ、翔子を先に潰すぞ）」

霧島の攻撃が厄介？

それは一体どういうことだ、と雄一に尋ねようとしたが、その前に霧島が先にアクションを起こした。

「……ゲイヴォルク、カートリッジロード」

『explosio』

西洋ランスの柄から薬莢が発射される。その行動に、次の霧島の攻撃に備えて俺は身構える。

「……吹きすさぶ雪」

凛、と霧島が俺達の故郷である地球の、それも日本の歌謡を口に

する……西洋ランスを手に持つて日本の歌謡を歌うのはなんというかアンバランスだよな……と苦笑してしまったが、近くにいた雄一が慌てた口調で俺に向かつて怒鳴り散らしてきた。

「バカ野郎！早くその歌を止めろ……！」

「は？」

いきなり何を　と思って俺はハツとした。
今は模擬戦の真っ最中。

この状況で戦闘に無駄な行動をする人間などいない。……さつきまでお前らやつてたじやないか、という言葉は無しな。頼むから。慌てて俺は銃口を霧島に向けるが、気付いたときには遅かった。
霧島はゆっくりと槍の先端を

「……安樂に導くは刹那の軌跡か」

『blizzard parade』

「ツツツツ……空気が爆ぜる音と共に、霧島が……こちらに向かつて突撃してきた。しかも、霧島が手に持つ槍の表面に氷が纏わりつき、ただでさえ大きな槍がさらに巨大になっていた。その状態で霧島は俺たちに向かつて突進してきた。

「なんだそりや……？」

思わずツツツツを入れてしまつたが、目の前に迫つてくる巨大な氷柱から逃げようと俺はとっさに空中へと逃げる。霧島の突進攻撃はそのまま俺の真下を通過していくが、あれだけ巨大な氷柱が間近に迫つていいく様は、俺に恐怖を覚えさせるのには充分だった。

なんだあの滅茶苦茶な魔法は！？などと口中で叫ぶが、危機が去つた事に内心少しだけ安堵していた……が。

「後ろだ！早く避ける！――」

「は？……のわっ！――」

『protection』

雄一に叱咤され、俺はとつさに障壁を目の前に展開せざる。

瞬間、障壁に巨大な氷の槍が突っ込んできた。

「ぐつ……」

ひやりとした感覚が体に満ちる。後数秒遅かつたら確実にやられていた。

内心、恐怖を感じつつ、なんとかそれに耐える俺だったが、目の前の紅い障壁と拮抗している巨大な氷の槍の持ち主である霧島は無表情のままだった。……むしろそっちの方に俺は恐怖を感じた。

しかし同時に違和感も覚えた。

先ほど、俺は確かに今の一撃を回避したはず。ならば、どこかで激突音が聞こえてもおかしくは無いはずだ。それなのに、霧島はそんな音を立てた様子も無く、俺に向かつて攻撃を仕掛けていた。一体どういうことだ？まさか方向変換でもしたっていうのか？

だがそんな暢気なことなど考えていられる状況ではなかった。俺の障壁に少しづつだが亀裂が入り始めた。このままでは後数秒も経たないうちに碎け散るだろう。

「くつ！ フォルト！――」

『 sonic move』

障壁を消し、高速移動魔法を使って槍からなんとか逃れる。

だがやはり少し無謀だったようだ。いくら高速で移動する魔法とはいっても、至近距離から高速で突っ込んで来る物体から逃れるのは少し無理があったようだ。槍がかすった左腕を押さえて顔をしかめる。掠つただけでこの威力か…いくら非殺傷設定があるといつても、まともにくらえれば内臓がいかれる可能性があるぞ。

霧島がフェイトの隣で停止し、その場に留まる。おそらくは今魔法を説明しているところだろう…調度いい、この間に雄一とともに少し作戦を練つておくか。

「明久」

俺の安否を気にしてか、雄一が空中に飛んできて俺から一メートル程離れた位置で停止する。

「大丈夫だ…っていうか、霧島のあれは何だ？」

「あれは翔子の得意魔法、ブリザード・パレードだ…あいつは氷の魔力変換を持つててな、そいつを使つた魔法だ」

ブリザード・パレード…吹雪の行進、か。

猛スピードで突っ込んでくる長大な氷の槍の一撃…くらつたら確実にアウトだな。

さらに雄一は続ける。

「更に相手に攻撃を避けられた時、あいつは空中に氷の道を生み出して、その上を滑つて方向変換もしてくるようにしている」

成る程な。俺がさつきの一撃を受けそうになつた理由はそこか。
しかし空氣中に氷を生成してその上を滑つて体を反転させるなん
て無茶な上に肉体的負担もでかいはずだ…それをやってのける霧島
は化け物か？

「対抗策は無いのか？」

俺は今日が霧島との初戦闘だから、あいつの魔法に関して知識は
ほとんど無い。そうなると唯一知識がある雄一に頼るしかない。

「三秒でもいい、あいつの突進が止まる隙を生み出せないか？」

「出せる」

「う、平然と雄一は言つてきた。

一ヤリと笑みを浮かべながら雄一は堂々と宣言した。

「俺なら、あいつの動きを止めることができるものぜ」

「… どうか、なら俺は必ず霧島を仕留めるー！」

そして俺達はその作戦を念話で簡潔に決める。異端審問会の連中
から逃げ延びるには、土壇場でこのくらいのスピードで作戦をまと
めるくらいしないと生き残ることはできないからな。
時間にしてわずか三十秒。

それだけで俺達の作戦は決まった。

「頼むぜ、相棒」

「おう！」

告げると同時に俺達は動き出した。

雄一が戦闘を走り、俺がその後に続く

先ほどの喧嘩で、雄一との戦闘能力は大体把握できた……結果、俺は雄一よりも素早く動けることが解つた……とはいえ、一撃の強さなら向こうの方が上だけど……。

「來たぞ、明久！」

雄二の言葉どおり、俺達の前方から金色の魔力弾が俺達に向かって飛んできていた。俺は今までダブルセイバーだつたデバイスを元の状態…つまり、刀と鞘の状態に戻す。

「モード・ダークリパルサー！」

dark repulser

機械音声と共に、デバイスが双刃剣から刀と鞘に変形する。確認すると、俺は刀身を鞘に收める。

刀に魔力を込め、僕は魔力弾に向かって抜刀する。剣が魔力弾に触れた瞬間。

パン！といつ甲高い音を立てて魔力弾が霧散する。

続けざまに僕は次々と放たれてくる魔力弾を打ち消していく。

これが僕の真骨頂。AMとは違う、純粋に魔力そのものを打ち消すことが出来る僕のレアスキル『破邪』の力。この力を扱うのは、刀が必ず必要になる。その理由は、刀には魔を祓う力があると伝えられているのに関係しているらしい… 詳しくは解らないけど。

刀に魔力を送ると、刀身は破邪の力を手に入れ、魔力で作られた
様々なものを切断する… といつても、実際に断ち切るには僕の腕次
第なんだけどね。まだまだ剣士として未熟だから、強い魔法　ス
ターライトブレイカーとか　は拮抗するのが限界だし、霧島さん
のようないベルカ式の魔法は純粹な実力勝負になってしまふから、こ
ちらが打ち負かされてしまうことだつてある。

最後の一つを切断し、僕らは一気にフェイト達に向かって接近するが、その前に……。

ゴツッ！再び爆発音が響き渡り、霧島さんが僕らに向かって特攻してくる。

先ほどの攻撃はおそらく時間稼ぎ。霧島さんのあの魔法は発動までそれなりに時間がかかるから、それを埋めるためにフェイトが放つたものなのだろう。……なんて考えているうちに、霧島さんが僕らとの距離を詰めてくる。

この一撃も僕の『破邪』で防げればいいんだろうけど…そんなことをすれば確実に僕の腕が悲惨な末路を迎える事になるだろう。

…それに、この魔法に対抗するのは僕じゃない。

「雄
—
！
！」

「イージス！！カートリッジロード！！！」

Explanation

雄一のトンファーから薬莢が飛び出し、雄一の魔力が一時的に跳ね上ると同時に、雄一は前に躍り出てトンファーを構える。

「アイギス・ウォール！！！」

雄二が叫んだ瞬間、雄二の前に壁のように巨大な魔力で形成された盾が現れる。見た目だけでも、充分堅そうなイメージがあるその盾は、霧島さんの槍の一撃を真正面から受け止める。

ゴガガガガガガガツツツツ！－！－！－！－！凄まじい激突音が響き渡る。――人の魔力が拮抗しているのだろう。青と紺色の一いつの魔力が辺りを照らす。

雄一と霧島さんは、いつもこの魔法で勝敗を決めているらしい……防ぎきれば雄一の勝ち。貫けば、霧島さんの勝ち。どちらが勝つかは一人の運と実力次第の大勝負……正直に言つて、悪友として見届けてやりたいけど……。

「行け！ 明久あーーー！」

! !

雄二に背中を押され、僕はフェイトに向かって一気に飛翔する。辺りが二人の膨大な魔力によつて目隠しされているせいか、フェイトは僕の接近に一瞬だけ反応が遅れる。

「フォルト！！」

『Explorion』

僕はカートリッジをロードすると、フェイトの前・十数メートル
ぐらい離れた位置で停止した。

フェイトは僕の行動に、首を傾げる。

「…どういっつもり、明久？」

警戒を含んだフェイトの言葉。

まあ、今のは確かに上手くいけばフェイトを確実に倒せたかもし
れないチャンスだ。それをわざわざ棒に振って、僕は一つの提案を
出す。

「フェイト、僕と決闘スタイルで勝負してほしい」

「…決闘スタイル？」

「うん」

頷くと僕は先ほど飛ばした後に、キャッチしておいた薬莢をフェ
イトに見せる。

「これを弾いて地面に落ちた瞬間スタート。お互いの最強魔法を放
つてどちらかの魔法が相手の魔法を打ち破つたら勝ち、っていう一
発勝負」

僕の言葉にフェイトは一瞬だけ、ポカンと間の抜けた顔をする。

その後に若干呆れが入ったような口調でフロイトは口を開いた。

「明久… 本当にどうこうつもつ？」

そう言つて今度はジト目で僕を見るフロイト。
さすがに本当の意味を言つわけにはいかない。……なんというか、
もの凄くこいつ恥ずかしいから。

「ただの気まぐれだよ」

「嘘でしょ」

『嘘やな』

『嘘でやー』

フロイトだけでなく、僕らの様子を見ているはやてやリインにまであつさりと看破される。さすが昔馴染み。八年経つても僕の事をよく解つてるみたいだ……なんかこれ以上言い訳を続けても無駄っぽいし、ここは正直に白状した方がいいかもしない。念話ではやてに聞こえなこよつにして、フロイトに語りかける。

「（実は…その……）」

「（？）」

「（なんか顔が熱くなつてきたぞ…でも言わないとなあ……。）

「（その…フロイトに向かつて剣を振りたくないっていうか…その、斬りたくないっていうか…）」

「え？」

「そ、その……模擬戦だってのは解ってるんだけど、それでも……その……僕は……フェイトを傷つけたくない。だから、今回だけでいいから、お願ひ

「明久……」

頬を染めたフェイトが嬉しそうに……本当に心の底から嬉しそうな笑顔を浮かべる。なんていうか、さつきまでちゃんと模擬戦をやるぞ！と思つてたんだけど、いざフェイトに向かつて剣を振ろうとしても、どうしても躊躇つてしまつんだよなあ……。

いつかは慣れないといけないんだろうけど（それも嫌だけど）、せめて今回だけはこの決闘スタイルで勝負を決めたかった。

『…………やれやれ、アキ君らしい理由やなあ』

「うわっ！？はやー！？？」

突然スピーカーから漏れてきたはやーの言葉に、僕は心底驚いた。なんで知つてるの！？

「明久、途中から念話で言ひのきられてるんだよ

「げっ！？」

えっ！？何それ！？？それじゃあ僕はあの恥ずかしい言詞をよりこもよつてあのイタズラ好きなはやーの前で堂々と言ひやつた訳！？！？わあ、最悪だ！！絶対にいじられまくる……

「バルティツシユ」

詰うと同時にフロイトもカートリッジを一発、ガシャンとロードする……ということは。

「…ありがとうございます、フロイト」

「ううん。正直、明久の言葉はとても嬉しかったよ」

一
そ
づ
か

「でも次からはちゃんと戦ってね」

「ははは…善処するよ」

アエリヤーの言葉に苦笑し、僕は薬莢を投げ飛ばす。

右を前にした半身の構えで僕は

右を前にした半身の構えで僕はフエイトを見据える。きっと彼女も全力で来るに違いない。僕は深呼吸をすると、一気に田を見開いて

「うべえーー！」

瞬間、僕の体は突然横から接近してきた霧島さんの突進によつて思いつきり宙を舞つた。

フロイト達の絶叫が、模擬戦会場に響き渡る。き、霧島さん？な
んで……あつ。

意識を失いそうになつてゐる時だつた。地面にのひてゐる雄一の姿が僕の視界に入つてきた……ということは、今回は雄一が負けたのか。

いや……一対一の戦いだから……反則とは……言わないけど

とつても釈然としない気持ちのまま僕は地面に倒れた。

明久&雄一 VS フェイト&霧島

勝者・フェイト&霧島ペア

『トマトマイスター』

「ムツツリーーー… それは雄一に言つてるんだよね？ 僕に言つてるんじゃないよね？ 悪友の言葉に疑問を感じながら、僕は気を失った。

第六話（後書き）

レアスキル『破邪』

生まれながらに明久のが持つ能力。刀があれば、そこに魔力を送り込めば、全ての魔法を打ち消すことが出来る。しかし、魔法を断ち切れるかどうかは、明久の剣の実力次第になる。

もしかしたら次回から霧島雄一になつてゐるかもしだせんね。

「羅刹」

第七話（前編）（前書き）

田羅口編、前編です。

第七話（前編）

バカテスト・英語

以下の英文を和訳してください。

I'm fond of crime novels!

フェイト・T・ハラオウンの答え

『私はミステリー小説の大ファンです』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『私は推理小説の大ファンです！ ちなみに僕はホームズが好きです。特にボヘミアの醜聞や恐怖の谷や踊る人形……』

教師のコメント

正解ですが、裏面までびっしりとコナン・ドイルの作品のタイトルを書かなくても良かつたと思います。吉井君は最近少しずつ成績が伸びてきているので、大変いい傾向だと思います。ちなみに私は最初の作品、緋色の研究が好きです。

『』

教師のコメント

鼻血で回答がまったく見えませんが、君が何を想像したのかは容易に想像できます。

初夏が近づいてきた今日この頃。

今日は日曜日。全国の学生は基本的に休みの日の朝、日差しを浴びながら『俺』こと吉井明久は少しばかり緊張していた。

ん？僕の方じやないのか、って？

その理由を説明するには、昨日の事に振り返らなければならない。

（回想）

「デート？」

『うん、翔子と話し合って、それにしようって決めたんだ』

携帯電話から聞こえるフロイトの声に、僕は首を傾げる。

霧島さんに思いつきりぶつ飛ばされた後、一分ぐらい気を失つていた僕だつたけど、目を覚ました後に、シグナムとの模擬戦が待つてて、肉体的にも精神的にもボロボロの状態のまま、僕らは家に帰宅した。

しかしながらフロイトは僕の家に帰らず、『今日ははやての家に

泊まる』といつて、僕は首を傾げながら、それがなんなのか解らな
いまま、アルフと一人で夕飯を済まし、いざ寝ようとした時にフェ
イトから電話がかかってきた。

内容は例の模擬戦の罰ゲーム。

どちらかが勝つたら、負けた方に好きな事を一つだけ命令できる
という条件を賭け、僕らは戦つただけど、結果は奮闘空しく僕ら
の敗北。

そのことを知った雄一は『嫌だ…婿入りは嫌だ……嫌だあああ…』
と半ば発狂しけ、そのまま窓からダイブしそうだったので、慌て
て懐に護身用として忍ばせているスタンガンで雄一の意識を絶つこ
とでなんとか事なきを得た。

「それって…明日？」

『そりだよ、集合場所は…えつと、ラ・ペディス…だつけ?そこの
前で待ち合わせだよ』

「それはいいけど……だつたら同じ家から出た方が良かつたんじや
ないの?僕ら一緒に住んでるんだからさ」

同棲…もとい、ホームステイしている訳なんだから、わざわざ違う
場所から向かう必要なんてあるのかなあ?と思つてたら、電話の
向こう側から可愛らしい笑い声が聞こえてくる。

『ふふつ、解つてないなあ、明久は』

「えつ?」

どうじつ?と?

『デートでね、待ち合わせは大事なものなんだよ』

待ち合わせが大事なもの…そういうものなのかなあ？

でもフェイトが大事だというのだから、きっとそうなんだろ？…あつ、だから今日はわざわざはやての家に泊まりに行ってるのか。

デート…か。

姫路さんや美波と三人で出かけた時はある。けど、あれをデートといえるのかどうかは解らないんだよなあ…途中から清水さんが乱入して滅茶苦茶になつて、なぜか僕は女装する羽目になつたし、鉄人にはなんか変な誤解をされそうになつちやつたし…。

…やめよう。これ以上考えているとあの時の苦労が蘇つてくる…。

『それじゃね、明日だよ』

「あつ、うん」

通話が切れ、電子音がスピーカーから鳴り響く。携帯を充電器にセットしてからベッドの上に横になり、今日のことを少し振り返つてみる。

なのは達の報告によると、今日ヒネミーは出なかつたみたいだ。

それはいいことなんだけど、夜中に出てくる可能性が無いとはいえないから、僕の睡眠は基本的に浅いものだった。いつあいつらが出てくるか解らないから、正直結構キツイ日々だったなあ…けれど最近は少しだけどゆつくりとした睡眠をとれる日がある。

それはなのは達が来たおかげもあるから、交代制になつてからというもの、肉体的にも精神的にもかなり楽になつたから、正直に言えばかなり感謝している。

「あれ？」

ふと僕はやつひのフロイトとの会話を思い出した。

フロイト、待ち合わせの時間……伝えてないよな……。

僕の疑問に答えるように携帯が鳴り響いてきた。電話の着信音が若干ながら慌てたような音だったのは、多分気のせいじゃないと思う。

フロイトサイド

「じゃ、じゃあ、待ち合わせの時間は十時半だよ

息を切らせながら、私は明久に待ち合わせの時刻を伝える。あ、危なかった。危うく待ち合わせの時間を伝えずに眠るところだった……。

『了解。次からは忘れないよ』

「あう……」

明久の言葉に私は思わず言葉を詰まらせてしまった。
うう、私ってばいくら明久との初デートだからといって少し浮かれすぎてたかも……。

『それじゃあね、フロイト。明日は楽しみにしてるよ

「うんー！」

通話を切り、はやでが用意してくれた布団の上に横になる。
頬が、熱い。

きつと今の私の顔はもの凄い笑顔で、きつと顔色は真つ赤なんだと思う。

……無理もないよね、だつて私にとつて明日は初デート。なのは達と一緒に明久と出かけたことは何度も会つたけど、一人つきりで出かけるなんてことは今まで一度もなかつた。

……少し緊張してるけど、それ以上に私は明日どんな風に明久と一緒に過ごしあうか、とても楽しみだつた。

本当は現状を考えると、そんな暢気な事を考えている場合じやないのだと思うけど、そんな中で、いつした平穏で幸せを感じることに、私は愛おしさを感じていた。

胸の中に暖かなものを感じながら私は眠りに付いた。
だからこそ、私はこの時気付かなかつた。ドアの向こうで私を覗く瞳に……。

明久サイド

「……早く起きすぎた」

現在の時刻は四時半ジャスト。

まだまだかなり余裕がある時間帯だけど、もしかしたら寝過ぎす可能性があるかもしね、などと考えてしまつととても一度寝なんてできなかつた。

ベッドから下り、僕はパジャマを脱ぎ捨てると、ジヤージに着替える。

じついう時は体を軽く動かして時間を潰すのが一番。そう思った僕は長年愛用している鞄に納まつた木刀を持つと、部屋を出ようとするアノブに手を伸ばす。……その時、ふと部屋の隅に置かれていた長年愛用してきた『あるもの』に気がつく。

そういうえば、エネミーが出てからあまりあれを使ったことはないような気がする……久しぶりに使ってみようかな?と思つたけど、アルフが寝ているので、あまり大きな音を立てる訳にはいかないし……アンプとヘッドフォンを使えば……いや、それでも狼の使い魔であるアルフのことだからきっと耳に入つてくれるだろう……しうがない、これ エレキを弾くのはまたの機会にするとしよう。

僕は後ろ髪を引かれるような思いで部屋を後にした。

朝早く公園にたどり着く。

そこでは既に早起きのおじいちゃん、おばあちゃんが集まつて太極拳のよつなものをやつていた……健康のためにやつているんだろうけど、太極拳って実は残酷な必殺技のオンパレードなんだよね……例えば首をねじ切る技とか……っと、朝からこんな物騒な話題はやめておこう。

おじいちゃん達に短い挨拶を交わした後、邪魔にならない場所に移動すると、僕は木刀を手にし、一息で鞘から抜刀し、大気を切断する音を響かせる。

それを何度も繰り返すと、僕は昨日の模擬戦のことを思い出す。昨日初めて知つた雄一と霧島さん、そしてムツツリー二の戦い方。雄一は近距離、遠距離、どの方面から攻められても対応できるような戦い方をし、さらに鉄壁の防御を誇る技を駆使してくる。近距離に踏み込めばトンファーを自分の腕のよつに自在に操つてこちらの攻撃を捌き、遠くから砲撃魔法を放てば頑強な防御魔法を使つて防ぐ。こちらの攻撃を防ぎきつた後は、強烈なトンファーでの一撃、あるいは「」に変形させての遠距離攻撃を仕掛けてくるという、オールラウンドな戦い方をしてくる。

霧島さんの戦い方は、最初ヒット＆アウェイの戦い方をするものだと思ったけど、そうじやなかつた。

巨大な槍を使っての突進による圧倒的な特攻。槍を使っての遠距離からの投擲。これらだけでも充分脅威だというのに、霧島さんは巨大な槍を使って、まるでマシンガンのような連続突きを放つてくれる…と、後で映像データを見て知った。

一見すると防御をまったく考えていないように見えるけど、氷の魔力変換を使って、防御壁や空中での高速移動の補助などをして弱点を補っている。

多分だけど、二人とも様々な場面を想定し、自分の力をどんな場面でも生かせるように工夫しているんだと思う……さすがクラス代表。ん？それは関係ないって？知らん。

最後にムツツリーー。

ムツツリーーのデバイスはライフルで、それを使っての精密射撃がムツツリーーの得意分野……らしい。詳しくは解らないけど、多分かなりの腕前なのだろう。

いずれにせよ、三人ともかなりの実力者。

僕も遅れを取るわけには行かないの、今日は普段やらない攻撃方法…居合いをベースにした戦いではなく抜刀した状態での攻撃を練習してみようと思った。

「ふつ！」

鞘から抜き放ち、『俺』は刀身を水平にするように構える。

普段、あまりこちらの俺にならないようにしている理由は一つ。突然性格が変わったことによって、戦闘中に味方の動搖を防ぐ事にある。

戦闘とは、常に集中力との勝負になる。わずかに集中力が乱れる事によつて、それが敗北につながる事だって充分ありえるからだ。だからこそ、俺は出来る限り剣を鞘に納めた状態で戦う事を自分に課してきた。

だが恐らくこのままではダメなのだろう。

戦闘とは常に変化するもの。様々な場面で的確に動けてこそ、戦闘を優位に運ぶ事が出来る。

呼吸を整え、目を閉じる。

視界を閉じる事により、自己への意識を向けやすくしていく。

キイイイイイイイイ

。

思考が、加速する。

周りから、雑音が遠のいていく。

最初は人の声が。

次は朝の街中の喧騒が。

次は鳥の声、草木の音、風の音、次々と俺の周りの音が聞こえなくなつていき、最後に残つたのは、トクントクンと一定感覚のリズムを刻む俺の心音と呼吸によるブレス音だけになる。

これで完全に俺の意識は外界とは遮断された。

イメージする。

相手は昨日戦つた雄二。

トンファーによる堅強な防御、そして隙を見つけ出した瞬間に放つてくる攻撃。距離を取ると放たれる正確無比な弓矢による一撃。目を、開ける。

視界に入つてくるのは、先ほどの公園だが、一つだけ違うところがある。

それは俺の目の前には、自分の想像で生み出した仮想の敵がいるというところだ。雄二の姿を型としたんだが、全身が黒子のように真っ黒で、その手にトンファーを装備し、肩の辺りに無数の矢が入っ

た筒を背負っていた。

イメージとしてはトンファーを扱う『兵』といったところか。……実際にそんな武器を使ってくる『兵』がいたら笑いものだな。

目の前にいる雄二の全身が黒いのは、おそらく俺がこれを雄二ではない、と否定しているからだろう。

俺と雄二が戦い始めてまだ日がそこまで経っていない。

お互いの戦闘スタイルがそこまでハッキリしている訳ではないから、正確なイメージとしてこの場には現れていないのだろう。だからこそ、相手が雄二の姿をしていても、全身が影のように黒い。だが今はこれだけで充分だ。

慣れてない剣を扱う身としては、このくらいが相手として調度いい。

剣を顔の横に水平にするように構え、右足を前へと軽く開く。

「つ！」

一息で一気に接近する。

上段から首元へ狙いを定めた横薙ぎの一撃。しかし相手はその一撃をトンファーで防ぐ。

ガキン！！仮想の撃鉄音が脳内に響く。

腕には防がれた手応えはないが、俺の感覚では、今の一撃は確実に雄二なら防いでいると理解しているせいか、防がれた瞬間には俺の腕は一瞬だが仮想のトンファーによつて動きを止められる。そして、俺の動きが一瞬だが止まつた瞬間に仮想の雄二は俺に向かってトンファーを突き出してくる。俺はとっさに体を後方へと反らしてギリギリ鼻先をかするような形で避ける。だが雄二は避けた俺にさらに追撃を仕掛けてくる。俺は半ば地面を転がるようにして猛攻の嵐から逃れるために一度距離を取る。

瞬間、仮想の雄一の武装はトンファーから「へと変わり、矢を弓に番えて仮想の雄一は次々と俺に矢を発射してくる。

その攻撃から逃れるために…俺はあえて雄一に向かつて踏み込んだ。

弓から矢が発射されるタイミングや位置を、相手の視線や、体の動きを見てから判断する…視線は俺の眉間に向けられていた…そして相手の矢を持つ指が微かに動いた瞬間、俺は右手を閃かめた。バシッ！という音と共に眉間に向かつて飛んできた矢が粉々に打ち砕かれる。

ナイフ、と脳内で自分に賞賛を贈ると同時に俺は次々と放たれていく矢を右手で次々と弾き飛ばしていき、仮想の雄一に一気に接近していく。

剣に魔力を込める　当然、これも想像だが　刀身に魔力が送られ、剣が紅く光りだすと同時に、地面を踏み碎かんばかりに一気に加速して仮想の雄一の胸の中央に直突きを繰り出す。

星流一閃。全力の加速を使って相手を貫く技だ。

その一撃は見事に仮想の雄一の胸板を貫くことが出来た。剣は根本まで貫通している。確実に俺の勝ち…と解った瞬間、仮想の雄一の体は霧のように霧散した。

周りの情報が、戻ってくる。

風の音が、周りの喧騒が、俺の脳へとダイレクトに送り込まれ、あまりの情報量の多さに俺は軽い眩暈を起こしてその場に座り込んだ。

「……なんとか、勝てたか」

汗が頬を伝い、ジャージの袖でそれを拭う。

今回はまだ俺のイメージが不完全だったからこそ、なんとか勝つ事が出来た。

もし俺のイメージがもう少し精密だったら…あるいは現実で戦つ

ていたりすれば…高確率で雄一が勝つていたに違いない。最初から居合いをベースにした剣術で戦つてしたりすれば、それなりにいい勝負をしただろ？。

やはり俺は居合いで戦い方に慣れすぎていた。

別にそれは悪い事ではないのだが、鞘に剣が納まつていらない感覚に違和感を覚えているせいか、どこか体の動きがぎこちないと感じる。しばらくの課題はこのぎこちなさをなくす事に専念することになるかもしれない。

そこまで思案した時、俺の頭に白くてふわふわとした柔らかい布が被せられた。手でそれを取つてみると、それは汗拭きタオルだった。

「……？」

訝しげにそれを見ていると、肩をポンポンと軽く叩かれる。振り返つてみると、そこにいたのは俺の悪友…一見すると美少女のようになしか見えない美少年（？）秀吉だ。

「おはよひじや、明久」

「おはよ…って、なんだこりんな朝つぱらに公園にこるんだ、秀吉？」

「毎日の日課で、ランニングをしておったのじゃ。やつちはひつたのかの？」

「今日は早く起きすぎてな、体を動かそつと剣を振つていただけだ」

「ん？なんか違和感が…。」

秀吉は俺の隣に座ると、俺の手の中にある木刀を見てから言つた。

「先ほどの相手は、お主の動きから察すると……トントンフターと遠距離系統の武器……となると、雄一かの？」

「ん？ ああ。と言つても完全にあいつのリズムを完璧に捕らえている訳じゃないから、レベルがあいつと比べて低くな……ん？」

またしても違和感……とこりか。

秀吉……お前、なんで雄一の戦闘スタイル知つてるんだ？…………ヒカルまで考えた時に俺の思考は一つの結論に達した。

「…………なるほど、お前も魔導師とこりか」

ため息を吐きながら俺は頬杖をつく。

秀吉は少しだけ驚いた顔をする。おひ、結構珍しいな……こいつが驚いたような顔になるのつて。

「なぜ解ったのじや？」

「雄一の戦闘スタイルを知つてるとこりからだ

「じゃが、それだけではわからんじやろ？ 他にも理由があるはずじや

「や

「まあ、たしかにあるけど……とつあえず、今一番の理由としては……。

「……最近、結構身近な人間が魔導師だったっていうのが多かつたからな

「…………なるほどのう」

口ではせう言つてゐるが、実は結構さつきからヒントはあった。

「ヒントじやと？」

「ああ」

俺は秀吉に俺が気付いたヒントを教えてやつた。
まず最初に秀吉が俺の剣の腕を見ても驚かなかつたところ。あれ
は多分最初から俺の使う魔法を知つていたからだろう。さらに性格
が一時的とはいえ、変化している知り合いに、普通に話しかけてき
たところから推測すると、おそらくマッツリー二辺りから聞いた事
なんだろうな。

雄一は俺が魔導師だということを知らなかつたみたいだし、そう
なると諜報活動に優れているマッツリー二が魔導師だったのなら、
そこから味方である秀吉に伝わるのにそれまで時間はいらないだろ
うからな。

「お前が魔導師つてことは、姉の方…木下優子も魔導師なんだろ？」

「そうじや…といつても、姉上の魔法はあまり戦闘には向いてあら
なんだ」

「現場は弟で、姉は会議室タイプつて感じか？」

半ば冗談のつもりで言つてみたのだが、秀吉は俺の言葉に苦笑す
る。

「お主の予想通りじやよ。現場での捜査はわしで、姉上は部署の方
とこつた役割となつておる」

……マジで当たるとま思わなかつた。

正直に言つと、新学期の試験戦争で秀吉が姉に連れて行かれてそのまま戻つてこなかつたところから、俺は木下姉もそれなりの実力者だと思つていたんだが……どうやら、弟が姉に苦労するのも同じの家でも同じことのようだ。

「……しかし出会いから数分でそこまで解るなど、凄い推理力じゃの」

「まあ、推理の事に關してはな」

……これが少しでも勉強の方に向けられるのなら嬉しいのこ……と俺は少々、自嘲も混じつたため息を吐いてしまつ。

「しかし本当に性格がガラリと変わつておるの?」

「まあ、これもマッソリーが雄一から聞いたことなのかな?」

「つむ、マッソリーが教えてくれたぞ!」

「なるほどね」

「……この情報の出所はやつぱりマッソリーか……まあ、ある程度予想はしていたけど。とりあえずいい機会だからついでに色々と聞いておこう。」

「秀吉、とりあえず質問いいか?」

「む? それは構わんが……どうしたのじゃ急に?」

「まあ、色々とね…といつあえず質問1だ」

「むひ？ 一つではなこののかの？」

「ああ、一つ目だけ…今現在、この街に来ている魔導師は俺達以外に知っている奴はいるか？」

「ふむ…といつあえずはわしが知っている中ではまだないがさすじや」

「その理由は？」

「わしとマジックリー|サリッシュ田舎での、家族は全員回りのまわ

「ふうん…となると、お前も『あれ』を調べるためにこるのか？」

「あれとは…Hネリーの」とか?「それとも…」

「Hネリーじゃなこほひだな」

「ふむ…なるほど…じやがなせわしらは…」

「あー…その件についてはまた後でこいつ

そう言つて俺は無理やり話題をかえる事にする。

管理局から別々の部署で送られてきた理由の訳なんて、どうせへだらない答えが返つてくるのは間違いないだろう。

「一つ目の質問だ。お前のデバイスを見せてくれないか?」

「よこぞ」

やういづと秀吉は手首に巻いている琥珀色の宝石があしらわれた
チーンプレスレットを見せる。それを確認すると、俺も首に下げ
ている紅い宝石が装飾されたデバイス、フォルトを見せる。

「これがわしの『デバイス、クラウソラス』じゃ」

……なんでケルト神話のヌアザが持つている武器の名前が付
けられてるんだよ。

「お前も剣を使うのか？」

「剣？いや、わしが扱うのはナックルじゃが？」

……なんで剣の名称が籠手についているんだよ。

思えば俺の周りのデバイスの名前にも、結構こっちの世界の神話
に出てくる名前が使われるんだよなあ……クロノの『デュランダル』と
か、シグナムの『レヴァンティン』とか、雄二の『イージス』とか……。

そういうや、霧島のデバイスもゲイヴォルクっていう名前だつたな
……多分あれはケルト神話のボルグ・マク・ブアイングが作り、後に
クー・フーリンの手に授けられた「心の臓を喰らうもの」という名
前を持つゲイ・ボルグからとつたんだろうな。

……まさかとは思うけど、槍での超投擲魔法……なんてのを身に付
けているんじや……などと一瞬、無表情のまま槍を投擲する霧島の姿
が目に浮かび、背筋に寒気を覚えてしまった。

『明久様、明久様』

「ん？どうしたんだ、フォルト？」

『急いだ方がいいですよ、現時刻、九時です』

「げつ……」

やべえ……ちょっとのはずだったのに、すっかり時間を忘れて訓練と秀吉との会話に夢中に時間を忘れていたみたいだ。

「悪い、秀吉一話の続きを学校でな……」

「う、うむ」

そのまま俺は一気に家へと駆け出し、腹を空かせているアルフに適当に朝ごはんを作り、シャワーを浴びた後、服を着替えて財布と携帯を持って外に出かけたのだった。

それから今現在に至る。

慌てていたせいか、鞄を公園に忘れていい、今も抜刀状態の性格のままだった。

ガラスに映る自分の姿を見て、少しながら自己嫌悪する。

黒生地のシャツにワインレッドのノースリーブフードパークーを羽織り、ダークブルーのゆつたりとしたジーンズというデートにしては少々ばかりラフすぎる格好をしていた。

もうちょっととマシな格好にすれば良かったのではないか、と今更ながら後悔の念に襲われ、俺はため息を吐いた。

「…………」

本当はデータをやつてる場合ではない。

俺達は死人が出ている事件にかかわっている……それも、一年といつ長い時間かけてこの事件を追っているのだ。

この街に潜んでいるエネミーという謎の怪物。そして……その背後に潜む人間。

黒い思惑が潜むこの街で、俺達は必ず見つけ出して捕まえなければならぬ……時空管理局執務官として。

「……やつこえば、結構苦労したつけな」

執務官試験にはなんとか一発で受かる事が出来たけど、それまでの勉強がとにかくしんどくて大変だった。おそらく、今までの人生の中であそこまで必死に勉強したのは初めてであろう……まあ、試験が受かったあの日以来、勉強なんてやってたまるか！…と思つてまたく勉強をしていなかつたせいか、通常の基本的学力が一気に低下していたりする。

そのことに自嘲気味な笑みを浮かべ、背中を壁に預けて空を見上げる。

本日は見事なまでの快晴。

色々と気がかりな事はあるが、たまには体と心を休ませる日だってあつてもいいのかもしれないと思いつつ、先ほど買った缶コーヒーを口に含みながら俺は本日のメインヒロインを待つ事にした。

第七話（前編）（後書き）

今回から秀吉も魔導師として参戦するので、戦闘パートまで楽しみに！

ちなみに、彼以外の魔導師は登場する予定は今のところないです。

第八話（中編）（前書き）

今回は、前半が少しだけシリアスです。

第八話（中編）

管理局アンケート

どのような訓練が必要なのか、みなさんの意見を取り入れてみよう
と思いますので、ご協力ください。

『あなたが戦闘に必要なものをお答えください』

吉井明久の答え

『信頼』

教官のコメント

『チームプレイで最も必要なものですね。仲間との連携はどのよう
な場面でも必要なものなので、この回答はとても参考になります』

土屋康太の答え

『セクシー：女性戦闘員のバリアジャケット強化』

教官のコメント

『最初に向を書いたとしたのですか？』

坂本雄一の答え

『いのちだい 霧島翔子』

教官のコメント

『途中で文字が途切れ、血が張り付いているのが気になります。』

桜色の花びらが徐々に姿を消していき、逆に新緑が木々に彩り始めてきた季節。

そろそろ半袖の季節かな?と暖かさが増してきた初夏の日差しを体に浴びつつ、俺は手にした携帯で時刻を確認する。

「……もうそろそろ、か」

現在の時刻は十時半になる数分前。待ち合わせの時間まで余裕はあるが、俺はせっかくの初デートだから、待たせるわけにはいかないと思って余裕を持って家を出た。

はい、嘘です。本当は時間をあまり確認せずに家を出てきてしまつたので、待ち合わせの五十分前にここに到着していたというだけです。若干ながら自己嫌悪。

ため息を吐き出しつつ、彼女がここに来るまで、退屈を紛らわせるために俺は懐のメモ帳を取り出して思い浮かんだメロディフレーズを書き込んでいく。

「君と作った…………口ずれる…………響かせる」

俺は数年前からギターを愛用している。

どうもロストロギアを取り込んだ影響のせいか、音楽で非凡な才能を發揮させてしまい、小遣いを貯めてエレキのテレキャスター、アンプ、ヘッドホン等を購入し、さらに自作の歌詞を作つてみたりしていた……といつても、完全に趣味だから別に全国でヒットを目指そうなどという事は考えていない。

それに、俺の目標は別にある。

音楽はあくまで趣味だから、誰かに聞かせてあげたり、聞いてもらつたりするだけで充分だ。最近では、フェイトやアルフ、たまに遊びに来るなのはや雄二とかにも聞いてもらっている。

音楽は楽しい。

そのことに気付かせてくれたのなら、これが俺の中に入っていることに感謝できる。

だが

「…………」

俺の中にある……このロストロギアの力は絶大だ。

下手に開放すれば俺自身が死に掛けない力すら有している。

このロストロギアの力を一度だけ使ってみた経験があるが、あれは異常だった。

一撃。

その一撃は音速を超えて放たれ、海面を引き裂き、海を……西断した。

あまりにも、異常な一撃。

そして。

俺は思わず左肩を握り締める。あの時の激痛が記憶に蘇り、それが仮想の痛みとして、襲い掛かってくる。

これは俺にとつては一種のトラウマだ……。
たつた一度。

たつた一度使つただけで自分の体がボロボロになる威力だつたなんて……

幸い命は取り留めことが出来たが、三ヶ月の間、自分で体を動かす事がまったく出来なかつた。

「…………」

左肩に触れてみる。そこに今でも残つてゐる傷がある。

「フォルト……いや、キャリバー……俺はまだあれを使いこなせないのか？」

『……今の明久様ではおそらく、不可能でしょう』

「だよなあ……」

予想していた答えもあるのだが、俺はまだまだ弱い自分に対する嫌悪と、まだ使えないのかという焦燥と、そして 使わなく ていいと思つて安堵して いる自分がいる。

暗鬱とした気分になり、ため息を吐く。

あの力はたしかに強力だ。

だが同時に凶悪である。

誰かが手綱を掴んでいなければいけない。

その誰かはもう決まつて いる。

だがそいつはまだ手綱を握つて操るどころか、握ることすら難し

い。

「…………でも、握らなきやいけないんだ」

握りたくない！

言葉とは裏腹に、俺の中では拒絶の叫び声が響いた。

「どうしたの？」

突然響いた言葉に、俺はびっくりと体を震わせた。虚空を見つめていた視点がゆっくりとクリアになってきて、焦点が戻ると、その先には不安げな表情を浮かべたフェイトがいた。

「あっ、お、おはよ。フェイト

「うん、おはよ……」

頬を指でかきながらフェイトと挨拶をかわす俺。出来る限り、不審に思われない行動を取つたつもりだったが、どうやら逆効果だつたらしく、フェイトは気遣わしげな表情を浮かべていた。

「どうしたの？」

「…………

再び同じ質問が彼女の口から響くが、俺は答えることが出来なかつた。

俺の中にあるロストロギアは強大な力を有している。その力は使つた張本人ですら死に掛けるほどの絶大な破壊力を持つているのだ。もしそれが彼女達に猛威を振るつとなつたのなら、俺は……。

ヤメ口！！

心が、叫ぶ。

だが俺の思考は止まらない。

連想、してしまう。

力を発動した自分。周囲に満ちる、膨大な魔力。次々と葬られてい
くエネミー達。その余波で全身から血を溢れ出させる、俺。
そして……俺の放った力によって引き起こされる最悪な……
ふいに頬に温かな手が触ってきた。

「え？」

「どうしたの？本当に、大丈夫！？」

フロイトが不安そうに俺に言葉を投げかける。
この顔に触れている温もりが、彼女の手だと気付いたときには、
思わずその手を握り締めていた。

ゆっくりと、顔を動かしてガラスに映る自分の姿を見る。
そこには……まるで恐ろしいものでも見てきたかのような、なんと
も情けない顔をしていて、さらに女の子の手に見つとも無く縋り付
いている惨めな自分が、そこにいた。

「何か、あつたの？」

「……」

言葉で答えず、俺は黙つて首を横に振る。

これはただ自分で勝手に巻き起こした結果だ。勝手に妄想し、勝
手に恐怖し、勝手に彼女達を空想の中で殺してしまっているだけの
話なんだから……。

だから、本来ならこんな風に彼女の手に縋る権利なんて俺には無
い。

無い、はずなのに。

彼女は優しく俺の右手を両手で包んでくれた。

虚脱した体を動かし、ゆっくりと彼女の顔を見る。

そこには、慈愛の微笑を浮かべた同い年の少女がそこにいた。

「 、 」

その表情を見ているとスウ、と俺の中で蠢いていた得体の知れないドロドロとした感情が薄れしていく感覺がした。

「『大丈夫、この手は僕がずっと握っているし、絶対に離すことなんてい』」

「……」

ふいに彼女の口から放たれた言葉に、俺は驚愕した。

その言葉はかつて俺が彼女に向かつて言つた言葉だった。

「八年前、私が母さんのところから帰つてきたとき……ボロボロだった私の体を明久は抱きしめて……それから、手を握つて言つてくれた言葉だよ」

「……………そついえば、そだつたな」

あの時、母親の元から帰つてきた彼女の姿があまりにも痛々しくて、彼女に問い合わせても答えてくれなくて……そんな彼女に俺は今にも壊れそうな彼女の体を優しく抱きしめ、その手を握つていた。

「なんだか、今の明久を見ていると……昔の私を思い出してね……それで」

「『僕は君のことは何も知らないけど、何も知らないてもいい。だ

けど』「

「…」

気付いたら、あの時の言葉の続きを口にしていた。記憶の彼方にあった言葉のはずなのに、不思議とすらすら言葉に出来た。

「「君の傍において、君を支える」」

特にタイミングを合わせているわけでもないのに、俺達は同じ言葉を同じタイミングで言った。たったそれだけの事が、今の俺にとってかけがえの無いと思えるほど嬉しい事だった。

俺の心に恐怖感は無かった。

変わりにあるのは、暖かくて心地良いものだけだった。

「ありがとう、フハイト」

「うん、どういたしまして」

そつと、ガラスを見る。

そこには先ほどの惨めな自分ではなく、いつも通りの笑顔を浮かべている吉井明久がそこにいた。

やれやれ、何をやっているのや。ひ。

せつかぐの『デート』だって言つのに、最初からこれじやあ前途多難だな。

「せつかぐの『デート』なのに、こきなり迷惑かけてごめん」

「ううん、大丈夫だよ…それより、もう大丈夫なの?」

そう言つて不安げな表情を浮かべるフェイトだつたけど、俺はその頭を少し乱暴に撫で回してやつた。

「ああ、甘えん坊の魔法使いが俺を癒してくれたから問題なしんだよ」

「あ、甘えん坊！？」

心外だ、と言わんばかりの表情を浮かべるフェイトだが、実際彼女は結構甘えん坊な節が多くある。俺はその表情を見て、ニヤリと笑う。

「あー、悪い。甘えん坊だけじゃなくて、寂しがり屋に怖がりでもあつたなあ！」

「あ、明久あ！」

顔を真っ赤にしてフェイトはパタパタと手を振つてくる。
してやつたり、と心の中で思いつつ、俺は腹から込み上げてくる笑いをこらえつつ、恥ずかしがつてゐるフェイトを見る。

やれやれ、お互いまだ子供だなあ。

先ほどフェイトに情けなく縋り付いてしまつて、それが……なんというか、恥ずかしく思えて、思わずフェイトに意地悪をしてしまつた……向こうの俺はこんな意地悪をせずには、もつと優しい……別のことをしてやつてゐるのだろうけど。

むくれ顔になつてゐるフェイトの頭をポンポンと撫でてやると、突然するつと俺の腕に自分の腕を絡ませてきた。

突然の事に、俺はビクン！と体を一瞬だけ硬直させてしまい、それが彼女の狙いだつたようで、彼女も先ほどの俺のよつとしてやつたり、と笑みを浮かべていた。

「もう本当に大丈夫そうだね

「ああ、それじゃあ行こうぜ」

「うん…」

そのまま俺達は歩き出した。

しかし後々に俺はこの時気付いておけばと後悔している。
背後から俺達を覗き見る不振な影に……。

はやてサイド

おお、なんかええ雰囲気になつたで！

最初はアキ君がどこか不安げな雰囲気を出していたみたいやけど、
今はそんな雰囲気なんてなぞやつやな。うーん、初々しいカップル
つちゅうかんじやな。

「はやてちゃん」

「はやで～」

「…………はやで」

「なんや～」

後ろからなのよちやんといヴィータ、康太君がジト目で私を見詰め
てくれる。

けれど私はそんな視線を容易く受け流し、ニヤリと笑う。

昨日のフロイトちゃんは、傍から見ても解るくらい拳動不審やつたし、夜寝る前、私はしつかりといの耳で聞いたんや……フロイトちゃんがデートの待ち合わせをしたるとこ「う」とこ！

「ふふふ、フロイトちゃんとアキ君の初デート……しつかり見させてもらひついでー！」

「正直、私は気が乗らないよ～」

「あたしは興味ねえんだけど」

「…………他人の幸せを見るのに興味なんてない」

などと口々に文句を言つてゐなのはちやん達やけど、私には解る！
ヴィータは本当に興味無せそつやけど、なのはちやんはさつきからチラチラとアキ君とフロイトちゃんの様子を見て、フロイトちゃんが幸せそうな顔をしたり、アキ君が笑顔を浮かべていたりするところを見ると、につこりと笑顔を浮かべておるし、康太君は普段からその手に常備しておる「デジカメ（ミニデジ製）で普段は見られないのはちやんや、フロイトちゃん、つこりに私とヴィータの私服姿をしつかりとデジカメで撮影してこるつちゅつじとぐらいお見通しや！

康太君に念話で話しかける。

「（ビヤ？普段見られない表情を浮かべておる美少女を撮影する機会なんてめつたにないや？）

「（…………なんのことか、解らない）

「アハ、なじめー。せー、アコニシー。」

「アガル！」

なのはちゃんが穿いてあるスカートを少しだけはためかせただけでこれか…康太君てほんま純情やなあ。そのまま息絶え絶えな状態の康太君に

「（康太君、分け前はきつちり用意するんやで？）」

（約束せらる） 繩十とつ、

鼻血を流しておる紳士はどうかと思ひたが、細かいことは気にしないほうがええな。

さあ、一人かどんなテー卜をするか…きへあり見させでもううで

……なんて思つとたら、遠くから何やら騒がしい喧騒が聞こえてきた。

『み、美波ちゃん！見てください、吉井君が！』

『へっ！？あつ！アキの奴、何やつてるのみー！』

あれは…瑞希ちゃんに美波ちゃんやないか。なんや、二人とも街に出かけてたみたいや。

それにして…アキ君も隅に置けんものやなあ。まあ、アキ君

つて結構天然な女たらしのところがあるから、無理もないけど。

『ああー今、フェイトちゃんが吉井君の腕に思いつきつぎゅうと抱きつきましたよー?』

『何ですかー?』

やれやれ、街中で大声出すなんて……いくら驚いていたとはいえ、少しほマナー一つもんを考え……。

『瑞希ー!ー!』

『美波ちゃんー!ー!』

『『今すぐ吉井君を殺りにこきましょつ(こくわよ)ー!ー!』』

「「「ちよつーんまつーーつてえ
ー!ー!ー!」」

あまりにもふつ飛んだ言葉が耳に届き、私は声にもならない叫び声を街中で上げてしまつた。

映画館

駅前にある映画館。

雄一や姫路達と何度か足を運んだことはあるが、こうしてテートとしてここに来るのは初めてで、少しだけ緊張してはいた。

とはいえ、それをフェイトに察すられるなんてことはしなくてよ
に、俺はさつさと話題を振る事にした。

「フェイトは何が見たいんだ？」

「うん、実はね前々から決めていた映画が……」

なんてそこまで彼女が言つた瞬間だった。

俺とフェイトは目の前の異様な光景を見て固まってしまった。
いや、固まっているのはおそらくフェイトだけだろう。俺は一度
田だからなんとかすぐにフリーーズから脱出できたが、やはりこの光
景からはどうしても田を逸らしたくなる。

そのままフェイトの手を引いてその場から離れようとしたら、向
こうが一歩前に気付いてしまった。

くつ……もつと早く俺がこの場から離れていれば……！

「よっ……明久……」

「お、おう……雄一」

「……お早うフェイト、吉井」

「お、お早う……翔子」

鎖が繋げられている手枷を両腕にはめた雄一と、その鎖を握つて
至福の笑みを浮かべている霧島が、俺達の目の前にいた。よく見て
みると、雄一は先ほど俺よりも酷い表情を野性味が溢れた顔から
浮かばせていた……こいつがこんな顔になるなんて……一体何があつ
たのか、怖くて聞けねえ……。

「雄一……大丈夫か？」

「……男とは……無力だ」

「……」今まで憔悴しきつてゐる人間を俺は今まで見たことがない。

「……雄一、何が見たい？」

「give me freedom」

直訳すると自由を下さい、か……同情の念が俺とフュイトから伝わってきたのか、気まずそうに雄一は俺らから目線を逸らしていた。対して、霧島はとくとうと……。

「……そんな映画のタイトルはないけど……」

THE・天然スル。

前々から思つていたが、霧島つて結構天然っぽいといふあるよな。雄一関係で。

「……じゃあ、とある禁呪の默示録・完全版」

「待てそれ、四時間五分もあるぞ……」

「……一回見る」

「八時間十一分も椅子に座つてられるか……」

どんな耐久拷問だ、と思つた時と霧島が次の行動に出た瞬間が同じで、俺は次の言葉が言えなくなつた。

「……大丈夫」

バチバチャー！！

霧島が懐からスタンガンを取り出し、それを雄一の首元に情け容赦なくぶつけた。辺りに雄一が浴びせかけられている電撃の閃光が飛び交い、周囲を照らしていた。

「ちょっと待て、翔子お

づあ…………」

『坊ちや

ん…………』

雄一はしばらく電撃にもだえ苦しんでいたが、奇声を上げてその場に倒れこんでしまい、こいつのデバイスのイージスがマスターを思つて叫ぶが、雄一はその声に反応する気配を見せずに力無く床に伏せていた。

「……じゃあ、二人とも」

「おひ、おう」

「うひ、うん」

グイツ、ツカツカ。

霧島は糸が切れた人形のようになつた雄一をカウンターへと連れて行く。どうでもいいが、誰もこの状況につっこみをいれないのは何故だ。

「……学生一枚。一回分」

「はい、学生一枚、気を失つた学生一枚、無駄に二回分ですね」

笑顔でスルーする店員。いや、せめてひとつこめよー。客の状態がおかしい」とぐらりと描きしろよー。営業スマイルもいいけど、非常時までスマイルでいらっしゃうじつとしては迷惑以外の何物でもないからさー。

「　　」
　　」
　　」

恐るしきかな、霧島ハリケーン。

先ほどまで騒がしかったのに、それが過ぎ去つた空間では微妙な空気が漂い始めている。

「行こうか……フロイト」

「う……うん」

顔が引きつっているフロイトの手を掴み、俺はむさつひと映画を見てこの微妙な気分を払拭することにした。
せつかくの初デートなのに、色々前途々難ずるが。

はやてサイド

「な、なんだつたんだろ？、あれ？」

「私に聞かれても……」

「あたしに聞くなよ」

「…………俺に聞かれても、返答に困る」

ほんま何やつたんや、さつきのは？

翔子ちゃんつてほんまに雄二君のこと好きなんか？あのがいわゆるヤンデレつちゅう奴か……いやははや、恐ろしいものやな……せつかくいいムードやつたのに、霧島夫妻が登場した瞬間あつといつ間にぶつ壊れてしまつた。

しかも。

「本当に仲が良いカツプルですね～」

「憧れるよね～」

「いや、あれのどじが仲が良いつていうんだよ…………」

ヴィータのつゝこみも耳に入つていらない様子で羨望の眼差しを浮かべて夢見心地な瑞希ちゃんと美波ちゃん。いや、ほんまにあれのどこがベストカツプルつていうんやろか？あればもつ尻に敷かれる、ちゅうレベルを超えてるで？のろけも何もないやんーどじのホラーサスペンス「ミックみたいやで！！

「…………康太君、とつあえずアキ君達の方にサーチャーを飛ばしておいてくれへん？」

「…………」「解」

そう言つと康太君はバッグの中からお手製のサーチャーを数個取り出し、透明にするとそれを一人の元へと飛ばしていった。これで二人の様子を見ることが出来る。

さて、問題は……。

「はつー見惚れてる場合じゃなかつたわー！」

「そ、そりですねーはやくちやん達、一人がどこに行つたか知りませんかー？」

「私は全然見てへんかつたで？」

「わ、私も！」

「あたしも見てねえよ」

「……………カメラの調整で忙しくて見てない

「ああ、もうー」「なつたら行くわよ、瑞希ーー！」

「そうですね！行きましょう、美波ちゃんー！」

釘が埋め込まれた金属バットを片手に（ビットから持つてきたんやねん）二人は映画館へと突入していった。

はあ、まさかアキ君達のデートを見に来ただけやのに、一人のボディーガードをせなあかん状況になるなんて思わなかつたで……。一人ともーどうか無事にデートを完遂してな～。

第八話（中編）（後書き）

次回の投稿は結構間が空くかもしません。

第九話（後編）（前書き）

ようやくテストが終わった……『データ編、ラストです。

第九話（後編）

明久サイド（抜刀モード）

「はあ……」

「…………」

映画が終わり、俺達は余韻に浸りながら歩いていた。
面白かった。もの凄く面白かった。

「いい映画だったな」

「うんー。」

俺の言葉にフェイトは心から同意してきた。

フェイトが見ようといつてきた映画のジャンルは恋愛。まあ、フェイトだって女の子なのだし、こういった類の映画は見てみたいのだろう。俺は特に恋愛系ジャンルはあまり見ないのだが、取り立て今は観たい映画があるわけでもないし、彼女が見たいといっているのだから、俺は快く了承した。

俺達が見た映画、タイトルは『冬桜』

映画の舞台は現代の日本。

物語は生きる意味が見つけられない少年と、決められた運命に戸惑う一人の少女の物語。

少年は生きる意味を見つけられず、ただ毎日を怠惰に過ごし、たつた一人の肉親である姉に養われて生きていた。成績は悪くない、運動神経だって鈍くはない。けれど、彼にはどうしても生きているという実感が湧かなかつた。

このままではいけない。

そう思つてゐるのに、どうしても生きがいを見つけられない。

そんな少年の前に、一人の少女が現れる。

月の光を背後から浴びてゐる少女と少年の出会い。

そこから彼らの物語が始まつた……。

「面白かったなあ……特に最後の三十分は目が離せなかつたな

「うんうん…」

今だ興奮が冷め止まないのか、フェイトは思い出しては恍惚とした表情を浮かべ、時折涙を拭つていた。あの映画は単純な恋愛だけでなく、家族の愛や仲間との絆も描いていて、たった三時間という時間で、何度も涙を流しそうになつた。最後のシーンは感動モノだつた。フェイトの隣だから涙を流さないようにしていつた俺だけ、ラストシーンだけは俺も涙を流してしまつた。

生きる意味を見つけることが出来た少年と、自分の運命を自分で見出せた少女。その二人を支え続けた家族の愛。あれで感動できな人間はないはず。

なんというか、あれを見た後だと自分の世界観が変わつて見える気がする。

今なら雄一が目の前で霧島とイチャイチャしていても笑つて許してやれるような気がする。

それぐらい感動できる映画だった。

「あつー。」

「ん?」

突然俺の膝に軽い衝撃が加わる。下を見ると、マントを羽織つた

小学生ぐらいの男の子がおもちゃの刀と鞘を床に散らばして尻餅をついていた。格好から想像するに、おそらくはこの映画館で上映していた日曜の朝早くから放映しているヒーロー番組のコスプレなのだろう。

「大丈夫?」

フュイトはそういういながら男の子を優しく立たせ、俺はその間におもちゃの剣と鞘を拾い上げるついでに、鞘を剣に納めて『僕』の状態に戻つてみよ!と試して…あれ?

「あつ、戻れた」

「えつ?あつ!明久、普段の方に戻れたんだ」

「うん…ちょっと試してみたんだけど、成功したみたい」

おお、初めて刀以外でやつてみたけど、こんなおもちゃの剣でも、僕の性格って簡単に変わるものなんだなあ……なんて感心しつつも、男の子におもちゃの剣を手渡しておく

「はい、次は気をつけてね」

「うん!ありがとな、カッフルの兄ちゃん、姉ちゃん!」

「「なつ…?」」

男の子の何気ない言葉に、僕らは一気に顔を赤くした。
い、いきなり何言つてるの、この子
!?

そのまま笑顔で母親と父親の元へと駆け出していく少年。

普段だったたら微笑ましい光景で、思わず笑顔を浮かべてしまつはずなんだけど、今の僕らにそんな余裕はなかつた。

か、カツプルつて……いや、フェイトと一緒にいてそんな風に見られるのは大変光榮で御座いましてそこはかとなく嬉しいことではあるんで御座いますけどね！ん？言葉遣いが途中からおかしくなつてるつて？氣のせい氣のせい。

けれどそんなこと、僕と彼女であり得るわけがないというか、なんというか、確実にそんなこと彼女が聞いたらきっと氣を悪くしちやつたりとか……。

内心、冷や汗を感じながら隣にいるフェイトを見てみると……。

「か、彼女…私が…明久の彼女…え、えへへ」

あれ？

僕の予想と反して、フェイトは幸せそうな表情を浮かべていた。僕の今までの経験からして、こういった事態は必ずといっていいほど僕に被害が起きていたはずなんだけど……これは一体……。もしかして。

これはもしかして、もしかしするとだけど……。

フェイト、ひょっとして……僕の事が……

い、いやいや。確証もないのに何勝手に結論付けているんだ、吉

井明久！

フェイトみたいなスタイル抜群で、性格も良い美少女が僕に気があるわけ……いや、でもそういうた節は割りとあつたような……いやいや、何をバカな……でも、いやいや、でも……ああ一頭がこんがらがってきたあ！！

さっきから心臓が太鼓のように鳴り響き、息苦しさを感じているけど……でも、不思議と苦痛にならず、むしろそれが心地よいと思え

る自分がいて……ああ、なんだろう。この感情は……もしかすると

……フロイトもこの感情を胸に抱いているのかな?

よし、ここには男らしく聞いてみる事にしよう!

僕は深呼吸をすると、フロイトの前に立つて彼女を真正面から見据えた。

「ふえ、フロイト…

「くつー?は、はー!」

「…………フロイト

「…………はー」

僕は彼女の瞳をまっすぐ見つめ、ゆっくつと言葉を紡いだ。

「…………」

「…………」

「…………(ジー)」

『飯

食べに行かない?』

男らしさ?何それ、美味しいの?

「えつー?あつ、う、うんー?だねー!」

互いに顔を真っ赤にしながら、僕らはさりげなく歩き始めた。

周りから「なんだ」とか、「甘くなるじやなかつたのかよ」や、「ヘタレ」とか聞こえてきたけど、僕はそれを華麗に無視する。ふつ、この程度で僕が動搖すると思つてこるのか…………べ、別にヘタレじゃないもん！

せつときまで腕を組んでいたのに、今はなんといつか……互いに意識しているせいか、相手の顔を見ることすらままならなかつた。

はやてサイド

「瑞希……」

「美波ちゅあさん……」

「殺るわよ……」

「それわかるかあ

……」「……」「……

臨戦態勢に入ろうとする一人に、私となののはちゅあんとヴィータが後ろから羽交い絞めにして、なんとか行動を阻止する。もう何度繰り返したかわからんで？

「離しなさい、なのはにヴィータ……」

「はやてちゃん、離してください……」

「離したら明久のところに行くださ……」

「そして確実にアキ君しめるやう、一人とも……」

「そんなことしないわよー浮かれまくってるアキにただ注意するだけよ」

その手に持つている大量に釘が打ち込まれた金属バットは、注意には絶対に必要のないもんやと思うで？

「二人とも、どうして止めるんですか？もしフェイトちゃんに万が一の事があったらどう責任取るつもりなんですか！？」

「「それはない！」」

なのはちゃんと私は、ほぼ同時に瑞希ちゃんの言葉を否定する。アキ君は確かにスケベなどこりもあるけど、そういうことに關しては誰にも迷惑になるような事は絶対にやらへんって確信はある。誰かの為なら、当たり前のよう体を張るアキ君のことや。誰かの不幸にしかならへんことなんて、死んでもやらへんはずや。それを一人に説明してみたんやけど…………。

「何言つてるのよー男なんてみんな狼なのよー？ちょっと油断すればあつとこう間なんだから！！」

「せうですよ、うつかりフェイトちゃんが吉井君に勘違いするような言葉を言つちゃって、そこから間違いが起きちゃつたらどうかなつもりなんですかー？」

「一人ともやつときからこんなばっかりや。」

恋は盲目、つてゆうヤジこれはいくらなんでも見えてなさ過ぎあとちやつ？

「つーか、お前らを行かせた方が絶対取り返しのつかないことになりそうな気がするぞ！」

ヴィータの言葉に一票や。

「どうがよー」

「そうですよ、失礼ですね！」

「そういうんだったから、一人ともその物騒なバットを置いていきなよ……」

なのはちゃんの言づ通りや。それで打たれたら確實にお陀仏やで。ただでさえ殺傷力が高い釘バットを、金属製にしたんやから威力も見た目の物騒さも何倍も強化されとる。

「どうか、わざわざから他の客からの視線が痛い……ああ、アキ君にフォイトひやん……どうか無事にこの場から逃げ切つてな……」

明久サイド（通常モード）

ラ・ペディス。

文月学園生徒御用達の店で、僕も何度か立ち寄つたことはあるんだけど……その度にある意味濃い体験を経験した場所で、僕らは昼食を取つていた。

「良かつたね」

「んつ、おいしつー」

フロイトがそう言つて幸せそうに手を細めてカルボナーラを咀嚼する。うんうん、さすがは生徒御用達の店。悲惨な体験をした場所ではあるけど、相変わらずの繁盛しているところをみると、あの時はきっとタイミングが悪かつただけなんだよね。

そう前向きに考えながら僕は注文したラザニアを口に運ぶ。うん、美味しい。

それから軽い談笑を交えながら、黙々と食べ進めていった僕らだつたけど、フロイトはデザートまで注文していたみたいだった。

「どんなデザートなの？」

「ふふっ、来てからのお楽しみだよ」

そういうフロイトの顔はどこか楽しげで…それでいて、頬がほんのりと紅潮していた。

なんだろう?と首を傾げていると、ついにそれが姿を現した。

「お待たせいたしました。特性クリームソーダ・ハワイアンカップルモードで御座います」

「ブバア！」

僕が噴き出した水が、店内に綺麗な虹のアーチを描いた。

店員さんが運んできたそれは、どでかいカップにブルーハワイソーダが入り、その上にアイスが乗せられたクリームソーダだった。しかも、アイスの頂点には一つのストローが刺さっていて、そのストローはハートを描くように湾曲していた。

「ふえ、ふえふえふえフロイト！？なに、これ！？？」

「何つて、ラ・ペティスの人聞いたおすすめの品だよ？」

それはカップル限定のおすすめだと思ひ。

それにしても、そのおすすめを勧めた店員さんの目は節穴だな。僕とフェイトじゃカップルに見えるわけないじゃないか……明らかに僕の方がフェイトと不釣合いって感じだし。

目が節穴な店員さんは「じゅつくりどうぞ」と、僕らに柔らかな笑みを浮かべながらそのまま自分の仕事へと戻つていったけど、今の僕はぜんぜんごゆつくりできる心境ではなかつた。
もしかしたら一人で全部飲むつもりなのかもしれない……なんて淡い幻想を抱いてしまつけど……。

「ほら、明久も一緒に飲も！」

フェイトは一コ一コと笑いながらグラスをテーブルの中央に寄せていく。

「ふえ、フェイト？ 本気なの！？」

「えっ？」

「えっ？ ジゃないよ！ だって……」うううことは、その……恋人とか、そういう人とやるもので……

そこまで言つた瞬間、フェイトが頬を赤く染め、そして……上目使いで僕を見つめてきた。うつ、な、なんか……それだけで僕の心臓のクロックが上がつたような気がする。

フェイトはゆっくりと僕の方に身を乗り出し、小声で……僕だけにしか聞き取れないような声で僕にささやきかけた。

「…………ダメ？」

「え？」

「私とじゃ、ダメ？」

「フュイト？」

彼女の顔が次第に真っ赤になつていき、皿の端にはうすく涙をためていた。

緊張、しているんだ……。

彼女がこれから告げる言葉は、おそらく彼女の心の奥底から引っ張り出されてくるものだ。自分の内側にしまい続けてきた想いは、年を重ねるごとに重くなつていいくもの。それを表に出そうとする行為は、とても辛くて、とても苦しいことだ。

でも彼女はその苦しみを必死に耐えて僕に曝け出そうとしている。フュイト・T・ハラオウンが僕だけに、自分の奥底を見せようとしてくれていた。

「私はね……明久のこと、ずっと……ずっと前から」

「…………」

もしかして……これって……告白？

彼女の口から告げられる前に僕の頭にそんな単語が過ぎたが、そんな甘い幻想は次の瞬間、どこからか飛んできた釘金属バットによつて殺された。

「ほべしゃー」

「あ、明久あ！？？」

重量と速度、さらに鋭利な物質が合わさって強力な殺傷力を上乗せた強烈な一撃をもろに頭に受けた僕はその場に倒れこんだ。おかしいな…冷たいはずのリノリウム製の床が…なぜか、今はとっても生温かいや。

ああ、どうしてだろう…とつても眠いや。

薄れゆく意識の中で、僕は一つの結論にたどり着く。

結局僕が酷い目に会うのはデフォなんだということ……。

「あ、明久！しつかりして！明久あ！！」

「ああ…死んだおじいちゃんにおばあちゃんだあ…」

ぼんやりとした視界の中、僕は懐かしい人々と出会う。

「明久！？本当にしつかりして…！」

「やあ…元気だった？アリシアにリインフォース……」

それはかつて僕らと関わりを持ち、悲劇によつて失つてしまつた大切な人々との再会。これはきっと…神様がくれた、一つの奇跡なのだろう。

「色々と気になる人が出てきてるけど、とりあえず戻ってきて！明久あ！？」

「やあ…奇遇だね、雄二」

「なんで雄一君までそつちにこるのー?」

なぜかこの多次元世界で最もひとつでもいい「ブサイク」と出会ってしまった。

神様、別にこいつは今まったく必要ないので、とっとと地獄で
も送ってください。

「戻つてきてーなんか顔色がどんどん青くなつてきてるからーでき
るなら雄一君も一緒に戻つてきてーーー！」

「リインフォース...」

「えつ！？どうしたの、明久！？」

「豆乳って美容にいいらしいね……」

「もの凄く今はどうでもいい情報だよ、それ！」

- 1 -

「えっ！？明久！？ちょっと、何も言わなくなつたけど大丈夫！？
？起きて！本当に起きて！－最後の言葉があれなんて嫌だよ！明久
あ
－！－！」

どこからか僕の名前を呼ぶ声が聞こえてきたのは気のせい?

せゆてサイド

ヤバイ！

二人の甘々で見ていると思わず吐糖しそうな空間にブツチンときたのか、瑞希ちゃんと美波ちゃんが手に持っていた釘金属バットをアキ君に投擲しおつた！！

とつさに瑞希ちゃんの方は、私どのはちやんで取り押さえる事に成功した。むつ？これは中々の乳をお持ちやな… フェイトちゃんといい勝負… いやいや、フェイトちゃんの方が大きさ的には少しだけ上やな。柔らかさでは… ふむ、じつちの方がフェイトちゃんよりも柔らかい。むう、これは甲乙つけがたい感じや……。

「ああ！危ないアキ君！！」

「はつ…」

なのはちゃんの声で私はハツとした。

あかんあかん、ちょっとと考えすぎてたみたいやな… この話題は後々康太君と一緒に談義する事にしよ。

美波ちゃんの方は…ダメや！間に合わんかつたつか…！

美波ちゃんをヴィータが取り押さえた時には既にバットはアキ君の頭に命中していた。

あつ！アキ君の頭から噴水のように血が…！

「「アキ君

！…！」

そのまま床に崩れ落ちるアキ君。

ちょつ…なんか受身すら取らんかったで…？アキ君、大丈夫なんか…？？

とりあえず、二人にはヴィータが鉄拳をかましたみたいやから、今は目を回して気を失つておるわ。本間にこの二人、アキ君のこと好きなんか？

……つて、なんかアキ君が虚ろな目でふつぶつと虚空を見ながらなんか言つてるでー?」

「やばい、行くでえ康太君ーー!」

「…………了解!」

私は普段から常備しておる緊急セットを片手に一人の元へと駆け寄る。

康太君は慣れた手つきでアキ君の頭に包帯を巻き、その間に私はアキ君の衣服を捲り上げて、意外に鍛えられている上半身をさらすと、その上にぺたぺたとAEDシートを貼り付ける。

「310、チャージ!」

「…………300、了解」

私が貼り付けている間に、どうやら康太君もAEDの準備を済ませていたみたいやな。そのまま私はいつたんアキ君から離れる。それを確認した瞬間、康太君はスイッチを押した。

「3・2・1!」

ピッ。バリバリバリバリ!!!!

「あばばばばばばばばばばばばらんちゅつーー!」

不気味な叫びと共に、アキ君は電撃を体に帶電したまま復活した。おお、良かつた良かつた。あと数秒遅かったら確實にアキ君逝つてたで……。

額から汗を流しつつ、ビニカホッとしたような表情でアキ君は咳いた。

「あ、危なかった……あやうベスト？ リインフォースに負けるところだつた」

「いや、死に掛けた身で何やつてんねん！？」

アキ君の開口一番の台詞に思わずつゝこんでしまつた。

臨死体験から見事に生還して、第一の人生ライフの最初の一言がスト？ って！ 古いわ！ 何である世で寝ゲープレイしとるんや！ ？ しかもリインフォース！ 何ちゃつかりあの世ライフ満喫してんねん！ 幸せそうで何よりやけどな！

「あれ？ はやてこムッシリーーー！」 こんな感じで何してんの？

「「ぐつー。」」

い、いえへん。

アキ君達のテートを尾行してたなんて口が裂けても言えるわけあらへん……。せやナビ、なんていまかしたらえんや？ アキ君、捜査のことに関してはもの凄くくらべ頭回るから、下手なごまかしきかへん……。

といづか……。

「その前に、せひ倒れるとのフライテナちゃんをなんとかせな、あかん！」

「へつ？ って、フライテ

！ ？

? ?

鼻血を流し、光悦といったような表情でその場に倒れこんでいるフェイントちゃんにかけよるアキ君。ああ、せっかくとは逆パターンの臨死体験が目の前で繰り広げられる。

「ふえ、フェイトオオオオオオオオオオオオ！――！」

フロイトちゃんの鼻から血が噴水のように噴き出し、店内に真っ赤なアーチを描いた。

反応はないと思うで？

「もう慣れどるけど

フェイトちゃんがこんな風に倒れるのは今回が初めてじゃない。結構前からフェイトちゃんの元に定期的にアキ君の写真が数枚送られてきている。中にはちょっと…その…成長を感じさせるような絵があつたりで、フェイトちゃんは毎回それを見ると鼻血を噴き出して倒れていた。

おかげで、すっかり輸血パックやAEDを持参するのが当たり前になってしまうという、悲しい習慣が私たちに見についてしまったんだ……。

私はためいきを吐きながら持つてきていた輸血パックをバツクの中から取り出し、フェイトちゃんに点滴を始めた。

「…はやて？ずいぶん手馴れてるね」

「まあね。康太君、ちょっと手伝つて…」

「…………し、しましま（ブシャアアアアアアアアアアアアアア
アーーーーー）」

しましま？

つ……

しつ、しまつた！うつかりスカートで座つて作業していたから、私のスカートの中が正面にいた康太君に中を見られてしもうた！！ぐう、おっぱいソムリエとして不覚や……えつ？論点が少し違う？知らん。

「ムツツリーーーしつかりするんだ、ムツツリーーーー！」

アキ君の声が聞こえてきて、私はハツとなつた。
せや、今は一人の命を救う事を優先せなあかんかった！！

「アキ君、AEDがここにあるでー！」

「ありがとう、はやて。輸血パック、借りるね！」

「おう！いくらでも持つていけ！」

私とアキ君は一人の蘇生しようと必死になる。ぐう、今日は写真やなくて直接やつたから鼻血の量が普段よりも多い……康太君のほうも血の量がフェイトちゃんとそう大差ない感じがするで……。
一人やと限界がある……誰か手伝ってくれる人は……

「アキ君！」

「はやで！」

そう思つたとき、私たちに救いの手を差し伸べてくれる一人が来てくれた。

「なのは！ヴィータ！」

「大丈夫！？鼻血が見えたから、もしかしたらって思つたけど」

「くそつ！フェイトもムツツリーーも瀕死じやねえか！はやで、人工呼吸器を貸せ！あたしはムツツリーーの方をやるから、なのははフェイトの方を頼む！」

「任せてよ！」

よし！これで戦力は充分や…このまま一気に一人を蘇らせたる！蘇れ…蘇るんや、フェイトちゃん！康太君

！！！

明久サイド

「脈拍、安定したよ」

「呼吸も落ち着いてきたよ」

「顔色も大分良くなつてきたな」

あれから数分。

僕らはなんとか二人をこの世に留める事に成功して一息つく。
ふう、なんとか輸血パックの量も一人が常備していた分でギリギ
リなんとか足りたみたいだ。

今日は格好つけようと思つていつも持ち歩いていた緊急セットを
家に置いてきたから、一人の参戦は本当に助かつ（シユカ！）へ
つ？何今い！？

右の頬をかすめた何かを探していると、どこからか聞き覚えのあ
る声が聞こえてきた。

「また会いましたわね、豚野郎！！」

「げつ！清水さん！？」

いつの間にか僕から数メートル離れた位置に、螺旋状のツインテ
ールを持つた少女、清水美春さんが、そこにいた。彼女の指の間に
はナイフとフォークがクナイのようにはさまれていた……まさか、
さつきのつて…………。

「今日こそはあなたの命日ですわ！私の愛しの美波お姉さまを誑か
ず腐れ豚野郎はここでくたばりなさい！！」

そう言つて清水さんはナイフやフォークを次々と投擲し始めた。

「さ、三人とも！とりあえず一人をどこか安全な場所に！！」

「わ、わかったよ！」

「死ぬなよ、明久！！」

「余所見をするなんて、余裕ですわね！」

今だに氣を失っているフエイトとムツツリーを抱え、なのは達は店を出て行く… よし、これで二人の安全は確保された… けど。

「うわあ！ ちょっと別に僕は美波を誑かしてなんて（シユカカ力！）うわっ！ 今のかわさなかつたら失明して（シユカカ力！）やめてえ

！…！」

聞く耳なんて最初から持つていません、とばかりに清水さんは次々とナイフやフォークを僕に向かって投擲してくる。次々と放たれてくるナイフやフォークを僕は必死にかわす。

「おのれ！ とつととくたばりなさい、豚野郎！…！」

「そうはいかない！…！」

人体が持つ限界ギリギリの柔軟さを使って僕は放たれてくる刃物の投擲を避けまくる。

くう、だけど避けてるだけじゃ……すると、僕の視界に紙ナプキンに包まれた一本のナイフが目に入る。調度いい、あれを使おう！ 清水さんの攻撃をかいぐぐり、僕はテーブルの上に置かれていたナイフを取り、紙ナップキンから抜いた。

瞬間、『俺』の中にあつた何かがキレた。

「…………さつきから豚野郎、豚野郎つて……」

「？」

「ウゼエんだよ、この年内桃色百合煙の螺旋頭女がア
――――」

俺はナイフを両手に持つように構えると、清水が次々と放つてくるナイフやフォークを空中で全て叩き落していた。こんなもの、なのはのアクセルシユーターや雄一の矢と比べたら遅すぎだ。

「ど、突然なんなんですの……？ 気持ち悪いですわよー」

俺の突然の変化にひるんだのか、清水は攻撃の手を緩めていた。
今がチャンス。

「気持ち悪いのはてめえだよ百合女！ 一回精神科行つてきやがれ！
！」

「私とお姉様の乙女の恋路を邪魔する豚野郎は黙つてなさいーー！」

「乙女はフォーカやナイフなんてもの店の中で投擲しねえよー乙女
とか言う前に常識ぐらう守りやがれーー！」

「死にやがりなさい、豚野郎ーー！」

「話聞けやー都合の悪いことは全部突き抜けていくのか！？ この螺旋頭！」

「誰が螺旋頭ですか！？」

「螺旋頭じゃねえかーつづか、なんでそこだけ聞き取るんだよーー！」

ええいー。わつきからばんぜん話にならねえー！

清水は俺の言葉に耳を貸さず、じどこに隠し持つていてるんだよ、つてつっこみを入れたくなるような量のナイフやフォーク、果てはスプーンまで投擲してくる。

ちくしょうー。こうなつたら特攻して頭をぶん殴つてやるー！

……なんて俺が前へと踏み出そととした瞬間だった。

「アキー。」

「吉井君ー。」

「姫路に美波ー？なんでここにいるんだよー。」

雄一に霧島といい、はやてとムツリーといい、今日はやけに知り合いと会う日だな。なんて頭の片隅で考えながら俺はナイフを振るひ手を休めずに一人に向かって叫ぶ。

「一人とも、ここは危ないー早くこの場から逃げろー。」

「やつはこませんー。」

「やつぬー。」

一人は強い意志を秘めた瞳で俺を見据えてきた。

いたい、どうしたつて言つんだ？

「フロイト（わやん）とのデートのこと、じつへり聞かせてもいいます（わよ）……」「フロイト（わやん）とのデートのこと、じつへり聞かせてもいいます（わよ）……」

「今まつたく関係ねえだろ、それ！？」

何でこの状況でそんなこと聞こへるんだよー? 明らかにそんなことやれる訳ないだろ!

「わあ、じ~~~~~くへつ聞かせてもいいねよ、アキー。」

「ま、待（ヒヨン！）おわつー今はやうな」と叫つてゐる時じで、ヒヨン（ヒヨン）ねえだ（ヒヨヒヨヒヨン）があ

「はっ！お姉様！？美晴に会いに来てくれたんですか！？」

「げつ、
美春！？」

おっ、投擲が終わつた。今のうちに逃げよう。

清水…今度会つたら思つゝきりの螺子が抜けまぐつた頭をふん殴つてやる。

「吉井君つーべりーじー行くんとしたてるんですかー? フロイドちゃんとのバーーーのいじ、ちゃんと答えてもらひたませんよー。」

「お姉様！」

ああ、力オスだ。

せつかくの休日だつて言つのに全然休まつた気がしねえ……。

そのまま店を出ようとしたんだが、その前にガシリと俺の腕が誰かに掴まれる。

「お客様、お会計がまだですか？」

「『』の状況でよくそんなことが言えるな、オイ！」

ナイフとフォークが飛び交い、壁や床に血痕（鼻血）がこびり付
き、女子三人が騒ぎまくるといつ阿鼻叫喚な状況にも関わらず、通
常時の接客をしてくる店員に俺は度肝を抜かされた。
とはいっても払っていないのは事実なので俺はさっさと会計を済ませ
ることにする。

「全部で合計三万八千五十一円で御座います」

「高え！」

あまりにも法外な値段に俺は再び度肝を抜かされた。

「お客様が本田山口無しにした料理も込みとなつております」

「そここの螺旋頭が元凶だらうが……」

さつきのカツプルジュースの事といい、今といい、『』の店員は
目が節穴な奴ばかりしか雇っていないのか！？

財布の中を見てみると、そこには諭吉が一人だけ。
明らかに足りない……ちくしょう、このままじゃ……。

カラソロ

俺が冷や汗を流している時だった。誰かがこのカオス空間と化して
いる店内に来店してきた。

「いらっしゃいませ、何名様ですか？」

「……カップル一人」

「つて霧島ー？」

来店してきたのは霧島と、若干皮膚の至る箇所が黒くなつていて、どこか焦げ臭さを漂わせている雄一だった。

……あれから雄一の奴、何があつたんだ？

「……よう、明久」

「お、おう……」

「男とは……無」

「それはもう聞いたぞ……」

生気が感じられない。もはや生きる屍と化したか。
だが今はそんな些末事は置いておき、とりあえず隣にいる霧島に
声をかける。

「霧島！金持つてないか！？」

「……びひしたの、吉井？」

「訳は後で話す！今は一分一秒も早く行かなきや行けないんだ！！
そのために金が必要なんだ！！」

「」の際だ。恥も何もかなぐり捨ててやる。

俺は霧島の肩をつかみ、その瞳を真正面から見据えて告げる。

「頼むー金は後で返すし、利子で雄一を一日好きにしていいからー！」

「

「ぶつー！オイコラ明久、何勝手に決めてんだーーー！」

あつ、なんか知らないけど雄一に覇気が戻ってきた。良かつたな。

「……吉井、お金は返さなくていいから雄一を……」

「解った！雄一を三日ぐらい好きにしていいぞーーー！」

「待てやーさつきから本人を無視して何を勝手に

「……………ありがとう、吉井はいい人」

「オイイ

！――！」

雄一の弁解空しく、霧島は財布から一万円札を何枚も出して払ってくれた。すまない、霧島。この借りは必ず返す！

「ありがとう、霧島ーーー！」

「…………吉井も、ありがとう」

礼を言うのはこっちだというのに、霧島はこんな俺に感謝の言葉を告げてきた…くう、なんて心の広い人だ。雄一なんかには勿体無いくらいだ。

「あつがとへりぞこましたー」

店員の声を聞き流しながら俺はそのまま走り出す。とりあえずは自身の安全確保からだ！ フォルトを通じてバルティッシュか、なのはレイジングハートに連絡を……。

「あつ、待つてください吉井君ーー！」

「待ちなさいよ、アキーー！」

「お姉様
ーー！」

ぐれあーせつあまで清水がいい感じで壁になつていたつて言いつのに、その壁と一緒に追いついてくるなんてーー！

内心で冷や汗を流しながら走る速度を上げようとした時だった。俺の隣を誰かが追いついてきた……って。

「雄ーー!? なんでーー? いるんだよーー? 」

「うぬせえーー！」

「てめー、さては霧島の所から逃げやがったなーー! 」

あんな優しい女性から逃げるなんて信じられない。なんて腐った奴なんだーー！

だが今はここに制裁をしている暇はない。今はとにかく逃げることに集中だ！ 運が良かつたな、雄ーー!

「吉井君、今度は坂本君とデートですかーー? 」

「フロイトの次は坂本つて訳！？どこまで節操がないのよ、アキ！」

「『なんでそつなるんだよー?』」

「このつとトーーーだなんて胸糞が悪くなつてくぬよいひな事誰がするかー！」

たが弁解してゐる暇などないものもない。ちくしょう!!

「……雄一、逃がさない」

「冗談じやねえ！こんなところで俺の人生終わつてたまるかあ！！」

「待つてください、吉井君！ちゃんと質問に答えてください。」「

「待ちなさい、アキ！！」

「嫌だ！なんか解らないけど、待つたら確実に不幸な目に会いそう
な気がするから……！」

ああ、なんでこうなったんだ！？

今日はフライアとの初デートだつていうのに、途中からなんで地獄の追いかけっこに変更されてるんだ!? 今日は厄日なのか! ? ? だが相手はそこいら辺にいる(?) 女子高生。

充分逃げ切れる可能性は極めて高いはずだ！

「捕まつてたまるかあ！――！」

「待ちなさ

結局、俺の予想とは裏腹に、日付が変わるまで俺達の追いかけっこは続いた。

…………最近の女子高生って……怖い。

第九話（後編）（後書き）

大変長らく間が空いてしまいましたが、次回から清涼祭編に入ります。

第十話（前書き）

若干遅れましたが投稿します。

明久サイド

「失礼しましたー」

職員室から出てきた僕は、一つのものを肩に担いでいた。
肩に担いでいるのは、僕が愛用しているエレキギター。学園祭の
出し物の提案として、今日は特別に持ってきていた。
授業にはまったく関係の無いものなので、没収される前に担任であ
る鉄人に事情を話して、この時間まで預かってもらっていたんだ。
ただ僕がギターを持ってきた訳を話したとき、やたら安心したよう
な雰囲気を見せたのは気のせいなのかなあ？
まあ、それは置いといて。

文月学園は今、清涼祭という学園祭を開催する時期になっていた。
新学期最初の行事である学園祭は、世界的にも注目されている文月
学園は、毎年多くの来場者が殺到している。学園側としても、召喚
獣システムの宣伝として、新たなスポンサーを手に入れるための絶
好の機会でもあり、こういった祭りごとにに関しては出し惜しみはし
ていない。

現に我々がFクラスも、学園側が出す費用もAクラスと比べれば多
少劣るけど、あくまで多少であつて、通常の費用と比べると結構な
金額が渡されている。といつても、無駄遣いされないように鉄人が
きっちり管理してるけど……。まあ、それについては置いておく。
僕の目的は別にある。

僕ははやての体調を気にして、劣悪な環境であるFクラスを少し
でも学園祭で少しでも稼ぎを出して、設備を向上しようと考えてい
た。

廊下を歩きながら周囲を見渡してみる。

お化け屋敷にするために教室を改造しているクラスもあれば、焼きそばのために調理道具を手配するクラスなど、みんな清涼祭に向けて出し物を決めて行動しているみたいだ。
だとこの辺……うちのクラスは……。

「はあ……少しばら眞面目にやつてほしよな」

思わず愚痴つてしまつ。

みんなが学園祭の準備をやつしているといふのに、うちのクラスだけは未だに出し物が決まっていなかつた……さすがに今日くらいはちゃんと決めておかないとマズイ。

雄一だつてそれぐらい解つているとは思ひ……多分。

「？」

ため息を吐きながら歩いていた僕の耳に、ピアノによる合唱が聞こえてきた。

「I Jの曲つて…… We are The world?」

『どこのクラスが、クラス発表で歌うのでしょうか？』

首に下げているキャリ……フォルトが僕にそう聞いてくる。おそらくだけど、フォルトの言葉は合つている。

文月学園では出し物と一緒に、各クラスごとの発表が必ず毎年行われている。

出し物はさつき説明したみたいなお化け屋敷とか、喫茶店とか、そういうもの。

クラス発表つて言つのは、クラスごとに決めた一発芸を披露する

もの。演劇や、お笑い劇、落語、あるいは……今聞こえているクラス合唱とか。

でも……なんというか……。

「ちょっと、音痴っぽいなあ……」

さつきから聞こえる歌声は、必要の無い部分で音程が上がったり、途中で途切れたり、なんというか……正直、微妙としか言いようがない。それも全体的なものではなく、個人個人で不調な部分があるのが聞き取れる。まあ、誰かは離れすぎているから特定できないけど。それに耳を傾けつつ、音源である場所に歩いていくと、そこはAクラスの教室だった。

「相変わらず広いなあ……」

などとぼやきつつ、高級ホテルのような環境の教室を覗き込んでみると、そこにはピアノを弾いている霧島さんと、We are The Worldを歌っているAクラス生徒が数人いた。よく見れば、歌っている人の中には見知った顔が入っていた。

霧島さんが僕の事に気付いたのか、ピアノを弾いていた手を休めて僕のところに歩み寄ってきた。

「……吉井、どうしたの？」

「職員室に預けてたものを取りに行つた帰りに、We are The Worldの曲が聞こえてきてね、気になつたから来てみたんだ」

霧島さんは成る程、というと僕の周りを見渡す。
どうしたんだろう、などと野暮な質問はしない。これは彼女にと

つては重要なことなんだから。

「あー、雄一なら教室にいるよ。学園祭の準備でね」

「……せひ、残念」

「今度雄一にあつたら言つておくれよ。霧島さんが寂しがつてゐるつて」

「……ありがとひ、吉井はいい人」

「それほどでも、じゃあ…練習頑張つて」

「……吉井達も、頑張つて」

霧島さんの言葉に手を振つて応えながら、僕はFクラスの教室に戻つた。

「ただいま」

「あひ、おかえり、アキ」

「美波、教室での出しも……あれ?」

教室に戻つた僕は、一瞬目を疑つてしまつた。

目をこすつて再度確認してみる。

まず最初に目に入つてくるのは、相変わらずの劣悪な環境
御座とみかん箱に、ボロボロな天井、隙間風が入る壁
に置かれて
いる教室、そしてみかん箱の机で窓の外を見ながらため息を吐いて

いる女子……フロイトには姫路さんに美波を一瞥してから周りを見渡してみても……。

「なんで教室に人がほとんどいらないの?」

「あれだよ、アキ君」

なのはがそう言つてやや呆れたような口調で窓の外を指差す。窓の外は調度グラウンドが見下ろせる位置にあって、そこで何が行われているかといふと……。

「プレイボール!」

野球が行われていた。

さすがはFクラス。学園祭の準備期間だといふのに、まったく真面目にやる気がないみたいだ。

しかも。

「さあ、来い!ハ神!」

「ふつ、勝負やで!須川君!...」

「お前の球なんか、場外に吹つ飛ばしてやる!...」

「言つたな……その言葉、後悔させてやるで!...」

「負けるなーはやで!...」

僕がやる気を出して学園祭の準備をやろうと思つてゐる理由の中
心人物であるはやてと、僕の考えに賛同して、力を貸してくれてい
る協力者の、ヴィータまでも一緒に参加していた。

「なんだと……」

思わずどこかの剣製の男の口癖を呟く僕。

今から呼び戻しに言つても僕なんかじや力にならないだろうし…
どうすればいいんだろ?……。と、窓の外で行われている野球か
ら目を離さないで思案していくときだった。

キヤツチャーである雄一が、ピッチャーのはやてに何かサインを
出していた。

ちょっと気になつたので、僕の近くに置かれているムツツリーー
のみかん箱の中から、双眼鏡を取り出してサインを見てみる。

雄一とは長い付き合いだし、サインの内容ぐらい解るだろう…え
ーっと内容は……。

『次の球は』

ふんふん。

『カーブを』

カーブ、を?

球種の指示だけじゃなくて、カーブの軌道も指示するのかな?

『バッターの頭に』

「「それって反則でしょ(やひ)ー?」「

思わずつっこんでしまった。

たしかにそれならバッターに打たれる事も無いけど、なにか違う気がする。

しかし指示を出した雄一は特に気にする事も無く。

「遠慮するな、来い！」

「遠慮するつちゅーの！」

立ち上がってバッターの頭の後ろにミットを構えていた。それも特に悪びれたような様子もなく、平然としている。

雄一、相変わらず面の皮が厚すぎる……一応管理局員なんだから、もうちょっと悪びれてほしい。

ため息を吐いて双眼鏡を外した瞬間、どこからか怒鳴り声のようなものが響いてきた。

「「貴様ら、何をやつてるか！」「

あつ、僕が行くまでもなかつたみたいだ。

怒髪天をつくばかりの勢いで僕らの担任、鉄人 別名、西村先生と、副担任のシグナムが、校舎内から走ってきた。あの勢いだと、確実に全員鉄人の鍛え上げられた体とシグナムの精錬された剣技でボコボコにされるだろうなあ……。

「げつ！鉄人！！」

「げつ！劉備！！」

「誰が鉄人だ、八神！」

「誰が三国志の英雄だ、坂本！」

二人して担任と副担任のあだ名を叫びながら逃走し始める。ちなみに最近になつてだけどシグナムは劉備と呼ばれ始めたみたいだ。

鉄人の怒号と、シグナムの凛とした一声が響くたびにクラスメイトの悲鳴がグラウンドに轟きまくる。やれやれ、眞面目にやらないからこいつた日にあるのに……普段、僕があっち方面にいるって言つことは置いておこひつ。うん。

「おい、鉄人！俺達をこんなところで追つてていいのか！？」

「この声……須川君？」

「どういひことだ、須川！」

「どうしたんだろう……今更悪あがきなんて見苦しいよ？

「主犯である吉井はとっくに校外に逃げたんだぞ！」

あの野郎、僕を人身御供にしたな！？

人を簡単に斬り捨てるなんて、なんて奴だ！さすがは異端審問会会長様だよ！

「どうか須川、お前の言いたいことは解つた

「解つてくれて何よりです、鉄人」

鉄人は神妙そうな表情で頷いていた。鉄人の表情を見てか、周りのクラスメイト達もどこか安心しきつたような顔になつていた……

けど。

「お前がどうしようもないバカだと解った！！」

言い切つて鉄人は須川君の頭を齧づかみにして空中へと持ち上げた。

須川君の悲鳴が響き渡る。あれつて見た目に反してもの凄い握力で握られているから痛いんだよなあ……うん。

『て、鉄人！？一体何を……』

「バカ者共が！吉井ならさっきまで職員室でクラス発表のことについて俺と話をしていたんだぞーー！」

『『『そんなバカな！？』』』

クラスメイト達の絶叫が響き渡る。

そう、僕はついさっきまで鉄人と一緒にクラス発表の事について語っていた。しかも証人は僕と一緒にいた鉄人だから、僕を犯人に仕立て上げようとしても無駄なんだよね。

『騙されるな鉄人!』

『それはきっと吉井に似た誰かだ！』

『あの頭の悪い吉井がそんなことをするはずがない!』

酷い言われようだ。

「黙れ!お前らに吉井を批判する資格などない!」

シグナムの一喝によつて黙る面々。美人が怒るので怖いもんね。
「八神先生の言つとおりだ!さつさと教室に戻れ!!あのバカな吉
井でも、しつかりと眞面目にやつていろんだぞ!…」

フォローになつていらないような気がするのは氣のせい?
魂まで届きそうな鉄人の恫喝を受けて、彼らはしぶしぶ教室へと
戻つていった。

「それじゃあ、押し戻されてしまつたし……ひとつ出し物について
決めようや」

そういうて実行委員を任せられたはやでが教卓の前に立つてゐた。
こういつたことは代表である雄一がやることなんだけど……あいつ
め、はやでに実行委員を任せると同時に自分はさつさと横になりや
がつた……一応、僕がやろうと思つていることについてちゃんと話
しておいたつて言つのに……!…

はあ、しようがない……あとであいつに発破をかける方法でも考え
ておこう。

ちなみに僕は書記を任せられてゐる。こういつたことではやでに協

力できるのなら、出来る限り僕はやろうと思つてゐる……彼女の家族を殺したのは僕だから、出来る限り力になつてあげないとね……。

「……」
「うと、暗くなつちゃいけないよな。気持ちを切り替えて始める」と。

「それじゃあ、ちゃつちやと決めよつや。クラスの出し物でやりたいと思うものがあれば、挙手頼むぞ」

はやてが告げると、何人かが手を上げた。全員がやる気なしつて訳でも無さそうだ。

「はいっ、康太君！」

「…………〔写真館〕」

「…………なんか危険な香りがするんわ気のせいやろか？」

はやてが若干ひきつった様子で呟く。

確かに女子からしてみればムツシリーネの『写真館は嫌なのかもしない。けれど僕ら男子としては宝石箱のような空間だ。犯罪臭がプンプンするけどね。

「アキ君、一応候補やから書いてくれへん？」

「了解」

そういう黒板に書こうとしたけど、はやてがちょっと待つてと言つて止める。

「どうしたんだろ？」「

「アキ君、この際やからついでにタイトルも決めといて。時間短縮
『』

「えつー?」

それって…つまり僕のネーミングセンスが確かめられるんだよね?

「頼んだで。ほれ、次の人〜」

ぐう!反論は認めないつもりか!!
しようがない…適当に浮かんだ名前を書くしかない……これでどうだ!

【候補?】写真館『宝物庫』

「横溝君」

「ウエディング喫茶?それってどうの?」

「ウエディング喫茶?それってどうの?」
「ウエイトレスが、メイド服とかじゃなくてウエディングドレスを着ているんだ」

中身は普通の喫茶店だけど、これはこれで結構面白いかもしだい。

さてと、さっと名前を書いておこう。さつきのは考える時間が少なかつたけど、今度は多少マシなはず。

【候補？ ウエディング喫茶『Mariage Cafe』】

うん、我ながらナイスネーミングセンスだ。
それにしても短いチョークだなあ。書きにくくてしょうがないよ。

「はい、次」

「はい！」

「須川君」

次は須川君か…もしアイディアがろくな物じゃなかつたら…その時は楽しみにしててくれ須川君。僕の愛剣を使って頭が割れる痛みと同時に素晴らしい世界へ君を誘つてあげるよ。

「俺は中華喫茶を提案する！」

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようつていう魂胆なんか？」

「いや、違つ！俺の提案する中華喫茶は本格的な烏龍茶と、簡単な飲茶を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼げりつていうワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるとこつ

「

な、なんかよく解らないけど、相当やる気みたいだ。

とりあえず聞き流しながら名前でも考えておこいつ。ええと、中華
喫茶だから……よし、これで行こいつ。

【候補？ 中華喫茶『老飲飯店』】

Fクラスの雰囲気から、中国の老舗って感じに見せれば大丈夫だ

よね。

とりあえずこんなところかな……なんて思いつつ、振り返った瞬間。

「バン！」

大きな音が響く。はやてが教卓を思いつきり叩いた音だ。

「一体どうしたの？」

「甘い！」

言い放つと同時にやては強い視線でみんなを見据える。この感じ…まるで試召戦争の時の雄二みたいだ。

「みんな…さっきから甘すぎるでー…こんなんじや他のクラスと然して変わらんーーー！」

「や、そうなの、はやて？」

美波が若干引き気味に言つけど、はやては大きく頷くと黒板を叩きながら熱弁を振るう。

「ええか！来客してくる人はみんな、刺激を求めてるんやー…この学校は、召喚獣システムを導入している唯一の学園！来客してくる客の数は半端やないーーー！」

たしかに…文月学園はそれがウリみたいなものだし、来客する人も、召喚獣というおカルトなものを間近で見ることが出来るのを楽しみにしている人も多いだらう。

「じゃあ、もっと凄い出し物にするんですか？」

姫路さんが首を傾げながら質問していくけど、はやはーヤリと笑うと告げる。

「いいや、私らは『』であえて『癒し』をテーマにしたものにしてみようと思つたや」

「「「は？」」「

「クラス一同、思わずポカンとしてしまつ。僕も同じように呆然とはやてを眺めてしまつ。

はやての言葉は明らかに矛盾している。

来客してくる人たちは、みんな召喚獣システムという未知な物に刺激を求めてここに来る。

それでどうして癒しなんていう刺激とは対極なものを？

「みんなの疑問も当然や…けど考えてみるんや、新学期から少し経つた時期は、誰もが疲れ始めてくる季節なんや」

「どうじつけど？」

「新しくスタートした時期、勢いよくダッシュしたのはええけど、慣れない環境で頑張つたりしてると、どうしても疲れてくる。少しでも気分を変えようと、こういったイベントに行ってみたりするけど、それでも精神的に疲れてたりする人が必ずいるはずや」

たしかに……心機一転、頑張るぞ！みたいな感じで頑張つてみたけれど、人間っていうのは正直な体をしているから、どうしても疲れが出てくる人がいるはず。今は学生っていう身分に『一時的』に属してはいるけれど、僕らだって社会人。解らなくはない。

「人間にとつての最大の癒し……それは睡眠。眠る前や眠りから覚めた直後つて、気持ちええやん?」

はやての言葉にうんうん、と納得するクラスの面々。
たしかに、まどろみの時間つて、じつじょもなく気持ちいいんだよね。

「私が提案するのはそんな癒しを兼ね備え、尚且つ刺激を求めるに来たお客様も満足出来る模擬店なんや……そのまま……」

勿体付けるようにはやてが一呼吸置く。
思わず生睡が出てきて、それを「クリ」と飲み込む。一体どんなものなんだろう。

「題して、パジャマ喫茶やーーー！」

……………はい?

パジャマ喫茶? それって……ただ単にウエイトレスがパジャマを着るだけの喫茶店なんじゃ……。なんて思こうとした時だった。

「…………なん、だと……（ブシャアアアアアアアアアアアアアアアアーーーーー）」

ムツツリーーーが何を想像したのか、鼻血を噴き出してその場に倒れこむ。

えつー? 今の会話にそんなに刺激が強そうなものあつたっけ?

「それって単にパジャマを着ているウエイトレスがいるだけの喫茶

店なんじゅないの?「

僕と同じ疑問を抱いた美波が、鼻血を噴き出して倒れているムツツリー一を傍目に見ながら、謝しげにほやてに質問してくる。

けれどはやはてはチツチツチと最近では若干懐かしく感じられるアクションを取ると、胸を張つて告げた。

「ええか、眠る前つてこつのは、一番心を落ち着かせなきゃいけない時間や……そんな時間带つて、大抵はパジャマやう。」

「まあ、わづだなび……」

「室内を少しだけ薄暗くして、ろづそくのよつな灯りこぼのかに安心できるよつな香りのアロマセラピーを使い、ほつと一息つけるよな紅茶やココアを出したり、お菓子みたいな寝る前に少し食べておきたいなあ~つていうものを出してみたり、そんなうつとりと落ち着けるよつなひと時をお客様に味わつていただきくんが、私の出す『癒し』や」

「へえ~…なんか、いいかもしれないわね

「そうですね。それにパジャマですから、衣装代もあまりかかりませんし」

たしかに費用もあまりからないし、浮いた費用を別の場所に回せるから、これはこれでいいのかもしれない。

「ちなみに私が着るパジャマやけど……」

「…………（カチャカチャ！）」

はやての言葉に反応して、ムツツリーが起き上がりてカメラの調整を始める。相変わらず「うごめ」だけは早いなあ……あとで交渉せねば！

ムツツリーとどんな風に交渉するかを考えていると、はやてが「んでもない」と告げた。

「聞いて驚き、大きめな男物セーター や！」

「「「「なんだとあー? ?」」」

△クラス男子全員が驚愕の声を上げる。

はやてみたいな美少女がぶかぶかのセーターを身に付けるだなんて……なんて、なんて素晴らしい、いやいや、けしからんことなんだ！――

「そりに驚きい……そのセーターは……ネックなんやで！」

「「「ぐはつ……」」

ぐお……今の言葉で何人かが倒れこんだぞ……僕も今の言葉は危うかつた。これはますますムツツリーとの交渉を本格なものにしなければ――

だがはやは更に追い討ちをかけてくる。

「ちなみに、ズボンはないで」

「「「「「」」」」」」

Fクラス男子、はやての『突き穿つ死翔の槍』^{ゲイボルグ}によつて見事に心臓を貫かれ、その場に崩れ落ちる。

ちなみに僕はなんとかこらえる事が出来た。
はやて……なんて恐ろしい娘！！

けれど今の発言でなのはやフュイト、姫路さんや美波は若干だが不服そうな雰囲気になつていた。まあ、たしかにこういつたイロモノ路線は女子にとってあまりいいものでもないよね……なんて思つてたら、はやてが再びとんでもない発言をした。

「ちなみに、アキ君には執事服を着てもううで」

僕に向かつて……つて、なんで！？

「はやて！？なんで僕が執事服なんて着るの！？」

「アキ君って結構、執事の才能あると思つんや!」

「何を根拠に!? それに、執事服なんて僕に似合うわけが……」

「はれ」

力チャリ、という音と共にやがて僕にメガネをかけてくる。視界が可笑しくはならないから、度が入つてない伊達メガネみたいだ

けど……突然、何を？

……なんて思つてたら、クラスメイト、特に女子達の視線が僕に集まつてくるのを感じた。えつ？…ビリしたの？

「あ、明久……」

「よ、吉井君……」

「あ、アキ……」

みんなどうしたんだろう？

あ（）に手を添えて考へてみると、息を呑む氣配が伝わつてきた。本当にどうしたの？

「（どや～）のインテリメガネ＆執事服姿のアキ君…見てみたいと思わへんか！？」

「…………」「…………」「…………」「…………」

女子達が一斉にはやての言葉に賛成してきた。

えつ？…マジで僕、執事服着るの？

。

「はあ

ため息を吐きながら黒板にチョークでパジャマ喫茶を書く。まあ、途中からおかしな流れになつたけど、とりあえず癒しをコンセプトにしているのは間違いないだろうし、それなら……。

【候補？ パジャマ喫茶『Good Night』】

よし、これで大丈夫なはずだ。

と、書き終えたところで、筋骨隆々のじつに身体と、それに見合つた顔を持つ男と、凛とした女騎士の女性が現れた。

「みんな、清涼祭の出し物は決まったか？」

先ほど、僕以外の面々を追い掛け回したFクラス担任と副担任、鉄人と劉…シグナムだ。

「今のところ、候補は黒板に書かれてある四つやで」

【候補？ 写真館『宝物庫』】

【候補？ ウエディング喫茶『Marriage Cafe』】

【候補？ 中華喫茶『老飲飯店』】

【候補？ パジャマ喫茶『Good Night』】

「真面目にほやつてこらめうだな

「ちなみに、これからこの四つの中からどれがええか多数決で選ぼうと思つてゐるところだ

はやははそりつて決を採る。とはいっても、さつきの流れからして、なんとなくだけど結果が見えているような気がする。

【パジャマ喫茶『Good Night』】全員

満場一致でパジャマ喫茶がFクラスの出し物として選ばれた。

まあ、当然だよね……選ばれた瞬間、はやてはニヤリと笑うのを僕は見逃さなかつた。

はやて……まさか計算付くでこいつるよつに事を運んだつていつのー？おかしい、彼女の頭とお尻から狸の耳と尻尾が見える……。

「クラスの出し物は決まったようだな……それでは吉井、クラス発表にお前が考えていたものを発表しろ」

「あっ、はい！」

鉄人の言葉に反応し、僕は壁に立てかけているギターケースを手にし、みんなに見せる。

深呼吸をしてから、僕はゆっくりと告げた。

「僕らFクラスのクラス発表は、バンドライブにしようと思ひます！」

僕は今まで考えていた案を堂々と宣言した。

第十話（後書き）

次回はもう少し早めに投稿したいです…

第十一話（前書き）

今回はオリジナル歌詞が登場します

第十一話

清涼祭の準備が始まつてから三日目。

僕らFクラスは着々と準備を進めていた。

この前までどうやって鉄人の日を逃れて遊びに徹するか、なんて考へてる奴らがいたけど、『利益を出して設備をよくする』という言葉にやる気を出したみたいで、みんな率先して準備を手伝つていた。

まず教室を綺麗にする。これが一番大変な作業だけど、汚い喫茶店だとお客様も入つてこないだろうから、一番やつておかないといけないことだ。

店内の間取りだけ、ここではなのはがその腕を振るつてくれた。喫茶店を経営している親を持つ彼女だからこそ、どこにどんな風に配置すればお客様が満足できるなどを熟知しているので、とても役に立つてくれた。

そして僕らはといふと……。

「えつと、メニューはコーヒーにカフェオレ、ココアにジュースに……あと、緑茶かな？」

「せやな、寝る前に飲むものは基本的にそんなとこりやう」

「…………食べるものは、大体こんな感じでまとめてきた」

「おつ、サンキュー やで康太君」

僕とはやで、そしてムツツリーの三人でメニューを作成していく。どうやら、料理が得意という理由で僕ら三人が選ばれたらしく。ちなみにこの組み合わせは姫路さんは絶対に厨房に入れさせない

ための布陣もある。清涼祭で食中毒などとこいつ悲しい連鎖を生み出すわけには行かないから、ここで断ち切らせてもらおう。

ただ一つ、今の僕らの格好がなぜか……。

「「なんで、執事服?」」

なぜか僕とムツツリーは執事服を着せられていた。

「細かい事気にしたらあかんで、一人とも!」

そう言つてバチ「ーン!」とウイーンクするはやて。

というか、どこからこんなもの調達してきたんだはやて。

「すずかちゃんの家からや

はやての言葉に、僕は思い出す。

かつて、僕と一緒に遊んでくれた一人の女の子を。
月村すずか。

アリサ・バニングス。

遊んでいた時期はとても短かったけど、それでも僕の思い出の中にはしつかりと刻まれていた。

二人とも、元気かな……。

といふか。

「ねえ、なんですかが執事服なんかを貸してくれたの?」

これが気になる。なんで僕とムツツリーなんかに執事服をわざわざ「着も貸し」「えてくれたのかが。

するとはやはては僕の肩にポン、と手を置くと。

「面白やうやからに決まつてゐやー！」

「そんな理由でー?」

忍さん… 円村家現当主はそんな理由で僕らに執事服を貸し与えたつていうのー?

そりにはやは一ヤ一ヤしながら僕らにとんでもない事を告げてきた。

「安心し、しつかりと鮫島さんが一人に執事といふのはなんたるのか教えてくれるらしいから」

「はいー!?

鮫島さんー? 鮫島さんって… アリサの家の執事だったよねー? あの人指導するつて… マジで?

「週末には迎えが来るはずやから、一人とも、きつちりと教えてももらひんやで?」

はやての言葉に、僕は言葉を失つてただ呆然とするしかなかつた。僕が呆然としていたとき、後ろからチヨンチヨンと叩かれ、振り返るとそこには皿の上に箱を持ったムツツリーーがいた。

「…………試作品」

「あー、ムツツリーーも持つてきたんだ」

「………… も、といひ」とは

「僕も持ってきたんだ。特性ケーキ」

「ほほう、それは楽しみやな」

キラーンという擬音が聞こえてきそうなはやでに苦笑しながら、僕とムツツリーーはちやぶ台の上にそれぞれ作ってきたものを置く。

「…………チーズケーキ」

「僕はチョコケーキを作ってきたよ」

寝る前に楽しみに取つておいたスイートを食べる人は多いと思うから、今回はケーキを作ってきたんだ。

ムツツリーーのチーズケーキは真っ白な矩形に艶やかな赤いソースがかかった、いかにも高そうな雰囲気を持ったケーキだった。なんか見た目からとても美味しそうな雰囲気だな…。

対して、僕のケーキはティラミス風味の形状をしたチョコケーキで、濃厚なチョコの質感と食感を楽しんでもらえるように作った特性ケーキだ。

「それじゃあ、試食どうぞ」「わいわい」

「…………自信作」

そう言つて僕らは姫路さんや美波、なのは、フェイト、はせて、ヴィータ達女性陣に、雄一、秀吉にもついでに手渡しておべ。で、評価は……。

「美味しい…チーズケーキは濃厚な味わいで…はう…………」

「ホント……チョコレートケーキは少し苦いけど、でも口の中に広がるこの風味が……」

「美味しい……これに香りが良い紅茶を付け足すと、もっといいかもしないよ」

「あつ、それいいね。なんだかホッとする組み合わせかもよし、かなりの好評価だ！」

「実は私も作ってきましたや。とはこいつもつこわいやけどな」

やうこりとはやは木のお盆を取り出す。その上には六つの胡麻団子が乗っていた。

「それじゃ、召し上がるれ」

「「「いただきます」」

姫路さんと美波とフードイトが皿の上に乗っている胡麻団子を一つずつ口に運ぶ。

「わあ……じつちも美味しいです」

「ホント……外側がカリカリで中はモチモチしてゐる」

「甘すぎないところがいいなあ」

と、大絶賛。やっぱり女の子なんだなあ。甘いものが大好きみたいだ。三人とも。

「それじゃあ、僕も一ツ」

「呑じ上がれ

団子の一ツを手に取り、口に運んで咀嚼する。

「ふんふん、外は「ロココロ」であつながら中はネバネバ。甘すぎず、辛すぎず、ねつとりと喉を焼き尽くす酸性の痛みがひとつても

『べば』

僕の口からありえない音が漏れた。そして田に映るのは僕の十六年間の日々。辛いことや悲しい事もあったけど、それなりに素晴らしい人生を……って危なっ！これって走馬灯じゃないか！！けれど僕の身体は動いてくれない。まるで金縛りにあつたようだ……。

「どうしたのじゃー明久ー？」

「八神！それは本当にお前が作ったのものなのか！？」

秀吉と雄一の絶叫が響く。あつ…やばこ、段々と意識が……。

「たしかに私が……つ！私が作ったのは二つーなんで増えどんごや

「！」

「症状から察するに、姫路の作ったものじゃな

「危ねえ…確立一分の一のロシアンルーレットじゃねえかー！」

「…………取らなくてよかつた」

「おー、しつかりしろ明久！まだ死ぬには早いぞ……」

ヴィータの叫びが木靈しながら、僕はゆっくりと意識を失った。

そして教室の改装が大体済んだ頃だった。

「じゃあ、みんなに考えてもらつた歌詞を発表してもいいつよ

なんとか蘇る事が出来た僕は、クラス発表に向け作つた歌詞をみんなに手渡そうとしていた。

最初はみんな色々戸惑つてたみたいだけど、今では割とノリノリで協力してくれていた。

ちなみにバンドのメンバーは、ギターは僕、ドラムは雄一、キー
ボードは秀吉、ベースはムツツリー二が担当してくれている。

そしてボーカルはフェイトとなのはの一人に任せることにした。
その時なぜか姫路さんと美波は僕に怨嗟の視線を投げかけてきた
けど……。

ちなみにこのメンバーになつた理由は、僕と雄一は前からギター
とドラムを使って適当にやつていた時期があつて、秀吉は演劇部で
使う機会があつたから、ムツツリー二は紳士の嗜みとかで覚えてい
るらしい。ギターをやることが紳士の嗜みなのかどうかはこの際置
いておくけど。

「それじゃ、まずは僕はみんなに『ペー』した歌詞を見てもいいつね」

「そう言って僕はみんなに『ペー』した歌詞を手渡していく。

ロックとバラードの二つだけしかないけど、それでも会心の出来
だと思った二つを持ってきたから大丈夫だと思つ。
まずはバラードの方からみんなに配つてみる。

『Same days』 作詞 吉井明久

どうしたの 疲れたのかい それならそこで休んでいかないか
旅の途中で休む僕ら 缶コーヒー片手に君は語りだす
私たちはどこまできたのでしょうか それに答えられる僕はいません
ただ黙つて俯く僕に 君は何を思ったのだろう

ああ そういえばあの時も同じだった

答えが出ずに俯いた僕と 答えが出せた君 君がまぶしくて僕は
また俯いた

Same days あの日からずっと成長できない僕
いつまで経つても前が眩しそぎる だけど足元見ないと怖くなる
君が前に立つてよつやく前が見えた気がした

口にした缶コーヒーは少しだけ苦かった

どうしたの 道がわからない 地図を片手に立ちつくす僕ら
目の前の道で 排気ガスを出して走る青い車を見送った
私たちはどうすればいいのでしょうか 不安な君の手を僕は握る
本当は不安で一杯な僕に 君は何を思ったのだろう

ああ そういえばあの時も同じだった

暗いトンネル潜る時 君は震えながら 僕の腕にしがみついてい

たね

Same days あの日からちつとも変わらない君
怖がりな君はいつも僕を頼つてたね それが少しだけ嬉しいんだ
君が凄く近くに感じられたから

青い車を追いかけるように僕らは歩き出す

いい加減 そろそろ家に帰らないか
諦めモードな僕だけど 本当はもっと君と一緒に頑張りたい
もつと頑張りたいから 重い身体を引きずつて 君はまた歩き出す

足元がおぼつかないよ 本当に大丈夫なの

それでも君は歩き続けている

そんな君に少しだけ苛立つて 少しだけ羨ましくなる
立ち止まつた君は 寂しそうな目で僕を見てた

ああ そういえばあの時も同じだつた

ボロボロな君に 僕は肩を貸してあげて歩いていた

Same days あの日からちつとも変わらない僕ら
無理しすぎる君と その隣で支えてあげる僕
気付けば隣にいる僕ら

Same days あの日から変わってない僕ら
それでもいい 同じ道を歩いていた僕らは 少しだけそう思えた
気がした

「へえ… やるじゃねえか、明久のくせに

「ホント… アキが作ったのじゃないみたい」

「す”いや、アキ君ーこれ、ものす”くいい歌だと思つよー」

「そうですね… なんだかじんわりと優しい気持ちになれます」

「ありがと、みんな」

うん、皆からいい印象を得ることが出来たみたいだ。僕も会心の出来だと思つしね。

もう一つ… ロックの方も中々の評価を得ることが出来た。

「ふつ、まだまだだな。吉井」

「へつ？」

突然須川君が不敵な笑みを浮かべながら立ち上がった。どうしたんだろう？

「吉井、バカなお前が頑張った事は認めよつ…だが…俺の最高傑作には遠く及ばないということを思い知らせてやる…！」

言いながら須川君はコピーした歌詞を僕らに配る。あれだけ大見得切つたんだ。きっと須川君もそれなりの作品なんだと思つ……。

「見せてやるぜ…俺のソウルが宿つた歌を…！」

『モテ王』 作詞 須川亮

HEY HEY 僕はMOTE王！須川DA ZE！
今日も今日とて 可愛い貴女に告白さ
返事はいつも同じなのさ

KISS KISS！俺にKISS！

可愛いあの娘のハートは俺だけものさ もちろん綺麗な君もね
KISS KISS！君にKISS！
俺の心は誰のものかって？ それはね 君たち美少女だけのもの
なのぞ

「「「却下」」」

「BAKANA！？」

満場一致で僕らは須川君の歌詞を一斉に破り捨てた。
正直これは酷すぎる。しかもこれ、ただ須川君の願望が書かれた
だけだと思つ。

「ま、待て！なんでだ！なんでこれが却下されるんだ！？」

「いや、これは却下されて当然だと思つぞ」

「せやせや、こんな歌詞でお姫さんの心を鷺？みにできるわけない

やひ

「バカな！？俺はしつかりと鷺？みされたぞー！？？」

「妄想の中の自分に酔つてんじゃねえよ」

雄一とはやでが冷めた目で狼狽する須川君を見据える。自分の歌詞を一番だとは思わないけど、さすがに須川君の歌詞は採用されるはずがないと断言できる。

「な、なら、いひなうどうだー！」

そう言つて須川君は鞄から一枚のコピー用紙の束を差し出してくる。おそらく、これも彼が作った歌詞なんだろうけど……正直、不安でしようがない。

そう思つていたんだけど……突然、周りにいた横溝君や近藤君、福村君が須川君の歌詞を読んで驚愕の声を漏らしていた。

「す、須川…あんた、これ！」

「ああ…それは俺達が創りあげた魂の一品だ」

「まさかこれを持つてくるなんて……」

「須川…あんたあ、漢だよー！」

な、なんかもの凄く感動していた。

どうやらあの作品は、須川君だけでなく、彼らも制作に加わったみたいだ。

よかつた。いくら須川君がバカだといつても、他の人がそこに加

われば、いい加点になるはずだ。三人寄らば文殊の知恵、つていう
しね。

須川君は誇らしげな顔でコピーした歌詞をみんなに手渡していく。
さて、どんなものなのかな……。

「さあ……感じてくれ。俺達のソウルを！！」

「ワン、ツー、スリー！」

横溝君の合図で彼らは突然歌い始める。
や、別に歌わなくても……。

『サンキュー・青春』

詞 須川亮と異端審問会上級会員

須川亮と異端審問会上級会員

歌 作

(YAH・YHA青春! SAY SAY青春!) 須川
(夏服冬服スク水ブルマスパツツジャージ!) コーラス

ちょっとそこで教科書読んでる君
そんな本読んでないでこつち見てよ

外は夕立 傘がない

一緒に帰ろう 濡れながら

イエイ! 最高! 濡れるつて青春! 隣の娘のワイシャツが透けてる

ZE!

おつと それは指摘しない こつそり記憶とカメラに収めとく

オオ サンキュー 青春 ありがとう 青春

肌の上にあるチョック柄が最高だ

廊下で異端者発見！急いで連行せねば！

学校でのいちやつき行為など許すまじ

俺とは愛を捨て 哀に生きる

それを忘れるな 処刑制裁だ

イエイ！最高！ボコるつて最高！血の雨が教室に降り注ぐＺＥ！
おつと 女子が怖がつてる だけど覆面被つてるから無問題もうまんたい！

オオ サンキュー 青春 ありがとう 青春

携帯のメールアド消すのを忘れるな

◀インストロ ▶

「異端者には死を！」

「死を！死を！死を！死を！死を！」

うわやつべえ 鉄人が来る

そろそろ逃げないと補習室行きだ

オオ サンキュー 青春 ありがとう 青春
まだまだ楽しい事がある青春 サンキュー

(ＹＡ・ＹＨＡ青春！ＳＡＹＳＡＹ青春！) 須川

(夏服冬服スク水ブルマスパツツジャージ！) コーラス

須川君達のリサイタルが終わる頃には、僕のＨＰはほとんどに近かつた。なんだろう、今ならデバイスの補助がなくてもスタートライトブレイカー並みの魔法が使えるような気がする。

「みんな、どうだった？」

俺、やり切りました。なんて清々しい笑顔を見せる須川君に、僕は思わずイラツと来てしまった。

無言で立ち上がると、配られた歌詞を無言で回収し始める。回収しているとき、ほとんどの人が僕のやっている事に口出しあはしなかつた。

全ての歌詞を手元に回収し終えると、僕は雄一の下へと歩み寄る。

雄

גַּתְּוָן

名前を呼んだだけで雄一は僕に何を渡せばいいのかを察してくれたみたいだ。

雄一は鞄の中からハサミを僕に手渡し、僕はそれを受け取ると歌詞の束を床に置いて、その束の上に情け容赦なくハサミを突き立てた。

「ああああああああああああ！－吉井、何を！？」

須川君の絶叫が響き渡るけど、そんなものは無視して僕はそのままザクザクと何度も何度もハサミを紙の束にブツ刺していく。うん、いい気分だ。

「明久、トドメだ」

「了解」

雄一は教室の隅に設置されている昔懐かしの石油ストーブの近くに置かれていたマッチを投げ渡してくれた。

僕はマッチを擦ると火がついたそれを、歌詞の束の端から着火していく。

「　「　「　「あ　あ　あ　あ　あ　あ　…」」

須川君たちが何か言っていたような気がするけど、無視する。燃え上がる紙の束を一瞥すると、そのまま窓の外へと放る。黒い塵と化した紙の束は、そのまま風に乗ってどこかへと飛んでいった。うん、いい気分だ。

「さて、次の歌詞をお願い」

教室の隅で互いの肩を抱き合つて泣き喚いでいる須川君たちを無視し、僕らは清涼祭の準備を進める。あれ?なのは達が若干だけど引いている気がするけど……まあ、いつか。

(さつきのアキ君、もの凄く怖かったよね)

(無言で紙の束を何度も突き刺すつて……ちょっと獵奇的やつたで……)

(なんか明久の奴、ちょっと変わったよな。悪いほう)

(…)

何を言っているかは聞こえなかつたけど、とりあえずスルーしてさつむと進めよう……と思つたけど、その時に終了のチャイムが鳴り響く。どうやら今日はここまでらしい。

……結局、今日はあまり進展もないまま解散。こんなことで、本番に間に合つのかどうか、ものすごく不安だ……。

第十ー話（後書き）

感想を書いてくださる方々、ありがとうございます！

今回は忙しそうで返信ができなかつたので、ここで感想を書いてくださった皆様への感謝と謝罪をさせていただきます。

いつも感想を下さり、ありがとうございます！そして遅れて申し訳ございません。

次回も楽しみにしてください！

第十 | 話（前書き）

じばりくぶりの投稿です！

第十一話

夜の街。

人気のない森の中で蠢く、奇妙な異形の数々。
そしてその異形の群れの中に突っ込んでいく……僕ら、魔導士。
久々に僕はエネミー退治に外に出ていた。
でも今回は違うところがある。

それは、僕の後ろには仲間がいるということだ。

「ディバイン・バスター！！」

金色の杖の先端に赤い宝石を持つレイジング・ハートを構えた
なのはが、凄まじい威力を持つた桃色の魔力砲を放ち、黒い靄に赤
い光を眼のように携えた怪物であるエネミーを貫いていく。

「バルディッシュ」

『Y e s s i r . S c y t h e f o r m S e t u p .』

「はああああああああああ！」

鎌状になつた漆黒の杖、バルディッシュを構えたフェイトが、金
色の刃でエネミーに向かつて踏み込み、その漆黒の身体を切り裂く。

「イージス！」

『Y e s 坊ちゃん！A r r o w f o r m S e t u p 』

「坊ちゃんは止めろって言つてるだろ？が……」

雄一がトンファー形態だつたデバイスを変形させ、『』に変える。
……それにしても、相変わらず雄一って自分のデバイスに坊ちゃ
んつて言われてるんだよなあ…似合わないのは解つてるけど、最近
ではそれに慣れてきている自分がいるから驚きだ。

「穿て…螺旋！」

雄一が呟くと同時に、雄一の手元にネジのように螺旋を描く魔力
矢が生み出され、それを雄一は番えると、弦を引絞つて一気に矢を
放つ。

『twist flash』

ギュン！という凄まじい音と一緒に捻じれた魔力矢が凄まじい速
度で空中に軌跡を描き、そのまま森の奥へと消えていく。

その後、凄まじい衝撃と共に爆音が森の中に響いた。

暗い森の中を閃光が闇を切り裂き、次いで木々が薙ぎ払われる爆
発が起きる。

一瞬、その轟音に耳を塞ぎそうになつたけど、それを堪えながら
目の前にいるエネミーを、フォルトで切り裂く。切り裂いた部位か
らエネミーは一気に黒い靄へと霧散していく。

それを一瞥すると、すぐに辺りの警戒に戻る。

今回の場所は森の中だから、まだ周りにいる可能性が高い…と思
つたんだけど。

「明久、今お前が倒したので終わりだ」

「え？」

雄一がそう言いながら空から地面に降り立つ。

いつたい何言つてるんだろ？……そんな根拠も何もない事を……って、雄一がそんなこと言つて詰ないか。

「雄一君、どうした事？」

なのはが小首を傾げながら雄一に質問すると、雄一は自分の田を指差す。

どうこう事だらう。ここに何かあるのかな？

「…おい、明久。俺の田に向かつて手を伸ばすな」

「え？、ここに何かあるんじゃないの？」

「んな訳あるか！？」

雄一が叫びながら僕に『』を構える。

ちょ、いくら非殺傷設定があるかといつても、この距離でせつまでの受けたら確実に入院するつて！

「はいはい、雄一君、さすがにそれ以上はストップ！」

「ちつ、運が良かつたな明久」

FH-イトに奢められ、憎々しげに咳きながら雄一は構えを解く。

……ふう、さすがに今のは本気で命の危機を感じたよ。

「アキ君、今のはアキ君も悪いんだから、ちやんと反省しなよ」

「うう、はい……」

なのはに怒られ、僕は頬をかきながらため息をついた。

うう、なのはの言つ事つて基本的に正論だから反論し辛いんだよ
なあ……雄一、後で覚えてる。

「……で、雄一の田がどうしたの？」

「ああ、俺の田は魔力を込めるとい、遠くまで見えるようになるんだ
よ」

「え……それは凄いや。

でもどこのくらいの距離まで見えるんだらう？」

その疑問に答えるよう、雄一はここから十数キロ、ぐらい離れて
いる位置にある鉄橋を指差して僕らの疑問に答えてくれた。

「……そうだな、あそここの鉄橋に使われてるボルトの数くらいなら、
この距離から余裕で見えるぞ」

「本当に？」

なのはが驚いた声を上げる。

僕とフェイトも、声には出さなかつたけど雄一の言葉に驚いてい
た。

「……からあの鉄橋までかなりの距離があるよね！？僕がここから
見ても、ただの赤い橋ぐらいにしか見えないのに、雄一にとつては
近くにある物と同じようなものにしか見えないなんて！

「あれ？でも、雄一の今の格好を見てると何か思い出すような
……。

あ。

「アーチャー？（ヒュン）あぶなつー。」

僕の右頬に魔力の矢がかすめる。

い、今のかわさなかつたら眉間に深々と刺さつていたよね！？いくら非殺傷設定があるつていつても、それで怪我しないつて訳じやないんだよ！？

まったく、親友になんてことを…。

「次は右目だ」

僕は親友という訳ではないようだ。

三本の魔力矢を弓に番えた雄一の鬼気迫るような言葉に、僕は押し黙る。

人には触れられたくないものがあるんだ、これ以上余計な詮索はない方がいいだろう。雄一のためにも、僕のためにも。なんてバカやってたら、突然東の空から光が差してきた。山の頂から覗かせる暖かな光に包まれ、星が散りばめられていた群青の世界が、少しづつ蒼穹のものへと変化していく。

「もう朝になるのか…」

「そうだね…寝る時間は少ないけど、少しでも眠つておかない」と

僕と雄一の言葉に頷く一人。

さすがに学園祭が近くなつてきているこの時期だ。少しでも眠つて体力を回復しておかないと。

「それじゃあ、お疲れー」

「 「 「お疲れー」 」 」

そうこうして僕らはその森を去つていった。

「うわ……これは……

「いくらなんでも酷過ぎるよ……

僕とフェイトは、いや、この場にいるほとんどの人間が、目の前の惨状に絶句していた。

あれから数時間後、僕らはボロボロの教室を少しでもぞんざにかじよつと画策していた。

いくらなんでも古汚くて、健康にも支障をきたしそうな教室ではお客さんは入つてこない、といつ翠屋の看板娘であるなのはがそう言つたからだ。

で、早速力ビが生えたボロボロの畳を床から剥がしてみた結果が、これだ。

「畳が腐つてるよ……」

「これは酷いな

「…………健康に支障を起す可能性が高すぎやしない

目の前の惨状に、そろつて僕らは嘆息する。

いくら学力最低クラスのFクラスだからと言つて、健康に支障を

来たすよつた設備を教育機関が生徒にこんなものを提供してもいいのだろうか？

いくら学力重視の教育方針を取つてゐると言つても、最低限生徒の健康には気を遣つものだと思つし、教室の設備のせいで体調を崩して勉強ができませんでした、では本末転倒もいといつていいのだと思つ。どうしようか、と口を開こうとした瞬間。

「（吉井君、聞こえるかしら？）」

頭の中に響く、どこかで聞いた事のある声。
誰かが僕に念話で話しかけているんだと思つたび……この声、どこかで。

「あ

「（ひょっとして、木下さん？）」

「（ええ、そりや）」

木下優子。

秀吉のお姉さんで、僕らと同じ管理局の一員だ。
ただ戦闘向きではないそのうので、Hネミーとの戦闘には参加しないから、今まですっかり忘れて…。

「（吉井君？今、余計なこと考えなかつた？）」

「（滅相もございません）」

女の子の勘つて恐ろしこよね。

美波然り、姫路さん然り、どうして彼女達は自分たちへの事に關

しては「いつも鋭いのだろうか…女の子はエスパー？」

「（まあいいわ、ちょっと例のシステムについて話したい事があるから、誰か一人連れて、屋上に来てくれないかしら？）」

「（例のつて…何か進展でもあったの？）」

「（それにしても、これから直接話すわ。じゃ、五分後に）」

そう言つて木下さんは一方的に念話を切る。

例のシステムか…最近エネミーとの戦闘のせいで全然進展が無かつたから、ちょっと興味があるな。

さてと、誰を誘おうかな…ゲームとかだと、ここで選択肢が出るんだろうけど…現実はゲームみたいに進む訳ではないから、誘う人間はちゃんと決めないと。

なのはは…この教室をどんな風に改装するかで悩んでいるみたいだから、却下。

雄一は…そもそもここにいない訳だから、却下。

ムツツリー…姫路さんを台所に立たせないために外す訳にはいかないから、却下。

はやても同じ理由で却下。

ヴィータは…力仕事で大変そつだから、却下。
そうなると。

「フロイト、ちょっとといい？」

「ん？ ビーツしたの、明久」

フロイトに近づくと、僕は彼女にしか聞こえない距離で話しかける。

（例のシステムについて、進展があつたみたいなんだ）

（例の二で……それからどうしたの？）「

「（木下さんが僕とあと一人交えて、相談したい事があるみたいなんだ。だからちょっと屋上に一緒に来てほしいんだ）」

- (わがこた) -

よし、交渉成立。

さて後はどうやってこの教室から抜けれるか……

ただそれは。

「諸君、いいせいかだ」

「神聖なる、異端審問の場である……」

最も最低で最悪な解決策だつた。

「ちいさい」

舌打ちをすると同時に、僕は駆け出す。

次の瞬間、僕のいた場所に大量のシャーペンやらホールペンやら、コンパスなどの先が尖つたものが一気に床に降り注ぐ。

した異端審問会の面々。

「横溝、そこの吉井（雑）明久（種）の罪状を上げよ」

なんか突然須川君がどこかの金色の鎧をまとつた英雄王みたいな口調で語り始めたぞ……しかも僕、雑種扱い？

「はつ、白昼の、しかも教室でテスター^クロッサさん^ズの顔に近づいてせつぶ」

「ええい！ まどろっこしい！ ……要點をすぐに述べよ！」

「昔馴染みのをいい事に、テスター^クロッサさんにキスをしようとしました吉井明久^クが腹立たしくて仕方ないです！」

「つむ、いい言葉だ」

超誤解だ！！

たしかに周りのみんなに聞こえないように顔を近づけて話をしていたけど、他のみんなには僕らがキスをしているように見えていたの！？

「これはすぐに弁明しないと！」

「ち、違うよ！ 僕らはただ小声で話し合つてただけで！ …！」

「そここの者、吉井明久の新たな罪状を述べよ」

「へ？ 新たな罪状？」

「はつ！ 吉井明久は白昼、しかも教室で、それも神聖なる…」

「要点だけでいい、とつと申せー。」

「教室で堂々と逢引の約束をしようとして非常に腹立たしいです」

「つむ、良き言葉だ」

「どうが!?」

なんかどんどん風向きが悪くなっている気がする。

最近ではヴィーターが抑止力になつてくれてたけど、今彼女は教室を離れてしまつていて…マズイ、飢えた獣の群れが僕という餌に群がつてしまそうな勢いだ。

須川君はゆっくりと前に出て右手を掲げる。

「UJの神聖たる場で、その不敬は万死に値するぞ、雑種！」

ゆっくつと須川君達はそれぞれの獲物を構え始める。

その瞬間、僕は教室の外に向かつて駆け出そうとする…が、すでに入口は塞がれている。

だが甘い！

「とつー…」

「…何いー…」「…」

教室の外…つまり、グラウンドに向かつて僕は窓から飛び出す。

一瞬の浮遊感の後、僕は重力に引かれて落下していくが地面に激突する瞬間、激突の衝撃を受け流すように地面に着地する。魔法も何も関係ない、ただの純粹な受け身だ。

…と言つても、覚えたのはついこの前なんだけどね。

よし、これであいつらから逃げる事が…と思ったのが甘かった。教室の窓から次々と消防隊で使われるようなロープが垂れ下がってきて、次々と教室から奴らが降りてくる。

おのれ、あこひらこつのに間にこんな技術を覚えたと言つんだ！
だが甘い！

まだまだ様々な局面に対応するために、付け焼刃だけど身に付けて
た技術はたくさんあるんだ！
なんとしても逃げ切つてみせる！

「遅い……」

その日、僕が木下さんとのところに行けるはずはなく……
僕が木下さんから折檻を受けたのはいつまでもなかった。

翌日、

第十一話（後書き）

次回はもっと早く投稿したいです…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6553x/>

バカとデバイスと魔導師～バカが奏でる絆の曲～

2012年1月5日18時46分発行